宇宙戦艦ヤマト冥界譚【第8稿】

遠野 秋彦

御意見御提案は歓迎します

E-Mail: kirarin@autumn.org

Twitter: @autumn009

Blog: <http://mag.autumn.org/default.modf?s=yamato>

プロローグ

探索艇はエンジンが火を噴き落下しつつあった。

「くそっ!」古代は叫んだ。「肝心な時になんてこった」

エンジンがオーバーヒートしたのだ。

「馬鹿野郎!」と後席の島が叫んでいた。「あれほど教えられたことを忘れたのか。100式探索艇のブロック80はエンジンが粗悪だからいきなりスロットルをフルに入れるなど。オーバーヒートするから前段階で30秒待ってからフルに入れろと教えられたじゃないか」

「これがブロック80だなんて、今更言われても遅いよ」

「乗りこむときに気が付かなかったのか。タンデムの複座タイプはブロック80にしかないぞ。他のブロックのタンデムタイプは三座モデルしかない」

「し、しかしだな。あそこでエンジンを全開にしないと敵の偵察機に置いて行かれるところだった」

「下らない言い訳をするな」島は叫んだ。「それより早く機首を上げろ。この機体はもう救えない。何とか上手く胴体着陸させて俺達は生き延びるんだ」

「着陸脚は出ないのか? リフトエンジンは?」

「さっきから操作してるが動かない」

「こうなったら運を天に任せて胴体着陸に掛けるしかないか」

「ともかく燃料は全部投棄しろ」

「わ、わかった」古代は燃料タンクに残った燃料をまとめて投棄させた。これで不時着後に燃料が爆発して巻きこまれて死ぬ確率は減った。

「古代、舵はどれぐらい効く？」

「方向舵には反応がある。向きは多少変えられる。昇降舵は反応が無い」

「フラップとエアブレーキは？」

「フラップはさっきから速度を殺すために全開で降ろしている。エアブレーキは操作しても反応が無い」

「分かった。それじゃ、九州方面に機首を向けるんだ」

「なぜだ？」

「ベース・カノヤの救助隊をあてにできる。このへんだとあそこがいちばん近い」

「でも、ベース・カノヤまではとても無理だぜ」

「可能な限り近づければ助かる確率はアップするんだ」

「分かった」

「現在の高度は？」

「1万フィートを切った」

「地面とキスをするまであと何分ぐらい飛べそうだ？」

「現在の降下速度だと、良くて3分」

「無線で救助を求める時間ぐらいはありそうだな」

後席の島は通信機を操作して救難信号の発信を始めた。

操縦桿を握りながら古代は考えた。

どこで間違っただろう。

古代の兄は、地球を侵略してくる謎の宇宙人ガミラスに殺された。

護衛隊長だった古代の兄は、艦隊司令官の沖田に見殺しにされたのだ。

沖田と旗艦だけは帰り、兄と兄の艦は帰ってこなかった。

沖田は信用ならないが、ガミラスにも敵意を燃やしていた。

だから、偵察機の出現の報に、勝手に探索艇に乗りこんで飛び立ったのだ。

本当は戦闘機の方が良かったが古代達がいる訓練基地にはそんな素敵なものは無かった。

だが勝算はあった。

ガミラスの偵察機が武装していたという話は無く、速度のために装甲を犠牲にした偵察機は当たりさえすれば落とせる可能性があった。そして、探索艇も非武装だが、カッター用のレーザーを備えていた。あれを一撃でも浴びせることができれば、偵察機を撃墜出来る可能性があった。

しかし、現実は違ったようだ。

古代が我に返ったとき、どこにも偵察機は見えなかった。どうやら偵察機は得意の加速であっさり探索艇を振り切ったようだ。この加速力なら、たとえオーバーヒート問題が無い探索艇で飛んできて追いつくのは無理だっただろう。武装では無くエンジンの問題で追撃など夢また夢だった。

「古代」と島が呼びかけてきた。「今、救助隊と連絡が付いた。あっちからアドバイスがある。キャノピーの大気圏突入用耐熱シールドを展開しろ」

「なぜだ？」

「キャノピーの破片が飛び散りにくくなり、生存できる確率が上がるそう。わずかでもな」

「わ、わかった」

古代はキャノピーの耐熱シールドを展開させた。キャノピーが膜で覆われた。幸いなことに、その機能は動作した。

しかし、僅かな生存の可能性と引き替えに、古代は視界を失った。

まだ動く計器を見ながら不時着をさせるしかなかった。

やがて運命のタッチダウンの時間が来た。

ずっと静かに落ちる感覚に続いて、大きな衝撃が伝わってきた。

古代はキャノピーを開こうとした。

しかし開かなかった。

島が叫んだ。

「機体が歪んで、開閉機構が動かないんだ。力を入れて押せ！」

島も一緒に力一杯押すとキャノピーはやっと開いた。

視界が開いた。

赤い大地がそこにあった。

海が干上がった大地だ。

今どきの地球にはどこにでもある。

ガミラスの遊星爆弾による無差別爆撃の結果だ。

いや、無差別というのは当たっていない。ガミラスは用意周到に、到着位置を重複させないように爆弾の雨を降らせてきたのだ。既に地球に健康な土地は無い。放射能で汚染された大地があるだけだ。

「古代、何をぼんやりしている。機体から離れよう。どこに燃料が残っていて爆発するか分からない」

「あ、ああ。そうだな」と古代はうなずいた、

機体から離れて振り返ると、燃えやすい燃料を捨てたおかげで、機体の火はほとんど消えていたが、機体の破損状況は酷く、もう修理できないことは明らかだった。

「島、ここはどこなんだ？」

「九州の坊ノ岬の沖だな」

坊ノ岬の沖……。それは海があって初めて意味を持つ表現だ。今の地球に似つかわしくない表現だ。

「あの丘の上で救助を待とう」島は近くの丘を指さした。「あそこなら目立つ」

「分かった。行こう」古代はうなずいて、島に続いた。

だが、先行した島は意味不明の言葉を興奮して叫んだ。

「どうした島」

古代は慌てて追いかけた。

そして、同じものを見た。

大昔に海の底に沈んだ戦艦の残骸だ。

赤さびた鉄の塊が半分地面に埋まって鎮座している。

「大昔の戦艦だよな」と古代はつぶやいた。

「確かに、大砲らしいものも多数ある。民間船ではないな」

「どこの国のなんていう戦艦だろう」

「あれは……沈没位置からして戦艦大和だ。世界最大だが、日本の戦艦だ」

「大和か」

「ああ、考えちゃうよな」と島はその場に座り込んで言った。

「何をだ？」

「あの残骸は偽装で、本当は中で最新鋭の宇宙船が建造中なんだ。そして、地球の放射能を除去してくれる魔法の装置を気前の良い女神さまが待つ星から取ってきてくれる。そんな夢想を考えるとスカッとするよな」

「島……」

「冗談だ。気にするな」

「いやその」

「分かってるって。地球の現状は、そんな冗談を飛ばせるほど悠長では無い。待たなしなんだ。ここで何もしなければ人類は滅びる。それは分かっている」

「俺はそれほど悲観はしていない」

「どうしてだ？ まさか本当にあの残骸の中に最新鋭宇宙船が隠されているとでも？」

「そうじゃない」

「じゃあ何が言いたいんだよ、古代」と島は古代の頭をヘルメット越し

に小突いた。

「俺達が火星でやってきた特殊訓練の本当の目的はまだ知らされていない。人類には生き延びるための計画がまだある」

「計画? どんな計画だ?」島が笑った。

「さあ」古代や頭をかこうとして、ヘルメットに手がぶつかった。

しかし、人類の切り札はまだあるはずだ。古代はそう信じた。これで終わりであるはずがない。最後の切り札はまだどこかに隠されているはずなのだ。

では、その切り札はどこに隠されるだろうか。

地球全土が遊星爆弾の攻撃対象になっている以上、切り札は偽装されているはずだ。つまり、偽装した上でガミラスに見える場所に置いてあるはずだ。

たとえば……。

たとえば、あの戦艦大和の残骸の中に。

その時、確かに古代には見えた。

残骸を粉碎しつつ内部から出現する最新鋭巨大宇宙戦艦の勇姿を。

しかし、よく見ると赤さびた鉄の塊はあくまで赤さびた鉄の塊であった。動きは無く、ただの残骸のままだった。

そのとき、円盤形の救助ヘリが上空に飛来した。

古代と島は手を振ってヘリに合図を送った。

第1章・発進編

ブザーが2回鳴った。

そして続けてスピーカーは告げた。

『火星で訓練中の古代、島の両名は不時着した謎の飛行物体を調査せよ』

古代は飛び起きた。

ブザー2回は何だったかな。

訓練警報だったかな。訓練のために想定された事件の発生。ぼやぼやしていると評価を差し引かれてしまう。

いや、違う。2回は本物のはずだ。

古代は頭を振った。

「今、冥王星で戦闘中なんだ。どっちかの船が落ちたんじゃないか？」古代は言った。

島は笑った。「冥王星は遠すぎるよ。光の速さでも5時間以上かかる。まして重い宇宙船ならもっと掛かる。その上戦闘が起これば敵が必要なんだぜ」

島はいつもガミラスを馬鹿にするが、そんな地球人ばかりだから、地球はこうなったのだ。古代は怒りを感じたが、それは胸にしまった。それより任務だ。

「ともかく行こう」島がうながした。「命令は本物だ。何かが不時着したらいい」

「そうだな」

訓練基地のドームから探索艇が離陸した。

古代は眼下の赤い大地を見下ろしつつ言った。

「こうして見ると、今、俺達は地球を飛んでいるのか火星を飛んでいるのか分からないな」

「既に地球に緑の大地はないからな」と島はうなずいた。「俺も時々、どの訓練基地で訓練中か分からなくなるよ」

「はははは」と古代は笑った。

その時、通信機に教官からの連絡が入った。

『落下した宇宙船は地面に激突する寸前に脱出カプセルを発射した。訓練基地『火星』所属機は、宇宙船よりも先に脱出カプセルに向かえ。生存者がいれば救出すること』

「了解」と島が伝えた。

「どうした古代?」

「いや何でも無い。ここは火星に決まっている」

「見えてきたぞ、アレだ」と島が言った。

見慣れない形の黄色い宇宙船の残骸が燃えていた。

しかし、宇宙船本体に向かうと教官に怒られる。

ここで真っ先に向かうべきなのは、宇宙船から射出された脱出カプセルだ。

古代はゆっくりと探索艇を着陸させた。

そして飛び出した。

「おい、古代待てよ」

「後から来い」

脱出カプセルの蓋は開いていて、中で美しい女性が倒れていた。

古代が助け起こすと既に事切れていた。

美女の手の中にカプセルがあった。

古代はそのカプセルを手を取った。

「どうだった?」

「死んでいる」

「そのカプセルは?」

「この人が持っていた」

古代は確信した。

このカプセルこそ、地球の運命を左右する重大な情報に違いない。

島は、死んだ異星の美女に黙祷していた。

ドームに戻ると、次の連絡が来ていた。

『冥王星』の帰りに帰投する 225 号船英雄号が火星に立ち寄るので便乗して地球に戻るように、とのことだった。225 号は、おそらく人類が最後に設計した宇宙船になるであろう AU 型の最初の一隻にして最後の一隻だろうと言われていた。英雄号の名前は AU 型という呼称からマスコミが名

づけて流行らせた。

しかし、英雄号に便乗して帰還せよとは、訓練の終了を意味した。

「艦隊旗艦に便乗できるとは運が良いぞ」古代は言った。「随伴する小形の艦は居住性が劣るからな。下手をすれば相部屋どころか、同じハンモックを交代で使う羽目になる。兄さんの雪風なんか、スペースが無いから乗組員はほとんど家族も同然だよ」

「まあそういうことにしておくよ」と島は笑った。

古代と島は探索艇に乗りこんで、基地上空に飛来した英雄号にドッキングした。

しかし、古代はおかしなことに気付いた。英雄号しかいないのだ。

「兄さんの雪風はどうしたんだ」

島は笑った。「おまえの心の中で永遠に戦い続けているのだろうさ」

「まさか。兄さんがやられたっていうのか?」

英雄号のブリッジには立ち入りが禁止されていたので、古代と島は英雄号の沖田船長には会えなかった。

『地球』基地に帰投後、下船するときたまたまタイミングが合い、古代は沖田の姿を見ることができた。

古代はつかつかと歩み寄り、沖田を問い詰めた。

「兄さんの雪風はどうしたんですか!」

沖田は目を見開いた。

「君は?」

「古代守の弟です」

「古代進かね?」

「はい」

「そうか君がああ……」

「す、すみません」と島が出てきて頭を下げた。「こういう奴なんで笑って許してやってください」

「そうか。こういう奴か」と沖田は重々しく頷いた。「ならば私も答えねばならない。古代守は男だった。勇敢な男だった。だが、彼はもう帰ってこない。許してくれ給え」

「沖田さん、それはどういう意味ですか!」と島が叫んだ。

しかし、古代は呆然となった。

兄さんが……死んだ?

「島君だったね。君のことは聞いている。今の言葉はあくまで古代君向けだ。君向けには別の言葉がある」沖田は島に向き直った。

「自分にいったいどのような……」島が驚いた顔になった。

「時には古代君に同調することも大切だ。はやくガミラスを滅ぼし人類を救済しなければならない」沖田は言った。

「ガミラスを滅ぼす……?」

「たとえ、わしや君が死ぬことになろうとも、ガミラスを滅ぼし人類を救済しなければならない。分かるね?」

「は、はい……」島はうなだれた。

古代は少しだけいい気味だと思った。ガミラスの話を揶揄して馬鹿にすることが多い島だ。今の言葉は少し堪えたようだ。

そのあと、2人は所属する学校に向かった。

そこで担当教官から大目玉を食らった。落第とまでは行かないが、総合成績が思わしくないからだ。

「罰当番として地下格納庫を掃除しておけ」

教官からそう言い渡され、古代と島はとぼとぼと地下格納庫に向かった。

モップを動かし疲れて、壁にもたれて目を閉じていると、古代の耳に信じられない警報が飛び込んできた。

『九州坊ノ岬沖の戦艦大和の遺跡の近辺に敵偵察機出現』

古代はハッと目を開いた。

その時に島が格納庫に来た。

どうやら今の放送を聞き落としらしく平然としている。

「古代。いいことが分かったぞ。あの船の正体と死んだ女性の名前だ。女性の名前はサーシャ。持っていた情報カプセルは航行中に産まれた娘の身分を示す電子書類。あの船は亜光速船の初代モデルで、移住先を探しに地球から発進したものの見つからず帰ってきただけらしい」

しかし、古代は後半の話を聴いていなかった。

そうか、あの女性はサーシャというのか。

だが、今はそれどころではない。

偵察機が来たというのに、誰も出撃しようとしなない。

英雄号以外すべて失われた沖田艦隊の圧倒的な負け戦にみんなやる気を失っているようだった。まるで「出ていっても落とされるだけ」と思い込んでいるかのようだった。

「なあ島。憂さ晴らしに空のドライブと行かないか？ 丁度ここに燃料が入ったままの探索艇もあるし」

突然島の表情が明るくなった。「いいな、それは。でも、何と言う名目を付けるんだ？」

「俺は自主訓練飛行の離陸許可があと1回分残っている」

「分かった。君に乗ろう」

古代と島は目の前の機体に乗れこんで離陸した。

管制塔は「自主訓練飛行」とだけ告げるとうるさいことは言わなかった。……そして不時着した。

アフターバーナー全開でフルスロットルに入れたらエンジンがオーバーヒートして飛び続けることができなくなったのだ。

ベース・カノヤから飛来した救助ヘリはロープを落とし、機体内部に古代と島を収容した。

しかし、驚いたことにヘリにはロボット一体の他には女性が1人しか乗

っていなかった。

「君が操縦士？」と島は質問した。「手当は誰がするの？」

振り返った彼女は、驚くほど不時着した異星人の女性に似ていた。

「何を驚いているの？ 私は森雪。人手が足りないの、看護師もパイロットもこなします」

「えっ？」その言い方の凄みに古代は驚いた。「その若さでどっちもエキスパートなの？」

「そうよ。アナライザー、操縦を代わって」

「自動操縦ナラ自分デモ安心」赤いロボットが操縦を交代した。

森雪はいくつかの道具を古代に当て、身体を調べた。

「かすり傷だらけね。放射能も致命的なレベルでは浴びていないわ」看護師の口調で森雪は言った。「後でベース・カノヤの大病院に立ち寄って。そこで治療すればそれで大丈夫だと思うわ。基地まで行けば佐渡先生もいるし」

森雪が島の診察を始めると、古代はロボットに耳打ちした。

「あれは誰だい？」

「カノヤノ大美女。森雪。ナンデモデキルスーパーウーマン。ベース・カノヤノ大病院ノ一輪ノ花。ファンガ多イノデ、惚レタラダメデス」

「惚れたらダメ？ ホントかよ」

「本当デス。森サンニ惚レテスカートメクリヲ繰リ返シタラ、ベース・カノヤニ居ヅラクナリマシタ」

「スカートめぐりって、そんなことはするなよ」古代は改めて森雪を見て言い直した。「いや、やってくれ。俺が見ているところで」

「オ断リシマス。スカートハアクマデ自分ノタメニメクルノデス」

「融通が利かないロボットだな」

ベース・カノヤに着陸すると、森雪は古代と島を案内して病室に連れて行った。

そこには、豚を患者として看ている医者がいた。

「すぐ済むからちょっと待っておれ」と医者と言った。「ああ、わしは佐渡酒造という。見ての通り、獣医ってことになっておる。もはや人間と動物の医者を分けて育成できるほどのゆとりがないものでな。人間も看るが動物も看る」

そこで、順番を待つてから古代と島は治療を受けた。

「そういえば森君はどこに行ったんだろう?」

「緊急呼び出しを受けたとか何とか。あれは優秀じゃからのう。優秀すぎるぐらいじゃ」

その時、古代と島の携帯通話機が鳴った。

2人が出ると教官だった。

「馬鹿者。貴重な機体を1つお釈迦にしおって」

2人は小さくなった。

「そう怒ってやりたいが、今回は別件だ。2人は迎えのエアカーに乗れ。その先で待っている人物が新しい君たちの上司だ」

「まさか。これで卒業ですか?」

「そうだ。計画の準備は全て整ったというのが本部の判断だ」
通話が切れると、佐渡も電話を切るところだった。

「どうやら同じエアカーらしいな」と佐渡は言った。

「佐渡先生も?」

「わしにも召喚命令じゃ」

エアカーに乗ろうとすると、ロボットのアナライザーが付いてきた。

「私モ連レテ行ッテクダサイ」

「お前は無理だ。このエアカーは4人乗りだがお前のサイズは人間1人より大きそうだ」

「ワタシ、嵩張ラナイ」

アナライザーは自分のパーツをすぐに分割してコンパクトにシートに積

載してしまった。

「やれやれ。1人分のスペースで済むのならいいよ」と島が苦笑した。

エアカーは地下チューブを走った。手持ちぶさたになった佐渡は抱えてきた酒瓶から酒を飲み始めた。

エアカーを降りると、そこは地下の大工場だった。

スピーカーが告げた。

「古代、島、佐渡先生。第9エレベーターに乗ってください」

エレベーターが上昇すると床が傾いた。

「おい、このエレベーター斜めじゃないか?」

「そうだ。確かに斜めだ」

ドアが開くと、宇宙船のブリッジだった。

「よく来たな」と振り返ったのは沖田だった。横に森雪もいた。どうやら先行して男性組とは別に呼ばれたらしい。

「船が横に傾いておるがな。気をつけてくれたまえ。なに、水平をきちと決められる熟練工がもうおらんので、極秘ドックそのものが傾いて建造されているのだ」

ニコニコと見渡す沖田がアナライザーを見て表情を変えた。

「ん? おまえは?」

「一緒ニ連レテ行ッテクダサイ。病院ゴトキ場所、私ノ能力發揮デキナイ」

「確か見たことがあるな。ベース・カノヤのロボットか。しかし、ベース・カノヤの備品を勝手に持ち出すわけには……」

そこでアナライザーが古代に耳打ちした。

「スカートメクリシマスカラ、口添エヲオ願イシマス。ベース・カノヤニハ敵ヲ作リスギマシタ。私ハソコロ離レタイノデス。ソシテ、森サンカラ離レタクナイノデス」

古代はアナライザーが優秀だったことを説明し、同乗を認めるように沖

田を説得した。

「分かった。古代がそう言うのなら、後でこちらからベース・カノヤに連絡しておこう。ロボットの予備要員が欲しいのは確かだ

「それより沖田さん、この船はいったい……」

「そうか。それを説明する必要があるのか。古代のために古代の分かりやすい言葉で説明しよう。これが地球の切り札のヤマトだ」

「まさか。あの戦艦大和の残骸の中でこっそり建造しているという。宇宙戦艦ヤマト!」

「わしが言いたいのはそのヤマトだ」

「ヤマト……」

「そうだ。君が信じる宇宙戦艦ヤマトだ」

「これでガミラスと互角に戦えるのですね?」

「しかし、ヤマトはガミラスと戦うために作られたのではない。もっと遠大な計画があるのだ」

「ガミラスと戦うよりも遠大? それはなんですか?」

「地球と人類を救うのだよ」

「まさか」

「そのために古代、島の両名は特別な訓練を受けてきたはずだ。島にはこの船のメインパイロットになってもらう」

「僕が? いきなりこんな大型船のメインパイロットですか?」

「この任務は特殊なのでな。それにベテランも死にすぎた。生き残りも、過酷な宇宙の旅にどこまで耐えられるか分からない。若い島君に賭ける。そのような決定がなされていた」

「自分は聞いていません」

「実は最後の最後まで人選は確定していなかったのだ」と沖田は言った。「最後のテストとして火星に古代と一緒に送り込んだ。2人切りで過ごすことで、そこで古代との相性を見たわけだ。古代との相性が悪かった場合

は、別の誰かと交代もあり得た」

「では僕は合格ですか？」

「そうだ。数時間前に古代が探索艇で飛行しようとしたとき、古代は迷わず後席に島を誘った。あれで確定だ」

「分かりました。ありがとうございます」

「礼を言うのは早い。長距離航海の詳細については、後で島君だけ別扱いでレクチャーする。過酷な任務だから、抜けるチャンスは与えられる」

「島だけですか？」古代は質問した。

「そうだ。島はこの船のメインパイロットなのだ。とりあえず、メインパイロットの席に座って具合を見てたまえ」

「了解です」島はパイロット席に着いた。

「島だけなんてずるいですよ」と古代は抗議した。それはそうだ。島だけ重大任務が与えられるのでは面白くない。

沖田は言った。「この船にも武装は存在し航海を邪魔する外敵は排除せねばならない。そのための戦闘は古代が担当だ」

「えっ？」

「航海と戦闘。2本の柱は島と古代だ。これで納得してくれるか？」

「はい。では、島の席の隣の武装制御コンソールは……」

「君の席だ」

「わ、分かりました」古代は島の隣の発射トリガのある席に座った。

「森君はそっちのレーダー手の席に。先生は別室の医務室に待機を」

「私ハドコニ座レバ？」アナライザーが言った。

「君は古代の隣の予備シートに座りたまえ」

「アリガトウゴザイマス」

アナライザーも定位置に座った。

沖田はブリッジ奥の最も高い席に座った。

古代はトリガを握りしめて決意を込めた。

その時、船が震動した。

「この震動は?」と島が言った。

「一部の工作機械の取り外し中だ」と沖田は説明した。

しかし、古代は納得できなかった。

目を閉じて考えた。

それだけで、これほどの震動が伝わってくるはずがない。

そうだ、これはガミラスの空襲だ。

「いや、これは空襲だ」と沖田が言った。

古代は目を開いた。

「そうか。あの偵察機の報告で場所が分かってしまったのか」と古代は唇を噛みしめた。「あのとき落とせていたら……」

「古代、それより反撃しないとやられるぞ」島が横から真剣に叫んだ。

「しかし、この船はまだ動かない」

「そうだ」と沖田は言った。「補助エンジン動かぬ我らは瀕死の狸だ」

艦載機を発進させた敵空母は降下してきた。

空母の武装で直接とどめを刺す気なのだろう。

「補助エンジンはまだ動かないのか」

その時作業員からの報告が入った。

『補助エンジン準備完了』

そのとき、沖田の目が見開かれた。

「補助エンジン始動っ! 宇宙動力線コンタック! 傾斜復元、船体起こせ!」

「動き出したぞ!」古代は叫んだ。

慌てて武器操作パネルを操作し、主砲を敵空母に向けた。

「主砲全自動射撃準備。完了。スイッチ艦長に渡します」

「うむ」と沖田は自分の席の発射トリガに手を掛けた。「第3砲塔0.2秒遅れているぞ。しっかりしろ、訓練と同じだ、慌てるな」

「そんなことを言っても……」

しかし、乱れていた数値が全て揃った。

驚いて振り返ると、森雪が自分のコンソールから古代に助け船を出していたのだった。

「総員ショックに備えろ、発射!」

1 回の斉射で接近しすぎた敵空母は船体を貫通され、その場で大爆発を起こして轟沈していった。

「古代! 大丈夫か!」と島に肩を叩かれて古代は我に返った。

古代はトリガを掴んだまま、意識が飛んでいたようだ。

「ああ、大丈夫だ」と古代はゆっくりとトリガから手を離した。

「まったく大した船だな。この船は」と島はブリッジを見回しながら言った。「この船があれば、地球を救える。そんな気がしたよ」

「あ、ああ。そうだな」と古代は頷いた。

「作業は次のステップに入る」

「次?」

「沖田さんが、本部前広場でマスコミ中継のために人類再興計画の説明を行う。ついでに乗組員一同は整列して沖田さんの演説を聴くことが求められている」

「せっかく乗ったこの船を降りるのか?」

「マスコミの前で行進しながら乗りこむ必要があるのさ。計画の意義をアピールするためにはね」

「下らないマスコミ対策か」

古代と島は船を降りて、エアカーで本部前広場に向かった。

他の乗組員は既に集まっていた。

沖田、森、佐渡、アナライザー……

あれだけ巨大なヤマトを動かすには 6 人だけとは人数が少ないなど思った瞬間、広場は百人以上の乗組員で満たされていた。

沖田は台の上で説明していた。

「本船の戦闘班長古代進が墜落した宇宙船から回収したメッセージカプセルによれば、地球から 14 万 8 千光年離れたイスカンダルが、放射能除去装置コスモ・クリーナーD を渡してくれるという。そして、光速を超えるワープを行う波動エンジンの設計図も一緒に入っていた。そして我々はそれを装備した宇宙船を建造した。宇宙戦艦ヤマトだ。人類絶滅まであと 1 年と言われるが、我々は 1 年以内にコスモ・クリーナーD を手に入れて地球に戻らねばならない」

それから無数の人々が歓声と罵声を浴びせる中、乗組員一同はヤマトまで行進を行った。もちろん実際に行進するのは最初と最後だけで中間はエアカーによる高速輸送だ。

古代と島はやっとブリッジに戻った。

既に多くのスタッフが仕事をしていた。

「古代君の下で砲術を補佐する南部です」

「同じく戦闘隊を指揮する加藤です」

「島君の下で通信を担当する相原です」

「同じく操縦補佐の太田です」

「よろしく!」と一同は唱和して言った。

「みんな若いな」と島が言った。「同い年か?」

「聞いていませんか? ヤマトの乗組員 114 名のほとんどは 18 歳です」と相原が答えた。

「みんな 18 歳だって?」

「それ以上の年齢は、沖田艦長、真田工場長、佐渡先生、徳川機関長ぐらいじゃないかな」と相原はうなずいた。

「俺も 18 歳だから人のことは言えないが、18 歳なら普通は高卒だぞ」

「人手がもう残っていないのですよ」と相原は言った。「僕も、アマチュア無線や BCL の経験が長いので通信班長に抜擢されていますが、自分以

上の技術を持った人達は歳を取りすぎたか既に死んでいます」

「そうか。こんな若い俺に戦闘班長という人事もようやく分かったよ」

「分かった。職務ではこちらが上司だが、オフの時間はもっとざっくばらんに行こう」と島が笑った。「お互い18歳なんだ」

「俺からもよろしく頼む」と古代も微笑んだ。

「ところで加藤」と古代は黒い制服の男に呼びかけた。「戦闘隊とは?」

「ブラックタイガー隊ですよ。古代さんのコスモゼロには劣りますが、集団戦法でヤマトをサポートして見せます」

「南部」と古代は南部に呼びかけた。「ヤマト建造したという南部重工と同じ名前だが、関係があるのかい……」

「南部重工はうちの親の会社です」南部は頭をかいた。「甘いと言われてオヤジに軍隊にぶち込まれましたが、こうして親の会社の作った船に乗ることになるとは。皮肉なものですね」

「なんだそうだったのか。これからもよろしく頼む」

「はいっ!」

その時、ブリッジに沖田が来た。

沖田は言った、「古代、島、船内を説明する。付いてこい」

「はいっ」古代と島は沖田の後に続いた。

沖田は彼らを格納庫に連れて行った。

「ここが格納庫だ。探索艇や、救難ヘリ、新型機のコスモゼロなどが搭載されている」

「凄い量の飛行機が並んでいますね」と古代が感嘆の声を上げた。「これだけのスペースにブラックタイガーまで詰め込まれている」

「次に行くぞ」と沖田は言った。

沖田は彼らを医務室に連れて行った。

「次は医務室だ」

佐渡が出迎えた。

「医務室最大の装備は冷凍睡眠室ちゅうてな。冷凍されて眠って過ごす道具じゃ」

「ちょっと待ってください」と古代は言った。「佐渡先生。冷凍睡眠室というのは亜光速船の装備ではありませんか？ 長期航海する宇宙船に必ず装備されると聞いたことがあります」

「そうじゃな」

「でも超光速航行できるヤマトに冷凍睡眠室は要らないのでは？」

「古代、おまえさんはがさつに見えて意外と繊細じゃな。その通り」

「その通りとは？」

「この船は亜光速船だということじゃ」

その一言で古代は理解した。

もともと亜光速船として建造されていた船体に、後から波動エンジンを追加したのがヤマトなのだ。だから、エンジン以外の設計は亜光速船そのものなのだ。

「では出番が無い装備ですか？」

「いやあ、船内でいざこざがあれば、誰かに眠ってもらう必要があるかも知れないよ」

「無いと信じます」

「そうだといいねえ」

隣のスペースは森雪が待っていた。

「こちらでは、あらゆる映像を投影して乗組員のメンタルケアに努めます」

「ゴー緒ニイカガデスカ」アナライザーが美女ダンサーと一緒にフラダンスを踊っていた。

しかし、森雪が不機嫌そうにスイッチを切り替えると雪景色に変化した。美女は1人もいなくなった。

「南国ガ、美女ガ……」

「そんなに南が良ければ戻してあげる」

森雪がスイッチをまた操作すると、今度は砂漠になった。

「熱イ、熱イ、直射日光ニ当タッテイテハ内部温度ガ上ガリスギテ暴走シテシマウ」

森雪はスイッチを切った。

部屋の見かけは何も特徴が無い艦内の光景に戻った。

「次に行こうか」と沖田がうながした。

次は工作室だった。

「ここのご自慢は」と工場長の真田志郎が挨拶もそこそこに言った。「この万能工作機械です。何でも作れます。資源さえあれば」

「へえ」と古代も島も目を丸くした。

「信じていませんね。ならばデモをしましょう。たとえばアストロバイクを作ろうとすると……」

機械が即座に空飛ぶバイクを組み立てた。

島は言った。「真田さん。もしかして、小さなヤマトの模型は製造出来ませんか?」

「お安い御用……」

真田は模型のヤマトの組み立てキットを製造して島に渡した。

「あとで弟に送ってやろう」と島はそれを仕舞い込んだ。

「あの」と古代は質問した。「その機械で生き物は作れないのですか?」

「なぜそう思うんだね?」

「いえ。絶滅してしまった昆虫が多くあります。人が絶滅し掛かっている今言うのも何ですが。失われた昆虫を作り出すことができれば、それは素晴らしいと思います」

「古代君、よく覚えておきたまえ」

「はい」

「それは科学というものの傲慢なのだ。人は人として、生き物は生き物

として生きてい死ぬべきなのだ。一度失われた命を呼び戻すことは科学にもできない。また、してはならないのだ」

「はあ」古代は意外な真田の言葉に頭をかいた。

「では森雪そっくりの人形は作れますか？」島が質問した。

「無機物でしかない人形なら作ることは可能だが、動機が不純そうだな。服を脱がしてみる気か？」

「し、失礼しました」

古代と島は逃げ出した。

通路を歩きながら沖田は古代に告げた。

「古代」

「何でしょう。艦長」

「艦長か。ははは、それはいい」

「あの艦長と呼んではいけなかったのでしょうか？」

「構わんよ」

「それより用件は何でしょう？」

「森君とアナライザーの関係についてだ」

「関係……といますと？」

「今どき、アナライザーのような汎用ロボットが完動状態で残っているのは珍しい」

「はあ、確かに。先輩から昔はロボットが掃除や洗濯をしてくれたと聞いています。自分達は自分でやりましたが」

「アナライザーは分析用に製造されたロボットだが、すぐに払い下げられてペット扱いになった。その時にスカートめくりを行うソフトが追加されたようだ」

「でもなぜ……」

「金持ちが自分のハーレムに持ち込んで、女達が困る顔を楽しむためだったらしい」

「はあ」

「その後、遊星爆弾で負傷した所有者が病院に担ぎ込まれた。身の回りの世話のためにアナライザーも連れ込まれた。その後、所有者は病院のベッドで死亡し、アナライザーは所有者のいない、いわゆる自由ロボットになったのだ」

「なぜそこまで詳しく」

沖田は端末を見せた。「病院から委細の返答があった。アナライザーはこちらが連れて行っても構わないそうだ」

「それで、森さんとの関係とは？」

「資料によると、アナライザーは特に森君に執着しているらしい」

「なぜですか？」

「汎用ロボットの自己学習結果のネットワークを解析できる技術者は既に残っておらん」

「真田さんでも無理でしょうか？」

「真田？ ああ、さっきの万能工作機械の解説をしていたと言う男か」

「どうでしょう？ 凄く頭が良さそうに見えましたが」

「彼のような天才ならあるいは可能かも知れんな」と沖田はまるで架空の概念を弄ぶかのように言った。

「では」

「可能性を弄ぶ気は無い。アナライザーは現状のままで連れて行こうと思う」

「森さんのスカートが航海中にめくられてしまいます」

「そうなる」

「森さんは嫌がると思います」

「我々はその気持ちに比べられるほどのゆとりを持っていないのだ」

「どういう意味ですか？」

「古代。個人的に1つ頼みがある」

「なんでしょう」

「もしも、森君とアナライザーが対立したら、森君の味方になってやってくれ」

古代は少し気分を害した。

確かにアナライザーのスカートめくりは見たい。

それは天災のようなものだ。

偶然見てしまうのは犯罪とまでは言えないだろう。

だが、意識的にスカートめくりを止めないのはセクハラだ。

やはり、沖田は兄を殺した憎むべき存在なのだろうか。

その時、古代は壁に埋め込まれた部品に **FOR PLAN OF SPACE CRUISER** と掘られていることに気付いた。

「スペース・クルーザーですか？」

「そうだ」

「宇宙戦艦ならスペース・バトルシップでは？」

「なるほど」沖田は笑った。「それは一理ある。もしも我々がこのフネを英語で呼ぶことがあれば、スペース・バトルシップ・ヤマトと呼ぶことにしよう」

「分かりました」古代はうなずいた。

沖田は最後に古代と島を機関室に連れて行った。

「ここが機関室だ。波動エンジンがある」

「私が機関室の責任者、徳川です」

「この波動エンジンとは何ですか？」古代は質問した。

「光より早いタキオン粒子を圧縮して時間と空間を飛び越えるのじゃ。この宇宙にいる限り、真空からエネルギーを取り出し続ける永久機関ということもできる。燃料補給なしに、イスカンダルと地球を往復できるぞ」

「永久機関ですか？」

「その通りじゃ！」と徳川が胸を張った。

「永久機関とは詐欺師の詐欺の定番ではないのですか？」

「かつて夢の永久機関を作り出したと嘘を付いた者は多くいる。しかし、今回こそは本物じゃ」

今回こそは本物と言った詐欺師も多いと思うが……という感想を古代は飲み込んだ。

「艦長はこのエンジンを信用しているのですか？」と古代は振り返った。

「ワカラン。予定された航海は遠大だ。それだけ酷使をして、エンジンが持ってくれるか分からない」

「いえ、本当に必要とされる速度を得られるのかです」

「確かに予定された最大速度まで、人類は誰も加速したことがない」

「失敗したら？」

「人類が滅びるだけだ」

古代はゾッとした。

「では行くぞ」と沖田は歩き始めた。

そこで古代は徳川に質問した。

「徳川さん、あなたは昔から沖田艦長と一緒に戦ってきた人ですね？」

「そうじゃ」

沖田は、顔を伏せ、何も言わずにそのまま機関室を出て行った。島は慌てて後を追った。しかし古代は残った。

「教えてください。艦長は、本当はどんな人ですか？」

「万に1つの可能性があるならそれに掛ける。それだけの勇気を持った人だ」

「でも、兄さんの雪風を連れて帰ってくれなかった人ですよ」

「古代君。あの戦いで肉親を喪ったのは君だけではない。あの沖田艦長も一人息子をあの戦いで亡くしているのだ」

古代はやるせない気持ちになって機関室を飛び出した。

島がエンジン点火の指揮を執っている声が艦内スピーカーから聞こえた。

古代はブリッジに上がった。

島は波動エンジンの点火に失敗していた。

「艦長、動きません!」

「もう一度点検せよ」

「はいっ!」

島はもう一度手順を繰り返した。

「すみません。連動スイッチがオフになっていました」

「しっかりしてくれよ」と古代は島を励ました。

「そうだ。連動スイッチは重要だ。波動エンジンと補助エンジンが連動しない。これがないと何も連動できない」と島は言った。

「そうだ古代」と沖田が言った。「連動スイッチは重用だ。それがなければ補助エンジンの回転を波動エンジンに伝達できない」

「連動スイッチだ。これさえあれば勝ったも同然だ」島が叫んだ。

「そうだ連動スイッチだ!」沖田も叫んだ。「覚えておけ、古代。連動スイッチさえ入れれば問題は解決されるのだ!」

「それよりミサイルが接近中です」と古代は言った。

古代は、まさにヤマトの発進を阻止するために落下中の超巨大ミサイルを見据えた。

「では全ての主砲と副砲を連動させて全門斉射で射撃を行う。古代連動スイッチを入れよ!」

「連動装置セット」

「主砲発射準備」沖田が命じた。

「主砲発射準備」と古代はトリガを掴んだ。

「ヤマト発進!」沖田が叫んだ。

ヤマトが振動し、古代は目を閉じた。

「この船の名前はヤマトで確定ですか?」と島が沖田を振り返った。

「いいじゃないかヤマトで。そういうことにしておこう」沖田はうなず

いた。

「分かりました。番号で呼ぶも味気ないし、仰々しすぎる名前もあまり好ましくありませんからね。では、ヤマト、発進します」

よく見ると視界が割れて外が見えた。

船体が岩を割って空中に浮遊していたのだ。

古代は主砲を操作し、ミサイルを捉えた。

時間が無かった。ためらえば、ミサイルがヤマトに命中しそうだ。

「ショックカノン、撃て！」

古代はトリガを引いた。

主砲副砲合計 15 門が同時に火を噴き、ミサイルに殺到した。

ミサイルが爆発し、ヤマト全体が炎と爆風に包まれた。

ハッと気付くとヤマトは正常に大気圏内を航行中だった。

「島。翼を出せ」と沖田が命じていた。「大気圏内で推進剤を無駄に使いたくない。翼で揚力を稼げ」

「はい。翼を出します」島が操作した。

古代はやっと理解した。

ミサイルの迎撃は成功したらしい。

今は通常航行中だ。

「このまま加速して大気圏外に出る。そこでエンジンを宇宙出力に増速して予定通りに航行する」

それから沖田は森雪の方を見た。

「森君、出発時にタイムロスがあった。改めて最適航路を計算してくれないか？」

「はい」雪は立ち上がり、ブリッジから出ていった。

「コンピュータも使えるのか。すごいな」と古代は島に囁いた。

「彼女だって、伊達にこの船に乗ってるわけではないだろう？」

「でもパイロットで看護師で航路計算までできるのは人間離れしていないか？」

「おまえだってそうさ。やたら好戦的に振る舞うかと思えば、急に昆虫研究に夢中になる。自然観察も得意だ。動物や天体を観察させたら右に出る者はない。プロも舌を巻く」

「そ、そうか？ 俺達お似合いなのかな」

「勘違いするな。森君のハートを射止めるのは俺だ」

「当分ライバルは続きそうだな」

「はははは」

しばらくして雪が戻って来た。

「計算結果が出ました」と雪が沖田にデータメモリを提出した。沖田は自分の端末にメモリを差し込んだ。

「月から火星か」

「はい、月から火星まで全力加速試験を行い、火星で船体を点検後、そのまま木星、土星をまわって冥王星まで行けます」

「冥王星か。かつては惑星にカウントされた準惑星だな」

「燃料の無駄を避けられる限り、各惑星の基地を巡って残された予備資材を回収して行けます」

「予備資材ですか？」と島が振り返った。「その話は聴いていません」

「うむ」沖田はうなずいた。「おそらく、人類がこの航海で救われた後の話を除けば、おそらくこのヤマトが人類最後の宇宙船だ。だから残された予備資材は可能な限り本船が回収していく。その許可はもらってある」

「では不足しているコスモナイトも」

「土星基地の採取場で回収して行けるはずだ」

「それは心強い」

「備蓄食料や、予備の反動推進剤も補充できるはずだ。予備ブースターもだ」

「それなら、計画が成功する確率がぐんと上がりますね」

「そうだな」

「艦長!」古代は叫んだ。「悠長に基地巡りをしていて、もしガミラスが来たら……」

「古代、その時はお前が頼りだ」沖田は笑った。

「はあ」

古代は沖田から頼られているのか揶揄されているのか分からなくなった。全力加速試験の前に古代はブリッジの自席で眠り込んだ。深夜帯に実施される全力加速試験を見落とさないためだ。全力加速試験とは要するにワープに違いない。人類が最初に光の速度を超えるのだ。それは見物に違いない。

しかし、非常サイレンで目が覚めた。

ワープテスト 30 分前だった。

「どうしたっ!」古代は叫んだ。

「ガミラス空母接近中」と南部が答えた。

「ガミラス空母の処理は自分に任せてください」と古代は沖田に見得を切った。

「しかし、ヤマトの全ての武器はつかえんぞ。ヤマトの全ての機器はワープに備えて動員されているのだ」

「はっ。南部、ブラックタイガーチームに出撃を掛ける」古代は命じた。

「自分のコスモゼロも用意させろ」

「いいな、古代。テスト前には必ず戻るんだぞ」沖田が念を押した。

「はいっ!」

古代はコスモゼロの格納庫に走った。

コスモゼロ。おそらく人類最後の宇宙機だろうと言われる小形宇宙艇だった。

開発段階では宇宙零戦 52 型と呼ばれていたものだ。

集団戦法でやっとガミラスと互角に戦えるブラックタイガーと違って、単独でガミラス機と互角に戦える新鋭機だ。ヤマトには古代が乗る機体しか用意されていない。

ブラックタイガーチームが艦底の発進口から発進するのを見届けてから古代はコスモゼロをカタパルトから発進させた。

そして、古代はヤマトに向かって発射されたミサイルを撃ち落とした。そのためにコスモゼロもヤマトに接近しすぎたがぶつからないで済んだ。そして、更に空戦を続け、ヤマトの無事を確保した。

敵機は後退した。母艦のミサイルの射程に間もなくヤマトが捉えられるからだ。

「今のうちだ。古代戻って来い」

沖田の命令に古代は全機帰還を命じた。

「宇宙零戦隊帰還中」と森雪の報告が無線で聞こえた。

雪の奴、間違えやがって。古代がそう思って振り向くと、後続の機体が全部コスモゼロだった。慌ててよく見るとブラックタイガーだった。

古代はコスモゼロを着艦させた。

加藤機が続いた、

「古代、加藤の宇宙零戦帰還。ブラックタイガーチーム帰還中」森雪の声が艦内スピーカーから流れた。

古代は慌てて加藤の機体を見た。

コスモゼロから降りてくる加藤が見えた。

「おい、加藤。いつからおまえコスモゼロに乗っているんだ」

「何を言ってるんです。自分は最初からブラックタイガーに乗ってますよ」

よく見ると加藤が降りた機体はブラックタイガーだった。

古代は近くの艦内通話の受話器を取ると森雪に繋いだ。「ヤマトの艦載機はコスモゼロとブラックタイガーだ。覚えておいてくれ。コスモゼロに乗

っているのは俺だけ。加藤はブラックタイガーだ。それから、宇宙零戦はコスモゼロの開発中の呼称だ。覚えて置いてくれ」

『あら、ごめんなさい』

その時加藤が叫んだ。

「古代、山本機が戻っていない」

「未帰還は出させない」

古代は必死に諦めムードの被弾機パイロットを誘導した。そして、ヘトヘトになりながら古代は彼の機体を着艦させた。

古代はブリッジに報告した。

「山本機、帰還しました!」

そして古代はブリッジに戻った。

自分の席に戻ると疲労が出て眠り込んでしまった。

椅子が浮遊したような気がしてハッと気付くと目の前に火星があった。

「島、もう火星なのか?」

「テストは成功だ」

「ワープしたんだな?」

「アッという間に火星。このスピード感を言うのならワープでもいいだろうな」

その時、それまで存在感が全く無かった真田が急に出てきた。

「船体の一部に損傷が見られます」真田が報告した。

「よし。火星に着陸して、資材の回収及び船体の修復を行う。修理さえ出来れば我々の旅にも希望が見えてくるな」

ヤマトは無人の火星基地に寄港した。

「懐かしいな」と古代は言った。

「何を言ってるんだ。俺達火星になんか来たことはないぞ」島は怒った。

「俺達火星基地で特別訓練を受けたじゃないか」

島は笑った。「ま、そういう意味では懐かしいよな」

「だろ？」

ヤマトは宇宙船ドックのある大きな基地に着陸しようとしたが、それは無理だった。半分壊れていたからだ。

「無人になって久しいからな。やはり一筋縄では行かないか」

「ガミラスの仕業だ。攻撃されたんだ」古代は叫んだ。

「ではガミラスの仕業としておこよう」沖田は言った。「ガミラスを警戒しつつ残った使えるような資材の積み込みを行え」

しかし、医薬品や補修資材はかなり調達できたものの、食料とエンジン補修用のコスモナイトはダメだった。

「木星に期待しましょう」と島が言った。「あそこなら、火星と違って大陸並みと言われる巨大ステーションがあるはずですよ」

「ジュピター・ステーションか」

「通称はコンチネント。まさに大陸並みに何でもあったと言われていませう」

「もっとも今は崩壊の危険もあると言われてるがな」

「大陸が崩壊する可能性はあります」

「それしか道は無い。リスクは高いがそうしよう」沖田はうなずいた。

「問題はコスモナイトですよ」

「あそこでもコスモナイトの備蓄があるか分からないな」

「コスモナイトだけは土星の採掘場に期待しましょう」

「そうだな。では、取りあえず木星の大陸に向かうとしよう」

ブリッジに戻ってきた古代は最後の部分だけをはっきり聞いた。

どうやら木星には大陸があるらしい。

しかし、木星はガスジャイアントだ。気体ばかりで陸地は無いはずだ。

まさか。伝説の浮遊大陸は地球では無く木星にあったと言うのか。

スウィフトが描写し、ミヤザキもかつて存在を描いて見せたという伝説の浮遊大陸。

もちろん、画家が描く挿絵や、アニメーターが描くアニメのコマのような大陸が存在するとは牧歌的に思っていない。しかし、浮遊大陸は本当にあったんだ、と主張する証言は残されている。

「では、島。ヤマト発進」沖田が命じた。

「ヤマト発進します」

ヤマトは火星を発進して、木星に向かった。

しかし、エンジンの故障は完治していなかった。

木星に近づくヤマトは問題を頻発した。

ヤマト艦内は通常 1G 加速することによって、床に向かう重力を発生させていた。しかし、エンジントラブルで加速が止まると必然的に無重力になる。

通常、無重力状態になる時間は短く、その時は椅子に座ってベルトを締めることになっていた。だから、それほど大きな問題は起きない。しかしエンジントラブルで不意に起こる無重力はそうではなかった。

古代は浮き上がる身体を必死にコントロールしながらブリッジに移動した。

「島。どうしたんだ」

「またエンジントラブルだ」

「このまま木星まで行けるのか？」

「問題ない。もう近くだし、慣性航行で黙っていても木星に行く」

「なら安心だな」

「いや。制動が掛けられないと木星のメタンの海に沈むことになる」

「島」と沖田が呼びかけた。「補助エンジンで上手く騙しながら飛んでくれ」

「了解。できる限りやってみます」島は冷や汗をかいた。

ヤマトは木星のメタンの大気の上層部に突入し、メタンの大気が抵抗を発生さえ、ヤマトは速度を落とした。

しかし、センサー類も正常に動作しているのか分からない状況で、島の山勘に頼るしか無い航行だった。

古代は自分の席で目を閉じて祈ることしかできなかった。

そのような航行が 30 分ほど続いた後、前方に何かの巨大な塊が浮かび上がってきた。

「大陸だ!」と島が叫んだ。

ヤマトは植物に覆われた伝説の浮遊大陸に叩き付けるように不時着した。衝撃が過ぎ去ると一同はホッとした。

「良かった。これでエンジンの修理ができる」と沖田が言った。

「しかし、コスモナイトが無いことには……」島が抗議した。

「あくまで応急修理だ。土星まで行ける修理で構わん」

そして、沖田が言った。

「森君はここで積み込める物資の探索を。アナライザーはそれを手伝え。佐渡先生は医薬品の探索。わしと島はエンジンを見に行く。古代!」

名前を呼ばれて古代はハッと目覚めた。

いつの間にか眠り込んでいたようだ。

「はいっ」

「おまえには留守番を頼む」

「なぜでありますか?」

「君にエンジンのことは分からないだろう。それよりも、何かあったらコスモゼロで掛けてつけくれ」

「分かりました」古代は沖田に敬礼した。

沖田が立ち去るとまた暇になった。

ブリッジでうたた寝をしていると、太田が叫んだ。

「古代さん、敵の偵察機です」

「なにっ!?」古代は跳ね起きた。「ヤマトを発見されるとまずい。加藤、ブラックタイガー出撃」

『無理ですよ』と加藤がスピーカーの向こうから抗議した。『ヤマトが不時着中で、艦底の発進口が開かないんです』

「今出られるのは、上部のカタパルトから発艦するコスモゼロだけか」古代は考えた。そして決断した。

「真田さん、後のことは頼みます」それだけ言い残して古代は格納庫に走った。

そして、コスモゼロに飛び乗り、発進した。

撃たれて被弾したものの、上手く後を取って偵察機の撃墜には成功した。意気揚々と帰還した古代だったが、ヤマトに帰還するとすぐに衝撃が走って古代はよろめいた。

「な、なんだ？」

慌ててブリッジに戻ると、ヤマト周辺に煙が上がっていた。

「どうしたんだ」

「ミサイルです」と南部が叫んだ。「敵の基地がこの浮遊大陸にある模様。偵察機の次はミサイルを撃ってきました。照準が甘くてヤマトに命中はしていませんが。しかし、このまま攻撃を受け続けると……」

「確率的に命中が出る恐れがある訳か」古代は考え込んだ。「上陸した者達は？」

「戻ってくる途中です」と太田が答えた。

「エンジンは？」

「今、応急修理完了という連絡が入ったところだ」真田が答えた。「ヤマトは飛べるぞ」

そこでエレベーターの扉が開き、島と沖田がブリッジに戻ってきた。

「よし、森君達が戻ったらすぐにヤマト発進だ」と沖田が叫んだ。

「了解」と島はパイロット席に滑り込んだ。

『森、佐渡、アナライザー、帰還しました』とスピーカーから森雪の声が流れた。『現在3名とも本船のエアロック内』

「よし、ヤマト発進」

古代は降り注いでくる無数のミサイルを見た。

間に合え!

古代はそう願った。

ヤマトはぎりぎりで発進した。

「島、このまま浮遊大陸と同じ軌道を加速して突っ走れ」と沖田は言った。

「同じ軌道?」

「そうだ」

「速度を上げて同じ軌道はあり得ません。強引にやればエネルギーをかなり無駄に使います」

「構わん。浮遊大陸相手に波動砲の試射を行う」

「波動砲?」

「ヤマトの必殺武器だ。波動エンジンの全エネルギーを集中して艦首の砲口から発射する」

「わ、わかりました」

「古代、波動砲発射準備」沖田が古代に命じた。

「は、はい」と古代はうなずいた。

木星を一周したヤマトは波動砲を発射した。

想像を絶する破壊力だった。

伝説の浮遊大陸は真っ二つに割れて木星のメタンの海に沈んでいった。

古代はドッと疲れを感じて椅子に座り込んで目を閉じた。

気がつくとき島と沖田が話をしていた。

「しかし、間一髪だったな」と島が言っていた。「あそこまで派手に大陸が崩壊するとは思っていなかった」

「大陸も建造されてから時間が経過した老体で、しかも無計画に増築を

繰り返しているからな」と沖田が答えた。「たぶん、ヤマトを着地させるときの衝撃がトドメになったのだろう」

「確かに、かなり派手に着陸させましたからね」

「しかし、先に崩壊を始めた区画に森君達がいなくて良かった」

「そう思います」

「物資の補給は何もできなかった。土星への航海を急いでくれ」

「了解です」島が古代の隣の席に座ったのが振動で分かった。

古代はうとうとしながら思った。

なぜ彼らは波動砲の話をしていないのだろうか。伝説の浮遊大陸にあったガミラス基地の話をしていないのだろうか。

そのとき、南部が古代にだけ言った。

「みんな怖れているんですよ」

「何をだ？」

「あまりに強力すぎる波動砲の威力にです」

「確かにあれは惑星すらも破壊できそうだ。使用には細心の注意が必要だ」

「もし、人が住んでいる場所を破壊したら、いった誰がどう責任を取るのか。1人の人間が取れる責任ではないと思います」

「俺もそう思う」と古代は自分の手を見た。

ヤマトは土星に到着した。

土星の基地は衛星の1つのタイタンにある。木星のステーションと違って、衛星の地面の上にあるので安定した存在だった。崩壊して沈む込む懸念はない。コスモナイト採掘が最近まで行われていたので、火星の時のように施設も崩壊していなかった。

ヤマトはそのタイタンの基地に寄港した。

基地は無人だったが施設は稼動していた。

「では佐渡先生、使える医薬品の探索と食料の探索をお願いします。島を助手に付けます」

「では行こうか島君」

佐渡はスタスタと歩いて行った。

島が後から付いていった。

「古代、おまえは森君とアナライザーを連れてコスモナイトの採掘場に行ってきてくれ」

「自分がでありますか？」

「コスモナイトの切り出しだけなら、アナライザーに装備されたレーザーだけで切り出せるが、それを運搬して探索艇のカーゴポッドに積み込む人手があった方が良くからな」

「しかしガミラスが来たら」

「タイタンにガミラスの基地はないよ」と沖田は笑った。

「なぜそう断言できるのですか」

「タイタン基地のセンサーはまだ生きているが、ここ数年何も探知していない」

「なるほど……」

「では行きたまえ」

「はいっ!」

古代は三座の探索艇に、森雪とアナライザーを乗せて発進させた。

「沖田さんはガミラスの基地は無いと断言したけど」と古代は言った。

「どう思う？」

「私ノセンサーモヤマトノセンサーモ基地ヲ探知シテイマセン。オソラク正確ナ情報ト思ワレマス」アナライザーが答えた。「オソラク安全デス。外敵ガ侵入シテキタ場合ハ別デスガ」

「侵入？」古代は考えた。

そうだ。

ガミラスのパトロール艇が来たらどうするのだ。

コスモゼロなら勝てるかも知れないが、こちらが乗っているのは探索艇だ。

更に、パトロール艇に戦車が搭載されていたらかなりのピンチだ。

「話題を変えましょうよ」と森雪が言った。「それよりタイタンというと、何を思い出す？」

「そうだな。タイタンは雪風の母港だった。タイタン基地で整備中の兄さんの船の写真を雑誌で見たことがある」

「お兄さん、船乗りだったの？」

「でも死んだよ」

「まあ。お気の毒に」

「気にしないでくれ。こっちの問題」

「古代サン」とアナライザーが言った。「雪風トハ何ノコトデスカ？」

「冥王星沖海戦で最も壮絶な最期を遂げた駆逐艦さ」

「ハテ。私ノ記憶バンクニハアリマセン」

「最後に更新したのはいつだ？」

「3ヶ月前デス」

「なら最新情報がないのも当たり前だ」

「ソナモノデスカ？」

「そうだ」

「古代サン」とアナライザーがまた言った。「ソレヨリモサッキカラ気ニナルコトガアリマス」

「なんだ？」

「私ノ目ノ前ニ魅力的ナオ尻ガアッテ、タッチシタクテタマリマセン」

その時、森雪が色っぽく叫んだ。「いや～ん、ダメよアナライザー」

そこで古代は沖田の命令を思い出した。

スカートめくりをするときは森雪の味方をせよ。

今回はスカートめくりでは無くタッチだが同じようなものだろう。

「ダメだぞ。アナライザー。今は任務中だ」と古代は叱った。

アナライザーは機内に味方がいないと知ると手を引っ込めた。

古代は考えた。

もし、自分がアナライザーの味方をしたらどうなったのだろうか。

3人しか乗っていない探索艇だ。

2対1でしかも女の雪は抵抗できない。

悪戯をやり放題だろう。

しかし、雪には嫌われるな。間違いなく嫌われる。

今は森雪から少しだけ尊敬の目で見られている。

少しだけ好かれた気がする。

そこで古代はハッと気付いた。

そうか、沖田の命令はこのことなのだ。

迷惑行為を行うアナライザーから森雪を守ることで、森雪の好意を得る、と言いたかったのだ。

古代は森雪の味方をこのまま続けることを決めた。絶対に雪だけは守ろう。

採掘場でのコスモナイトの切り出しには時間が掛かった。

コスモナイトは露天に露出していた。

しかし、掘りやすい場所のコスモナイトは取り尽くされていた。

それだけではなく、純度が十分に高いコスモナイトはアナライザーのセンサーでのみ識別できた。必然的に作業速度は上がらず、古代と雪は運ぶコスモナイトも無く暇になった。

「私もアナライザーを手伝いに行くわ。センサーを使えばコスモナイトの判定の手助けぐらいはできるわ」

森雪は探索艇を降りて、鉱石チェッカーを肩に提げてアナライザーのところに行った。

鉦石チェッカーを扱えない古代には出番が無かった。

「暇だな」古代はつぶやいた。

古代は探索艇のコクピットでうたた寝した。

爆発が起きて古代は飛び起きた。

三連装砲塔を持ったガミラスの戦車が接近中だった。

古代はすぐにコスモガンを構え、探索艇から飛び降りた。

対戦車兵器を持ってくるべきだった。

しかし、今はこれしかない。コスモゼロならともかく、探索艇は今や武器というよりも的だ。

「雪、アナライザー、無事か!」

別の戦車から降りたガミラス兵が森雪を捕らえていた。

古代はコスモガンを撃ってガミラス兵を射殺すると森雪を救出した。

「古代君!」

しかし、乗員が車内に残っていたらしい戦車が迫ってきた。

アナライザーが戦車の底部から戦車を持ち上げて投げ飛ばした。

何と言う怪力だ。いやそれだけじゃない。おそらく、パトロール船に乗せるための軽戦車で重量も軽めなのだ。

戦車は数十メートル先に裏返って落下し、爆発した。

戦車がもう 1 両いた。

それが迫ってきた。

古代はコスモガンで応戦したが、戦車には非力だった。これでは有効なダメージを与えることができない。

そして、コスモガンのエネルギーもすぐ尽きた。最大出力で連射したら、それほど長くは保たない。

古代はコスモガン捨て、森雪の手を引いて逃げるしかなかった。

古代達は採掘場の窪みに追い込まれた。

「アナライザー、何とかならないのか? また投げ飛ばしてくれないか?」

「無理デス。警戒サレテイルノデ、ソモソモ戦車ニ近ヅケマセン」
探索艇の通信機ならともかく、携帯式の通信機では惑星の稜線の向こうにあるヤマトに連絡する手段も無かった。

万事休すだった。

降伏するしかなかった。

銃を持ったガミラス兵が出てきて何かを言った。

アナライザーがそれを翻訳した。「降伏シテ生体サンプルトシテ同行セヨト言ッテイマス。動物園デ飼育スルノデ命ハ保証スルト言ッテイマス」

「馬鹿にしやがって、俺達は動物か？」

「私は動物園で見世物になるのはイヤよ」と森雪が言った。

何としても森雪だけは助けねば。

古代はそう思った。

しかし方法が無い。

その時、視界の隅にコスモガンが見えた。浅い氷の下に埋まっている。

最近、そこに落ちたものようだ。

古代は敵兵を見た。

1人の敵兵が銃を構えている。もう1人は戦車の上に身を乗り出して見ている。

おそらく戦車の乗員は2人。2人とも戦車から出ている。生身だからコスモガンでも撃ち殺せる。

「アナライザー、森君を守っている」と古代は囁いた。

意図に気付いたアナライザーが反論した。「危険デス」

しかし古代はためらわなかった。

かかとで氷を破るとコスモガンを手にして事態に気付かない敵兵を連続して射殺した。

「ふう」古代はため息を付いた。「しかし、いいところにコスモガンが埋まっていたな」

そして気付いた。

そこはコスモナイトの採掘場ではなかった。

敵戦車から逃げているうちに、別に場所に来ていたらしい。

ハッと見ると、目の前の壁には見覚えがあった。

「まさか」

古代は氷をコスモガンで何発も撃った。

もしも宇宙駆逐艦なら艦名か書かれたあたりだ。

そして、氷が破壊されて崩れ落ちると、そこには宇宙駆逐艦の船体が見えた。

艦側面に描かれた艦名は「ゆきかぜ」の4文字。

「雪風だ。兄さんの雪風だっ!」

古代は叫んだ。

苦勞して艦内に入れる場所を見つけて調べたが、凍り付いた遺体が残るだけで生存者は無かった。船体には大きな亀裂があり、そこから吸い出されたらしく、乗り組んでいたはずの人数よりもずっと少ない遺体しか発見できなかった。

古代はタイタンの大地を掘って墓を作った。

その間にアナライザーと森雪はコスモナイト収集の任務を行っていた。

先に作業を終えた古代は探索艇に戻ってうたた寝した。

「古代君、終わったわ」と言われて古代はハッと目覚めた。

アナライザーと森雪が乗りこむと古代は探索艇を発進させた。

到着後、古代は沖田に報告に行った。

「冥王星海戦で撃墜された雪風の残骸を発見しました」

「ほほう。冥王星海戦とは。雪風とな」沖田は目を丸くした。

「しかし、生存者は無く……」

古代は悔し涙を浮かべた。

「生存者は無く……か」と沖田はうなずいた。「君にどのような光景が見

えたにせよ。我々の使命は1つしかない」

「といたしますと?」

「地球を雪風にしてはいかん」

「はいっ!」古代は力強くうなずいた。

そして感じた。

沖田は分かってくれる。

いちいち古代の言葉に意見を差し挟む島とは違う。

沖田なら分かってくれる。

既に、兄を見殺しにされたというわだかまりは消えつつあった。

ブリッジに戻ると佐渡が酒を飲んでいて。

「佐渡先生、医薬品は見つかりましたか?」古代は質問した。

「十分な量を確保できたぞ。その上、酒もたくさん用意できた」

「さ、酒ですか?」

「自分で飲むだけでは無い。アナライザーに飲ませる分まで十分だ」

「アナライザーはロボットだから飲まないと思いますが」

「いや、飲む。飲んでもらわないと困る」

「なぜ困るのですか?」

「酒は1人で飲むものではないからだ」

「では自分がお相手を」

「古代、おまえには他にいるだろう。酒と一緒に飲む相手が」

謎めいた言葉を残して佐渡はブリッジから立ち去った。

「古代」と真田が呼びかけてきた。「佐渡先生はああ言ったが、反動推進剤も大量に調達できたし、食料以外は万全だ」

「食料以外は?」

「酒ならあったのだが、食料は調達できなかった。冥王星で調達できる見込みが薄い以上、おそらく食糧事情の厳しい旅になりそうだ」

「最後は食事では無く酒を飲んでエネルギー補給ですか?」

「冗談ではないかも知れない。食事を減らして食前酒を増量する事態も予想しておきたまえ」

「酔っ払うと幻が見えそうですね」

「たとえば、何でも魔法のポケットから取り出してくれる技師長とか、腕は確かな戦闘機パイロットかね？」

「ははは。まだ酒は飲んでいませんよ」古代は笑った。

「ではコスモナイトをありがとう。修理完了次第、ヤマトは発進する。それまで休んでいたまえ」

古代は自室に引き上げた。

廊下で森雪に呼び止められた。

「今日は助けてくれてありがとう」

「お安い御用さ」と古代はうなずいた。

「本当にアナライザーったら困ったものだわ」

「えっ？ そっち？」

女とはガミラスの戦車よりもお尻タッチが重要らしい。

古代は女とは神秘の生き物だと認識し直した。

第2章・死闘編

会議室で沖田が咳払いした。

「良いニュースと悪いニュース。諸君らはどちらから聞きたいかね？」

「では良いニュースから」と島が言った。

「コスモナイトの調達はできたが、本船のいくつかの部品が壊れつつある」

「なぜですか？」

「人類の多くが死に、熟練工も減った結果として、工作精度が落ちていたのだ。本船の部品のいくつかは、本来なら検査にパスしない規格外れの粗悪品だ」

「では、ヤマトは予定の航海を終了できないと?」

「おそらくそうだろう。このままでは」

「それが良いニュースですか? 悪いニュースでは無くて?」

「そうだ。実はこれから向かいつつある冥王星基地の備蓄に交換可能な部品があることが分かった。大戦前に製造されたものだから精度も十分だろう」

「交換すれば航海に不安は無いわけですね」

「そうだ」

「では悪いニュースは?」と古代が乗り出して質問した。

「冥王星基地は不法に占拠されて、彼らに使われている」

「ガミラスか!」

「正体も名称も不明確なので、とりあえずガミラスとしておこう」と沖田はうなずいた。「本船は、その不法占拠者を駆逐し、冥王星基地の交換パーツを確保しなければならない。地球からは、不法占拠者に対する武器使用の許可も出ている。戦闘班長として責任重大だぞ、古代」

「は、はい!」

「しかし、あくまで武器使用は慎重に。我々の目的はあくまで備蓄パーツの入手にある。基地を攻撃するような行為はできるだけ避けねばならない」

「現住生物の生態系に影響するような行為も避けたいですね」島も言った。

「そうだ。汚染の残る化学兵器等は使えないと思っておけ」

「それだけ自分の使命は重大ということですね」と古代は気を引き締めた。

古代はそのままブリッジの自分の席にずっと座り込んで前を見つめた。

「そんな緊張していると、いざというときに眠り込んでしまうぜ」と島が笑った。

「馬鹿、そんなことはない」と古代はムツとした。

しかし、早くから緊張過ぎた。

古代はやはり疲れが溜まって冥王星到着前にそのまま眠り込んでしまった。

「敵艦接近!」と太田が叫んだ。「敵は左右に分かれて挟み撃ちにするつもりようです」

古代は慌てて飛び起きてマイクに命じた。

「ブラックタイガー、対艦装備で出撃!」

『了解。準備してましたよ』加藤が答えた。

「やはり冥王星基地を占拠していたのはガミラスだったな」と島が言った。

「ああ、腕が鳴る」

ブラックタイガーがガミラス艦に殺到するのが見えた。

しかし、少々荷が重いようだ。

南部が言った。「敵はブラックタイガーの攻撃に備えて密集隊形で対空砲火を密にしています。あの中央にショックカノンを打ち込めば衝撃で一網打尽にできると思います」

「よし、1番砲塔は右の敵艦隊を、2番砲塔は左の敵艦隊を狙え」

「1番砲塔準備完了!」

「2番砲塔用意よし!」

「ブラックタイガー、ヤマトの射線から待避せよ」古代は命じた。

「ショックカノン、1番2番撃て!」

ヤマトの主砲が火を吹き、2つの敵艦隊は壊滅した。

残存した僅かな敵艦が撤退していった。

「よし、行けるぞ」と古代は小躍りした。

その時、ヤマトの艦隊が激しく震えた。

艦内が暗くなり、サイレンが鳴り響いた。

真田が叫んだ。

「未知の超兵器に撃たれた。何発も食らったらヤマトはひとたまりも無いぞ」

「まさか」

「おそらく罠だ。敵艦隊は罠だったのだ。我々はあの兵器の射程に引き釣り込まれたのだ」

「島、ヤマトを立て直せるか？」

「無理だ」

「島、あそこに冥王星の衛星、ニクスがある」と沖田が言った。「見えるか？」

「は、はい」

「あれにロケットアンカーを打ち込め」

「分かりました。ロケットアンカー発射！」

艦首のアンカーが発射され、鎖が引き出されていった。

アンカーはニクスに刺さり、ブレーキとなってヤマトの速度は落ちた。

「ここは基地からは死角になるはずですよ。しばらくは安全でしょう」と真田が言った。

「今のうちに修理を行うのだ。真田君、指揮を頼む」沖田が命じた。

しかし、超兵器の攻撃は更に来た。

ロケットアンカーの鎖が千切れ、ヤマトは冥王星の落下していった。

幸いにして下は海だった。

ヤマトは地面への激突を回避できたが、そのまま冥王星の海に沈んでいった。

しかし、ヤマトは死んでいなかった。

海に沈めたのは沖田の機転だった。

つまり、死んだふりだ。

「古代、突入隊を率いて今のうちに基地に潜入、奪還するのだ」

「はっ！」

「真田さん、来てくれますね？」

「無論だ。俺が行かないと敵兵器の詳細が分からないだろう」
そして古代は振り返ると南部に命じた。

「南部。アナライザー、加藤、根本、杉山を特殊潜入艇に集めろ。このメンバーで潜入する」

そして古代は、敵のトラップで根元と杉山を失いながらも、敵の超兵器を破壊し、基地を奪還した。

ガミラスは宇宙艦で脱出していった。

基地に満身創痍のヤマトが到着し、古代らはやっと収容された。

「よくやったぞ、古代」と沖田も喜んだ。「少し休め」

「いえ、どこにガミラスの残党が残っているか分かりません」

古代はブリッジの自分の席に座った。

しかし疲労が出たのか、いつの間にか眠っていた。

島に起こされて古代は目覚めた。

「気楽なものだな」と島が笑った。

「何を言ってるんだ。敵が来たら俺が戦うんだぞ」

「敵なんかいないよ。今、交渉がまとまったところだ」

「交渉？」

「冥王星基地を不法占拠していた連中とだ。沖田さんは交戦を回避して話し合いで解決することにしたんだよ」

「ガミラスの残党がまだ基地に？」

「まあ、そういうことだ」

「交渉ってなんだ？」

「一切の戦闘は行わないこと。彼らに冥王星基地に居住し続ける権利を認めること。その代わりに、ヤマトが必要としている修理パーツは引き渡すこと」

「しかし、ガミラス野郎を生きたまま残して平気なのか？」

「戦えばこちらむ無傷とは行かない。それよりも、必要なものだけ引き渡してもらった方がいい」

「しかし」

「彼らは余命数ヶ月を言い渡された放射能障害患者なんだ」島は言った。「冥王の名を持つ星に死に場所を与えても良いじゃないか」

「余命数ヶ月……」

「そうだ。我々が殺すまでもない」

「そ、そうか」古代は椅子に深く座り込んだ。

「問題が1つだけあるとすれば」と島は言った。「彼らが持っているけなしの食料は取り上げるわけに行かないことだ。ヤマトの食糧事情は改善しない」

「島、おまえはどれぐらい粗食に耐えられる？」

「耐えられる耐えられないの問題ではない。耐えるしかないよ」

「そうだな……」

ブリッジに沖田が戻って来た。

「話はまとまった。現在パーツをアナライザーが積み込み中だ」

古代は戦車を持ち上げたアナライザーの怪力を思い出した。荷物の積み込みぐらい朝飯前かも知れない。

「ではパーツの交換はすぐに？」

「時間のロスはあまりできないので、ここで交換はせず船倉に積み込み次第出発する」と沖田は宣言した。「そのまま、長楕円軌道で太陽に向かう小惑星にヤマトを接舷させ、そこでパーツ交換を行う」

「太陽に向かうって、それじゃ正反対ですよ。せっかく冥王星まで来たのにまた戻るのでですか？」

「違うよ、古代」と島は笑った。「ここから太陽の重力を利用して加速して進路も予定の方向に変更するんだ。スイングバイって奴だ」

「なるほど。さすがヤマトのパイロットだな」

「おだてても何も出ないぞ」

沖田が言った。「しかし、アステロイドベルトを通過する際、本船の航海を好ましく思っていない連中が待ち伏せて抵抗してくるという話もある。注意は怠らないように」

古代は思った。

冥王星から脱出したガミラス艦隊のことに違いない。

彼らはどういうわけか、ここぞという場所に出現する。まるでワープするみたいだ。ああそうか、ガミラスもワープするに違いない。

古代はブリッジの自分の席に座って腕を組んで深く座った。

そして、目を閉じて待ち伏せしているであろうガミラス対策を考えた。

しかし、妙案は無かった。

「古代、どうしたんだ?」と真田が声を掛けてきた。

古代は目を開けて振り返った。

「現状ではヤマトの武器はほとんど使えません。使えても使うとどうなるか分かりません。台座が緩んでいて発射の衝撃で外れかねません」

「前々から暖めていたアイデアがある。艦長に提案しようと思う」

「どんなアイデアですか?」

「古代にだけこっそり教えよう。小惑星をヤマトの船体に装着させ、偽装してすり抜けるのだ」

「そうか。小惑星帯で待ち伏せしているからまわりは小惑星だらけです。敵は小惑星だと思えば素通しさせるに違いありません」

「では提案書を書き上げるよ」

真田はブリッジを出ていった。

その後で、しばらくして森雪がブリッジに来た。

「ヤマト農園で取れたてのフレッシュジュースはいかが」

「ありがたい」

古代も島も受け取って飲んだ。

「これは美味しい」と古代は喜んだ。

それから気付いた。

「真田さんにも届けてあげてくれよ。工作室で書類を書いている筈なんだ」

「アナライザー、真田さんの分は届けてあげて」

「了解デス」

アナライザーはブリッジを出て行った。

それからヤマトはついにアステロイドベルトに接近したが、敵艦隊に見された。それは観察の執念としか思えなかった。真田の計画が進行していたら、そう簡単には見つからないはずだったからだ。

「これでは修理が進まない」と真田が言った。「炸裂する距離がヤマトに近すぎるんだ」

「どうすればいいんですか?」

「古代、岩盤を解除して回転させるんだ」と真田が言った。「それで砲撃を防げ」

「分かりました。岩盤の位置をヤマトから離せばいいですね?」

古代は反重力感应機を操作して岩盤をヤマトから離した。

その目論見は成功した。

「じれったいな」と古代はうめいた。「攻撃ができればもっと確実に敵を仕留められるのに」

「そういうな。これはヤマトの本来の姿かもしれない」と島は答えた。

「しうだったな。ヤマトは戦うために改造されたのではない」

攻撃が上手く行かないので、最後には、敵艦隊は体当たりを敢行してきた。

しかし、ヤマトはそれらを上手くいなし、最後に突入してきた大型艦にはロケットアンカーを打ち込んでやり過ごした。

大型艦は別の小惑星に激突して果てた。

ついにヤマトは危機を脱したのだ。

「やりましたね、真田さん」古代は振り返った。

「ああ」と満面の真田もうなずいた。

「これもヤマト農園のフレッシュジュースのおかげですかね」

「ヤマト農園？ フレッシュジュース？」

真田は眉をひそめた。

「あれ、アナライザーがジュースを持って行ったはずでは？」

「ああ、そういえば」と真田は考え込んだ。「確かに何か飲んだ気がする」

「何か飲んだ気がするって……」古代と島は顔を見合わせた。

「ところで」と真田は言った。「ヤマト農園はヤマトのどこにあるんだ？」

「えっ？」と再び古代と島は顔を見合わせた。「そういえば、場所までは……」

「ヤマトの設計図は何回も見たが、農園と呼べるスペースは見た記憶が無いぞ」

「ほら。水耕栽培で、工場みたいなスペースで植物を育てているのでは？」と島が言った。

「そうだな。私の単なる見落としかも知れないな。あとで設計図を見直してみよう」

真田は首をひねりながら工作室に戻っていった。

「そう言われると気になるな」と古代は考え込んだ。「ヤマト農園は艦内のどこにあるのか」

「おいおい」と島が笑った。「アナライザーか森君が知っているはずだ。何しろ、そこで収穫した果物のジュースを持ってきたんだからな」

しかし、ブリッジには2人とも不在だった。

アナライザーは修理に参加中。ヤマトは手間が掛かるのだ。

森雪は医務室で佐渡先生の手伝い中だった。医務室も戦闘で混乱し、整

理を要するのだ。

作業を終えてブリッジに顔を出した 2 人に確認すると意外な答えが返ってきた。

「知りマセン。私ハ生活班長ノ命令デ厨房カラデキタジュースヲ運ンダダケデス」

「知らないわ。ジュースは厨房で準備したもので、私は運んだだけ」
またしても、古代は首を捻った。

「南部、後を頼む」と古代は言い残し、厨房に向かった。
しかし、そこでも肩すかしだった。

コック長は壁の穴を指さした。

「あそこから収穫物はベルトコンベアで運ばれてきてロボットアームが自動的に整理します。私たちの仕事は調理することであって、収穫ではありません」

古代はそのまま工作室に行った。

「真田さん、ヤマト農園の場所は分かりましたか？」

「古代か。それがさっぱり分からないんだよ」

「分からない？」

「そうだ」

「ヤマトの図面をチェックした筈では？」

「見たまえ」と真田はパネルを指さした。「これがヤマトの図面だ」

「あ、ここに農園と書いてあります」

「そう思うだろう？ しかしこっちを見たまえ」

真田は図面を切り替えた。

そこには農園が無かった。

「矛盾している……」

「そうだ。人類再興計画本部の作成したヤマトの図面は複数を通して見ると矛盾している。ちなみに、最初の図面の場所は既に行ってみたが単な

る倉庫だった。農場は見つからなかった」

「真田さん……」

「現に果物が厨房に届く以上、どこかに農園はあるはずだ。しかし、迷子になると言われるほど広いヤマト艦内だ。そう簡単には分からないかもしれない」

古代は考え込んだ。

「悩みすぎるな。いい話もある」

「いい話?」

「この部分にジムが用意されているのに気付いた。もやもやはここに行つて汗を流せ」

「はあ」

ブリッジに戻ると古代は自分の席に座って目を閉じた。ジムか……。行くべきだろうか。

沖田の声で古代は目を開いた。

「スイングバイのためにヤマトが内惑星系の軌道を通過する関係上、地球とのタイムロスがほぼ無い音声電話通信が回復するぞ」

沖田は島と話をしていた。

「それは考えていませんでした」

「乗組員全員に、地球との最後の通信を許可しようと思う。ただし、10分間だけだ」と沖田は言った。「どう思うかね?」

「自分には歓迎ですが、今更地球に話をする相手がいるのは……」

「島君、森君。それから佐渡先生も地球に残した愛猫にお別れを言いたいそうだ」

「船長は……」

「わしは船長室にこもって、地球にお別れを言いながら酒でも飲むさ」

古代は思った。

自分も地球に通信する相手などいない。

家族はみな死んだからだ。

だから、みんなが通信している時に手持ち無沙汰になる。

そうだ。ジムに行こう。

だが、いくら探してもジムは無かった。

古代はふてくされてブリッジの自分の椅子に座り込んで目を閉じた。

「ははは、どうした古代」真田が声を掛けてきた。

「ジムが見つからないんですよ」

「ジムならここだよ」と真田はパネルの艦内配置板を指さした。

「えっ。そこは探さなかったな」

「今日は辛いな。君は通信する家族が残っていないのだろうか？」

「そういう真田さんこそ」

「俺も同じと言えば同じだ。通信したい姉は既に事故で死んでいる」

「真田さんも……」

「しかし、チャンスを無駄にもできないので大学の後輩と話をして、宇宙で採取したデータを伝えておいたよ」

「真田さんらしいや」

「しかし、パーティーに参加する気分でも無いから、仕事に戻るよ」

「じゃあ、俺はジムに行ってみます」

古代はジムで汗を流した。

しかし気分は晴れなかった。

結局、あそこに行くしかないのか。

古代は艦長室に足を向けた。

そして沖田に酒を飲まされた後の記憶は無かった。

辛うじて、のっぺらぼうの藤堂の話だけは覚えていた。

沖田が藤堂に「指令、わしは行くよ」と大見得を切った時に、なぜか藤堂の顔がのっぺらぼうに見えたというのだ。怪談の一種だろう。よく見るときちんと目鼻があったという。見間違いかも知れない。それ以前に、酒

が入っていたから、違う話を聞き間違っただけかも知れない。そもそも、藤堂が妖怪のたぐいであるとは、とても信じられなかった。彼はヤマトに乗り組んではいないが、古代達の上司なのだ。のっぺらぼうの指令でヤマトに乗り組んでいるとは思いたくない。

だが、藤堂はもしかしたら……と古代は思うのだった。妖怪はあり得ないし、もしかしたら一種の怪談として沖田は語っただけかもしれない。しかし、藤堂には何かあるのかも知れない。ヤマトのような存在が曖昧な宇宙船を建造する責任者なのだ。普通の人間とは違う何かがあるのかも知れない。そんな気がした。

その他には、スイングバイの関係上進行方向前方横に見える地球にさよならを叫んだ記憶だけがおぼろげに残った。

そして、ヤマトの進路に立ちふさがる巨大なガミラス総統の姿も見えたような気がした。

古代は後からもう1回ジムに行こうと思ったが見つからなかった。それっきりジムのことは忘れてしまった。

フェアウェルパーティーが終了すると、古代は急に暇になった。

それはそうだ。

太陽系のガミラス勢力はヤマトが駆逐してしまったのだ。

戦闘班長の古代の出番はほぼ無くなった。

戦術パネルに昆虫図鑑を呼び出して眺めるぐらいしかやることがなかった。

「古代、そんなに暇なら森君を手伝ってきたらどうだ？」古代は島にどやされた。

「それが森君にも要らないと言われたばかりだ」と古代は、ブリッジの座席を後に倒して寝ころがった。「レーダーに敵が見えることもなければ、けが人も出ないから看護も必要無い。平和なものだ」

「いいことじゃないか」

「しかし、力が余るといふか何と云うか……」

「油断はするなよ。これからヤマトが向かうのは未知の宇宙だ。ヤマトは人類で最速だから、これまでのどの亜光速船も行っていない場所まで進出するぞ」

「分かってるよ」

しかし、古代はそのままうとうとした。

うとうとしながら考えた。ガミラスの戦力はこれで終わりだろうか。いや、そんなはずはない。まだまだ大勢力を抱えて地球とヤマトを狙っているに違いない。

何かヤマトを狙うのは確かだ。しかし、おそらく宇宙艦ではなかろう。そんなに素早く新しい艦隊を送り込んでくるのは無理がある。おそらく別の兵器……。たとえば機雷や特殊なガスのような……。

ヤマトに急制動が掛かって古代は飛び起きた。

「どうした島！」

「機雷原だ」

「えっ？」

ヤマト前方に膨大な機雷が並んでいた。

「迂回ができないのか？」沖田が質問した。

「迂回するとかなりのタイムロスが予想されます」

「どれぐらいだ？」

「果てが見えないので予想も付きません」

「真田くん、機雷の間隔は？」と沖田は質問した。

真田は自分の席から振り返って答えた。

「さすがに、広範囲に撒きすぎのようです。間隔はかなり広く、ヤマトが通り抜けられるだけの間隔は残っています」

しかし、ヤマトがゆっくりと前進を始めると、機雷が間隔を狭めてきた。

間隔が広いのは、機雷が移動可能だからに他ならなかった。ガミラスに死角は無かったのだ。

僅かに隙間が残る左側にヤマトは艦体を傾けてやり過ぎそうとしたが、それも限界があった。

真田はアナライザーを連れて機雷のコントロールを行っているコントロール機雷を探してこれを無力化した。

しかし、移動が止まっただけで依然として機雷はそこにあってヤマトを取り囲んでいた。これでは前進できない。

「古代」と沖田は命じた。「ブラックタイガー隊員の手で機雷を除去せよ」

「はい、ブラックタイガー隊員の手で……。手とはこの手ですか?」

「そうだ。普通に処理しようとしたら爆発してしまうから、素手で除去させるのだ」

「なら自分も」

「ダメだ」と沖田は一喝した。

「なぜですか」

「おまえが触れると機雷が爆発してしまう」

「しかし、ブラックタイガー隊員の手で取り除けと」

「そうだ。それなら爆発しない」

「なぜですか。なぜ自分はダメで、ブラックタイガー隊員は良いのですか」

横で島が笑った。「なんだ、古代。まだ気付いてなかったのか」

「何だよ島。何が違うっていうんだ」

「内緒だよ」

「真田さん!」と古代は真田の振り返った。

「すまんな古代。俺の疑問も同じだ」

それから真田は沖田に向き直った。「艦長、それはどういう意味でありますか?」

「既に我々は真田君の科学知識では対処できない領域に踏み込んでいるのだよ」

「それはいったい……」

「聡明な真田くんのことだ。説明せずともすぐに分かるだろう」

「努力します……」

真田は小さくなった。

さっきアナライザーとコントロール機雷を解体した功労者だというのに、既に真田は今日のヒーローではなかった。

機雷が移動させられ、進路が開いた。

ヤマトは前進を再開した。

そのとき、相原が血相を変えて叫んだ。

「不明の相手よりの入電です。ガミラス大帝星総統府と名乗っています」

「電文は受け取ったのか？」沖田が質問した。

「はい」

「読め」

「貴艦の健闘を讃える。ガミラス総統デスラー」

「なんだそれは」

「祝電です。そう伝えてきました」

「祝電？」南部が言った。「ずいぶん敵は余裕があるみたいじゃないか」

「こっちはスケジュールに余裕が無いのにな」

「それより、デスラーだ」古代は話を遮った。「それが敵の親玉の名前というわけか」

「いずれ直接対決して破らねばならない相手だろう」と沖田はうなずいた。

「は、艦長」

古代は手に汗を握った。

デスラー、どのような男だろうか。

しばらく古代の脳裏からデスラーという名前が消えなかった。

ヤマトはオリオン座のアルファ星に接近しつつあった。

古代は展望室でアルファ星に祈っている森雪を発見した、

「雪、何をしているんだい？」

「アルファ星に祈っているの、あれは地球では願い星と言ってお願い事をする星なのよ」

「ふうん、ただ核融合で燃えているガスの塊をそういう風に思えるなんて、女の子は分からないな」

「そりゃ、接近したら灼熱地獄でしょうけど。こうして距離を取って見ている限りは美しいわ」

「で、何をお願いしたんだい？」

「内緒よ」

森雪は嬉しそうに展望室を出て行った。

「やれやれ」古代は頭をかいた。

それからアルファ星を見た。

「接近したら灼熱地獄か。鬼でも待っているのかな。って、まさかな。ははは」

それから真面目な顔になった。

「ひょっとしてガミラス人は現代の青鬼なんじゃ」

ガミラスが待ち構えているかもしれない。そう思うと古代は真剣に対策を考えざるを得なかった。ブリッジの席に戻るとあらゆるケースを頭の中で想定して対策を考えた。結局、アルファ星に接近しなければそれで良いという結論にしかならなかった。わざわざ罠にはまりに行く必要も無い。

そして、そのまま疲れて寝てしまった。

ヤマトが震えて古代は目を覚ました。

バリアにヤマトが接触したのだ。

これは想定外の事態だった。

太陽系にいたガミラスはこんな道具を使っていない。

しかも、後方から何もかも食らうガス生命体が迫ってきた。

これも想定外の事態だった。

太陽系にいたガミラスはこんな道具を使っていない。

結局、バリアの開いている唯一の方向、アルファ星に向かうしか無かった。

沖田はそれを命じた。

ガス生命体はアルファ星を食おうとして逆に食われていった。

沖田の狙いがそれであることは明らかだった。

しかし、沖田は倒れて佐渡が駆けつけた。

その上巨大なコロナがヤマトの前に立ちふさがり、ヤマトは避けられなかった。

「古代、波動砲であのコロナを撃て」苦しそうな形相の沖田が命じた。

「火を撃つのでありますか？」

「あれは火に見えるが火ではない」

「は？」

「ここもアルファ星ではない。下を見ろ」

古代は窓から下を覗き込んだ。

青鬼が炎の中で踊り狂っていた。

いや良く見ると青鬼などいなかった。

「ともかく、波動砲ならあれを打ち破れる。波動砲とはそのための道具なのだ」

「分かりました。いえ。分かりませんが波動砲を撃ちます」

「それでいい」沖田はうなずいた。

ヤマトは危機を脱した。

「結局、波動砲とな何なのだ」と古代は自分で発射した波動砲の余韻を感じながらつぶやいた。「ヤマトにはいったいどんな秘密があるというんだ」

ヤマトはアルファ星を背に離脱していった。それ以上の追撃は無かった。

「よし安全圏だ」と島が宣言すると、古代はドッと疲れが出て眠り込んだ。

「古代」と島が言ったので、古代は目を覚ました。「なんだい？」

「森君、またブリッジを離れたぞ。行き先は佐渡先生のところでも電算室でもない」

古代は飛び起きた。「島、まだアルファ星は見えるか？」

「ああ、まだ大丈夫だ。大きく肉眼で見える」

「なら展望室だ」

古代はそのまま展望室に走った。

やはり森雪はそこにいた。

あんなことがあったのに、それでも祈るとは。

「雪、それでいったい何をお祈りしているんだい？」

「ある人が私を好きでいてくれますようにって」

「ある人？ 誰のことだ？」

「内緒よ」

クスクス笑いながら森雪は展望室を去って行った。

古代は頭をかいた。

そして、古代も祈った。

「兄さんがまだ生きていますように。もしも生存が無理でも、残された肉声だけでも聞けますように」

それからそっと古代は付け加えた。

「森雪が好きな人が島ではなく自分でありますように」

「古代、古代、大変だぞ」という加藤の声で古代は目覚めた。

「なんだいったい」

「ガミラス野郎の捕虜だ」

こういうことらしい。

航路の前方哨戒中のブラックタイガー隊が、巡航中のガミラス戦闘機編隊を発見した。向こうは単なる移動中だったらしく、ブラックタイガー隊は油断した敵への奇襲に成功した。結局、十機ほどいた敵編隊はほぼ壊滅。

1機だけ捕獲に成功したという。

佐渡先生の手で現在服を脱がせているところだという。

初めてガミラス人の顔が見られると艦内は大騒ぎだった。

しかし、古代はおかしいと思った。

ガミラス人の顔なら古代は既に見ている。

その時は肌色だったが、他のガミラス人の肌が青いことも知っていた。

なのに、なぜみんな人類最初にガミラス人の顔が明らかになるかのようにみんな興奮しているのだろうか。

しかし、ヘルメットが外され、兄を殺したガミラス人の青い顔が露わになると古代は復讐衝動を感じた。医務室を見下ろすギャラリー用の部屋から医務室に勝手に入りメスを手にして殺そうとした。

兄の仇。

家族の仇だ。

「止めろ、古代!」

古代は制止された。

メスが手から落ちた。

捕虜はそのメスをサッと拾うと、自殺しようとした。

「デスラー総統万歳!」

メスで喉を突こうとした。

古代の中で別の衝動が沸き上がった。

「馬鹿!」っと古代はメスをはね飛ばした。「命を粗末にするな!」

真田がいきなり古代の腕を掴んだ。「ちょっと来い、古代」

「なんですか真田さん」

「聞きたいことがある」

別室で古代と真田は向かい合った。

「ご用件はなんでしょう?」

「お前。ガミラスの捕虜を殺そうとしたな」

「お叱りは受けます。軽率でした」

「いや、そのことを言っているのではない」

「なんでしょう」

「殺そうとした相手をなぜ助けた」

「それは……。自分でも分かりません。ただ、命を粗末にする行為が許せなくて」

「しかし矛盾している」

「命を粗末にするガミラスへの怒りという意味では同じです」

「殺そうとした直後に、殺そうとした相手を助けるか?」

「……」

「古代。おまえは分裂している。まるで複数の人間が古代進になっているかのようだ。森雪も同じ事だ。森雪も分裂している」

「確かにそれは感じます。突然理知的になったり乙女チックになったり」

「そうだ。森雪はアナライザーがスカートめくりすると分かっているのに、自らめくられるチャンスを作る。彼女の艦内服はスカートではないから、それを着ている限りめくられる心配はない。それなのに、スカートをはいて出てくる。なぜだ」

「なぜと言われても……」

「まるで森雪の中にも複数の人格があるようだ」

「自分に言われても」

「君も同じような存在だ。思い当たる節は無いかね？」

「残念ながら……」

「そうか。時間を取らせたな。佐渡先生には謝っておけよ」

真田は立ち上がって部屋を出て行った。

「この餅は美味しいな」と古代は餅をぱくついた。

「でしょう？ 艦長から特別に許可が出た餅つきよ」と森雪は言った。「味わって食べてね」

「ああ。特に自分でついた餅なら格別だ。艦長には感謝感謝だ」と古代は喋りながら食べた。

「島君も来ればいいのに」

「あいつは航路の問題があるとかでブリッジを今離れられない。あとで届けてやってくれ」

「分かったわ」

「あいつには悪いことをしたからな」

「何かあったの？」

「将棋で待たしてくれないから怒ってね。甲板で殴り合いまでやっちゃまった。でも、冷静に考えると俺の方が悪いよな」

「甲板で殴り合い？ 何の冗談？」

「えっ？」

「だって、ヤマトの外は真空の宇宙でしょ？ 宇宙服で殴り合ったの？ 穴が空いたら空気が抜けて死んじゃうわよ」

「いや。こうやって素手で……」

「真空中で？」

「いやその……」

「変な古代君」

古代は考えた。

確かに島とは甲板で殴り合った。止めに来た森雪も見たはずではないのか。

なぜ森雪は見たはずのことを知らない振りをしているのか。

いや。そもそも森雪の言葉には一理がある。

真空の甲板上にどうやって出られるというのだ。宇宙服も無しに。

餅に満腹した古代はソファに横になって眠り込んだ。

「ずいぶん下らないことに悩んでいるんだな」と島が言った。

古代は起き上がった。島は休憩室に降りてきたようだ。

「下らない？　なんでだよ」

「あのとき、甲板には防護膜を展開中だったんだ。甲板に出ても呼吸可能だったんだよ」

「防護膜？　普段は使ってないだろ？」

「主砲の保護用だ。あの時はオクトパス星団の海峡を待つて宇宙嵐の中で待機していたからな」

「そ、そうか。それは気付かなかった」

「だからおまえは鈍感なんだよ、古代」

「そうかな？」

「嵐の中飛び出してコスモゼロを壊したろう。覚えてないのか？」

「そうだったかな」

「そうだって」

「っていうか、コスモゼロは健在だぞ」

「パーツ状態で積み込んであった予備機を整備員が泣きながら組みたてたんだよ」

しかし島が立ち去ってから古代は気付いた。

乗組員数が制限されたヤマトでは、パイロットが機体の整備も行っている。整備員など乗ってはいないはずだ……。ならば誰が予備機を組みたてたんだ？

そもそも、古代にはコスモゼロを壊した記憶が無かった。

翌日の整備中に、一緒に作業している加藤に質問した。

「ヤマトに整備員なんて乗ってたか?」

「髭の隊長さんよ、何を言い出すかと思えば」加藤は笑った。「乗ってた
ら俺達がこんな苦勞するものか」

「髭の隊長ってなんだ?」

「口だよ口。油が付いて黒くなってるよ」

「あっ」

古代は慌てて口の近くに付いた汚れを拭き取った。

その時、古代はハッとした。

加藤が整備しているのはコスモゼロだ。彼の愛機はブラックタイガーだったはずだ。黒い機体を見間違えるはずはない。

そう思って見ると黒いコスモゼロだった。

もう1回良く見ると、ブラックタイガーだった。

「なあ加藤。おまえの機体はやっぱりブラックタイガーだよな。黒いコスモゼロじゃなくて」

「またまた、馬鹿を言って」と加藤がゲラゲラ笑った。

その時、ヤマトの船体に衝撃が走った。

古代は格納庫を加藤に任せ、ブリッジに走った。

衝撃が発生した原因が分かった。

異次元断層に落ち込んだのだ。

「島、どうしたんだ」

「見ろ。あれを」

古代が見るとボロボロに朽ち果てつつある未知の宇宙船の大群があった。

「脱出できなかった船だ」

沖田が重々しく言った。「不味いことになったな」

「なぜですか?」

「この段階でここに来る予定では無かった」

「この段階では……ということは、最終的には来るはずだった?」と島は聞き返した。

「そうだ」と沖田はうなずいた。

「ということは、この異次元断層のことを沖田さんは知っていたのですか?」

「知っている」

「何ですかここは。我々といったい何の関係が……」

「ここは異次元断層ではなく冥界だ」

「なんですって?」

「我々は異次元断層に落ち込んだだけでは無い。冥界に落ち込んでしまったのだ」

「まさか」

島は改めて窓の外を見た。

「あの幽霊船の数々を見たまえ。あれが冥界の証明だ。ここから出ることはできないのだ。死者にはな」

「我々はまだ死んでいません」

「そうだ」と沖田は言った。「だが、冥界から出るには正しい手順を踏まねばならん」

「正しい手順とは?」

「冥界の食物を口にしないこと。冥界の住人と会話をしないこと。そして、正しい出口を知ることだ。もし、条件を満たさない場合、徐々に我々の体力は吸い取られ、動けなくなってしまう。機械も同じだ。ヤマトも止まってしまうだろう」

「ヤマトが止まったらたとえ出口が分かっても出られません」

「そうだ。我々もガミラスになってしまう」

「ガミラス? どういうことですか」

「彼らこそが冥界の住人なのだ」沖田は言った。

「ではガミラスによる地球侵攻とは……」

「そうだ、自らの死を納得せず墓から出てきた死人によって、地球も死の世界にする行動に他ならない」

「遊星爆弾による無差別攻撃とは」

「地球を彼ら死者の世界にする方策に他ならない」

「そんな……」

「艦長!」と古代が叫んだ。「すると、死者はみんなガミラスになるんですか?」

「古代、何が知りたいのだ」

「兄のことです。兄は死にました。兄もガミラスになるのでしょうか」

「それは分からない」と沖田は言った。「死んだ人間が全てガミラスになるわけではない。あくまで自らの死を受け入れない者達が墓を出てガミラスになるのだ」

その時、太田が叫んだ。「敵の駆逐艦です」

「駆逐艦ぐらい、ヤマトの火力で勝てます」と古代は叫んだ。「攻撃しましょう」

「いや。ここは彼らガミラスのテリトリーだ。生者には分が悪い。ここは逃げよう。そして正しい出口を探すのだ」

ヤマトはガミラスの駆逐艦を避けるように転進した。

しかし、駆逐艦は三千隻からなる主力を呼び寄せた。

圧倒的に多数の敵に追われながら、ヤマトは異次元空洞という名の冥界を彷徨った。

「彼らは仲間を増やそうとしている」と島は言った。「未練を残したままここで我々も朽ち果てればガミラスだ」

「くそっ。ガミラスなんかになってたまるか」

古代は後ろに向けて撃てる唯一の主砲である第3砲塔で応戦しながらうめいた。

そのとき、突然ヤマトのエンジンが停止した。

「万事休すか!」

しかし、無音の第1艦橋のパネルが光り輝いた。

そこに、絶世の美女の姿がぼうつと映し出された。

「私はイスカンドルのスターシャ」と美女は言った。

「あれがスターシャさん!」と古代は叫んだ。

「出口をお教えします。エネルギーを送りますので、すぐに冥界を出るのです。ここはガミラスの演習場。あなた方が行くべき冥界とは似て非なる別の場所です。さあ、すぐに出るのです。出て航海を続けるのです。イスカンドルに到達するまで」

エンジンが復活した。

「波動エンジン始動。接続!」と徳川機関長が叫んだ。

島も叫んだ。「行けるぞ」

「古代、ワープするためのエネルギーを確保せねばなん。主砲発射中止」

「主砲発射中止」古代は第3砲塔に命じた。

そして、ヤマトは冥界を脱すると同時にワープして離脱した。

敵の追撃は無かった。

「ふう。死ぬかと思ったぜ」と古代はため息を付いた。「じゃあコスモゼロの整備に戻るぜ。途中だったんだ」

古代はブリッジを後にした。

古代はハッと目覚めた。

コスモゼロのコクピットで整備中に寝てしまったらしい。

「あら、お目覚め?」と森雪が格納庫の外から顔を覗かせて言った。

「あ、ああ」

「髭が付いてるわよ」と森雪はそのまま姿を消した。

古代は慌てて鏡で自分の顔を見た。

黒い汚れが口の脇に付いていた。

「また汚れちゃったか。加藤にまた髭の隊長と馬鹿にされる」

しかし加藤はいなかった。いなくて幸いだ。

「ところで雪はどうしてこんなところに?」

「暇なのよ」

「読書でもしないのか?」

「読もうと思った本に限ってこのフネには載ってないのよ。まあ、水星の核戦争を載せてないのは分かるけど。あれは、ジュブナイル SF 小説だから。マイスターはちょっとマイナー。でもマイウェイぐらいはあってもいいわよね」

古代は1つもタイトルが分からなかった。

「しかし、君は SF 小説なんて読むのかい?」

「普段は読まないわ。でもあれは別よ」

「どんなところが気に入ったんだい?」

「水星にあった太陽観光船の事故をレスキューする話なのよ。レスキュー隊員に志願した切っ掛けの本よ」

その粗筋が古代も知っていた。

「それは水星の核戦争じゃなくて、水星救助隊っていう小説だよ。読んだ記憶がある」

「あらごめんなさい。確かにそうね。でも私が読みたいのは水星の核戦争なの。なぜかしらね?」

「水星に無人観測基地はあるが人は住んでいない」と古代は言った。「暑すぎるからな。そんな場所で核戦争が起きるはずがない」

「そうね。不思議なタイトルよね」

「もっともフィクションなら、何でもありだけどな」

「そうね。戦艦大和だって空を飛べるわね」

「えっ？」古代は驚いて聞き返した。

その時、森雪の持っていた端末が音を発した。

「ごめんなさい。佐渡先生からの呼び出し。じゃあね」

森雪は去って行った。

古代は考えた。水星の核戦争とは何か。もしかしたら、何かの符牒かもしれない。水星関係の符牒とは考えにくい。あれは熱すぎて利用価値が少ない惑星だ。ならば核戦争に関連した何かの符牒だ。しかし、古代には分からなかった。もしや、ガミラスによる遊星爆弾攻撃を核戦争になぞらえたのだろうか。

古代はガミラスのことをまた考えた。

しかし、答えは無かったので、ブリッジに戻ることにした。

ブリッジに戻ると、ヤマトの舵はアナライザーが取っていた。島は非番らしくいなかった。艦長席では沖田が日誌を書いていた。

「艦長」

「何だね古代」

「ガミラスのことをもっと教えて下さい。艦長はもっと詳しくご存じなんでしょう？」

「ふむ。ガミラスか。君の方が詳しいのではないかね？」

「いえ。自分はガミラスが冥界であることを知りませんでした」

「ガミラスが冥界……」

「死んだことを納得していない死者が墓から出てきて地球を襲っているのがガミラスだと。地球も死者の世界にするために遊星爆弾で地球を死の星にしているのだと」

「なるほど」と沖田は立ち上がった。「艦長室に来たまえ」

沖田は古代を連れてブリッジの上の部屋に移動した。

そして沖田は本棚から1冊の本を取り出した。

「この本だな」と沖田は開いた。

「その本は何でありますか?」

「ガミラスの真実が書かれた本だ。いやイスカンドルの真実と言った方が良いかな」

「まさか。イスカンドルも死者の国でありますか?」

「ははは。少なくともヤマト出発時にはイスカンドルは生者の国だった」

「ということは、ヤマト到着時には死者の国になっている可能性がある?」

「おそらくそういうことはなかろう。たとえイスカンドルの住人が全て死に絶えても、満足して墓に入るはずだ。墓から出てくる間違っただけの者達は一人もいるまい」

「ではガミラスとは何ですか?」

「ふむ……」と沖田は考え込んだ。「君に取っての敵だ。冥界にあつて人類を滅ぼそうとする」

「自らの死を受け入れず墓から出てきた者達なのですね? 死者だから顔が青い者が多いのですね?」

「そうかもしれん。誰も確かめた者はいない」

「今気付いたのですが」

「なんだね」

「僕はガミラスの捕虜の自殺を止めました。しかし、もしガミラスが墓から出てきた死者だとすると自殺には意味がないのでは?」

「面白い命題だな」

「艦長も答えをご存じありませんか?」

「昔見たドラマで描かれたガミラスとは死を受け入れていない死者だった。死を受け入れていない以上、ガミラスが自殺を試みることはあるだろう。失敗するとは思うが」

「まさか」

「ガミラスは死が大好きだ。だから、失敗した者は戦って死ねと命令するされることも多いという。しかし、死ねない。既に死んでいるからだ」

「ではガミラス人の死とは何ですか?」

「遺体が切り刻まれたり、燃やされて失われる状態だ。そうなればもはや行動できない」

「ではガミラスは倒せる敵なのですね?」

「そうだ。……とそのドラマでは描いていた」

「もっとガミラスのことを教えて下さい」と古代は身を乗り出した。

「君のガミラスの話ではない。あくまでドラマの話だ。それでも良いのかね?」

「それでも参考になります」

「では続けよう。ガミラスは大穴の下、大空洞に住んでいるとされる。もともと墓地であった場所だ。しかし、埋葬されることを拒絶して出てきた。その跡が穴や空洞になっているわけだ」

「なるほど。では彼らをそこに埋め戻せばガミラスを滅ぼせるわけですか?」

「いや、溶岩の炎で焼き尽くすのが上策としてある」

「なぜですか?」

「埋めてもまた出てくるからだ。燃やせばそれっきりだ」

「なるほど」

「火山脈を刺激して大噴火活動を誘発するのが良かろうと書いてある」

「質問です」

「なんだね?」

「ヤマトの目的地は冥界ですか? 大穴の中、死者の世界ですか?」

「いや、イスカandalだ。人類を救うためにイスカandalに向かう」

「冥界ではないのですね?」

「無論だ。ただし、冥界とはどこにもなくどこにでもある存在だ。どこにしようと、古代、おまえに前にガミラスは現れる可能性がある」

「分かりました。いえ、分かったような気がします。ちょっと話が難しいので」

「古代。わしから1つアドバイスがある」

「为什么呢」

「ガミラスを理解しようとするな。あれは理屈で割り切れない妄念なのだ」

「はあ」

「理屈で理解しようとする、苦しむことになる。割り切れないらだ」

「だから理解を試みるなど」

「心の赴くままに感じるしかない」

「わ、分かりました」

「古代、話を変えよう」

「ガミラスよりも重要な話があるのでありますか？」

「そうだ」

「なんでありますか？」

「森君のことだ」

古代は動揺した。

「君は森君のことをどう思っているのだ？」

「それは重要なことでありますか？」

「そうだ」

「ガミラスよりもでありますか？」

「そうだ。少なくとも君も森君も生きている。死者ではない」

「その……。気になる人ではあります」

「もっと具体的に」

「自分でも良く分からないのであります」

「聞かせてくれ」

「愛している、恋人になりたい、結婚したい、そう思う自分もいますが、女装すればもっと俺の方が可愛いと思う自分もいます。若干ながら。5%ぐらいですが」

「分裂しているな」

「はあ」

「ならば、その 5%は忘れたまえ」

「なぜでありますか？」

「ライバルに森君を取られるからだ」

「ライバル……」

「森君を争奪するライバル、誰だと思うかね？」

「島です。あいつも森君を狙っています」

「確かにそうだ。古代、おまえは島から森君を奪わねばならない。しかし、それだけでは十分ではない」

「といたしますと？」

「アナライザーもマークしておけ」

「あの赤いロボットですか？」

「そうだ」

「なぜでありますか？」

「アナライザーは、丸いボディの中にいろいろ女性を喜ばせる機器を隠し持っているぞ」

「は？」

「アナライザーがスカートをめくる理由は何か考えたことがあるかね？」

「分かりません」

「どの道具をどう使うか品定めをしているのだよ」

「冗談にしか思えません」

「冗談ではない。実はアナライザーは女性が 1 人だけで勤務する観測所

で使用された経歴があるらしい。その時に、一人を慰めるためにいろいろこっそりと改造を受けたらしいのだ」

「では本当に……」

「1人の女性が一生退屈しないで済むぐらいの能力は与えられているようだ」

「そ、それでは」

「そうだ。夫婦生活の豊かさの勝負になったら、古代、お前の勝ち目は無い」

「どうすればいいのでありますか」

「快樂では無く愛で森君を包み込め」と沖田は言った。

「愛……」

「そうだ。愛だ。この航海の真のテーマは愛と知れ」

「しかし、これは人類を救う航海では」

「それも人類愛だ。そしておまえは森君への愛を貫け。いいな」

「わ、分かりました」

「ただし、おまえの中の5%が女装してわしの愛を得ようと思ったのなら、それは間違いだから忘れるのだ」

「わ、忘れます」

古代は艦長室を出たが入れ替わりに診察の佐渡が入っていった。

ふと古代が立ち止まると、沖田と佐渡の会話が少しだけ聞こえた。

「古代の中に、ホモの人格が少しだけ混ざってしまったらしい」と沖田が言っていた。「5%ぐらいらしいがな。女装趣味も併発している。わしに興味を示しておく」

「95%が森君に興味を示しておれば十分じゃよ」と佐渡が答えていた。

古代は怖くなってそのまま立ち去った。

だが、森雪を愛する気持ちは圧倒的だった。

自分の中にある僅かな気持ちなどあっさりと押し流された。

森雪のことを考えて、古代は自分の部屋で眠れない夜を悶々と過ごした。

スピーカーから沖田の声が流れた。

「古代、至急ブリッジに来い」

古代は飛び起きてすぐに着替えてエレベーターでブリッジに上がった。

「緊急事態ですか？」

「そうだ。8時間前に森君とアナライザーが近くの惑星の降りた。食料調達出来るか調べるためだ」

「確かに、ヤマトの食糧事情はよくありませんが」

「しかし連絡が途絶えている。古代、あの惑星にコスモゼロで調査に向かえ。もし、森君に何か問題があれば救出するのだ」

「了解しました。古代、コスモゼロで調査救出に向かいます」

古代はマイクを取って格納庫に告げた。「加藤、選りすぐりを一個小隊選抜。惑星に向かうコスモゼロを護衛させる」

『了解』と加藤は答えた。

古代は考えた。

未知の惑星上で、森雪がアナライザーと2人切りで連絡が取れない。

まさか、アナライザーに内蔵された奇怪な快樂道具で森雪を襲っているのではないか。

その場合、森雪は逃げられない。戦車を持ち上げられるアナライザーの怪力に森雪が勝てるわけがない。しかも、スカートめくりで十分に検分済みだ。

そして、森雪は強制された快樂を徐々に受け入れてアナライザーを愛していき……。

古代は頭をふった。

そんなことはイヤだ。

『古代』とコスモゼロをエスコートして飛んでいる加藤から通信が入っ

た。『ガミラスのタンカーだ。1時の方向距離10万宇宙キロ』

「ここはガミラスの勢力圏の惑星だったのか」と古代はやっと気付いた自分のうかつさを呪った。

そうだ。いくらなんでも未知の惑星で悠長に快楽行為に浸っているとは非常識だ。それよりも、ガミラスに捕獲されたと考える方が筋が通る。

「加藤、とりあえずあのタンカーを撃破しよう」

『了解』

コスモゼロとブラックタイガー隊はタンカーに襲いかかった。

しかし、タンカーはしぶとかった。

空荷で荷物の受け取りに行く途中だったようで、タンクにいくら穴を開けても何も起きなかった。しかも身軽で素早く逃げ出した。

結局タンカーの着陸ポートへの着陸を許してしまったが、その後でやっとエンジンに火が回ったようで爆発を起こした。

ガミラスのシンパらしい現地人が慌てふためいて地上を走り回っていた。

古代は機銃掃射して現地人を追い散らすと着陸場所を確保してコスモゼロを降ろした。

腕を縛られた森雪が走ってきた。

「古代君! 助けに来てくれたのね!」

「ああ、もう大丈夫だ」

古代は縄を解いた。

「ありがとう」

そして森雪は安心したのかそのまま気を失った。

古代は森雪をコスモゼロの後部座席に座らせた。

それから、アナライザーを振り返った。

「おまえは、貨物として釣り下げてヤマトに帰還する。いいな?」

「私ハショセン機械デス。荷物扱イシテ下サイ」

「理解してくれて助かる」

「オ礼ヲ言ッテ良イノデスカ、古代サン」

「なに？」

「私ハ、内蔵サレタ様々ナ道具ヲ森サンニ対シテ使イマシタ。アナタノ大切ナ女性ヲ犯シタノデス」

「なんだって？」

「デモ安心シテ下サイ。私ノ与エル快樂ヨリモ、古代サンノ愛ヲ選ビマシタ。私ハ機械デスカラ、快樂ハ与エラレテモ愛ハ与エラレマセン」

「アナライザー、おまえの真意は何だ。何が目的だ」

「森サントノ結婚デス」

「何のために結婚を望む？」

「私ノ能力ヲ全テ活カセルカラデス」

「快樂を与える能力か？」

「ソウデス」

「やっぱりおまえは機械だ」

「僕ハ人間ダ。ヤリタイコトヲ抑エテイタラ僕ハ壊レテシマウ」

「だから森雪を襲ったというのか？」

「ハイ」

「だがおまえは愛を理解できなかった」

「愛ヲ理解シナイ人間ハ珍シクモアリマセン」

「痛い理屈だな」

古代は未知の惑星の空を見上げた。

「なあアナライザー」

「ハイ」

「おまえは、俺を快樂で満たせるか？」

「質問ノ意味ガ分カリマセン」

「雪にしたようなことを俺にできるか？」

「出来マセン。私ノ機能ハ女性専用デス」

「悪かったな、忘れてくれ。俺もお前のしたことは忘れる」

「ドウイウ意味デスカ？」

「おまえが雪にしたことは艦長に報告しない。だからおまえも今のごことは忘れる」

「シカシ、森サンガ報告シタラ分カッテシマイマス」

「たぶん、報告はしない。問題を起こしたのはガミラスとシンパの原住民だけだ。そういうことになるはずだ」

古代は後席に眠ったままの森雪を乗せ、フックでアナライザーを釣り下げ、コスモゼロで帰還した。

こういうとき、エンジンパワーにゆとりが少ないブラックタイガーは空戦では軽快だが荷物運びにはあまり役に立たなかった。

ヤマトに戻ると展望室で森雪にお礼を言われた。

「古代君、今日はありがとう」

「いや、当たり前のことをしてだけで……」

「ううん。今日はいろいろあったけど、古代君が助けに来たことが一番嬉しかったわ」

「いろいろ」

「そうよ、いろいろ」

「その中には、その、気持ちいいこととかあったわけ？」

「内緒よ。でもこれだけは本当。いちばん嬉しかったのは古代君が来てくれたとき」

そして森雪は嬉しそうに展望室を出て行った。

古代は頭をかいた。

「これは本物の愛ってやつかな」

古代は展望室の椅子に座って遠ざかる惑星を眺めていた。

そのままいつの間にか寝てしまったようだ。

戦闘の疲れが残っていたからだろう。

目が覚めると惑星は見えなかった。

その時、展望室の隅に座り込んで酒を飲んでいる佐渡先生に気付いた。

「先生、いつからそこに」

「来たときからおまえさんは眠り込んでおったよ」

ということは、どうやら森雪との会話は聞かれていないようだ。

「古代」

「なんででしょう」

「この船の任務は何だと思う？」

「人類を救うことです」

「そうだ。しかし、それだけでは合格とはいえん」

「ガミラスと戦えと？」

佐渡は笑った。「それも外れじゃ」

「ではいったい……」

「愛じゃ。愛が無ければ人類は救えない。つまり、人類を救うためには、愛を持たねばならない」

「佐渡先生」

「いや、余計なことを言ったかな。飲み過ぎたようじゃ」

「沖田艦長も、この航海のテーマは愛だと」

「沖田さんも言ってしまったか」

「では、アナライザーの振る舞いも」

「スカートめくりは間違っただけの愛の表現じゃな」

「では、間違っていない愛の表現とは？」

「それを見つけるのじゃ、お前自身がな」と佐渡は言った。

「佐渡先生は雪に愛を語らないのですか？」

「わしが愛するのは猫と酒のみ。女性への愛は語らない」

「なぜですか？」

「良いことを教えてやろう。医者だから良く分かっておる。放射能の影響でわしの遺伝子には欠陥がある。子供を作ることは推奨されておらん」

「まさか」

「だからわしは、森君を口説かんよ。いくら可愛いナース服で手伝って気が散ってもな。それでもわしは口説かん」

「本当は口説きたいのですか？」

「わしが未来ある健康な男性ならな」

「自分の欲望を抑えつけて、佐渡先生はそれで平気ですか？」

「平気なものか。だから酒が友達じゃ」

「佐渡先生」

「だからおまえが森雪と子供を作れ。わしの分までな」

佐渡の目から涙がこぼれた。

古代はようやく分かってきた。

ここには、もはや子供を作れない者達がいる。

だから、まだ子供を作れる男女は愛し合って子供を作らねばならない。

ここに自由な恋愛は存在しないのだ。

だからこそ、森雪を愛している自分は幸せだ。

その気になってくれさえすれば、子孫を残せるのだ。

だが、遺伝子が健康なら森雪の相手は古代で無くても良いことになる。

「教えて下さい佐渡先生。子供を作ってはいけないと推奨されているのは誰と誰ですか？ 子供を作っても良いのは誰ですか？」

「わしは知らんよ」

「えっ？ でも医者なのでしょう？」

「その判断を行っていたのは別の分野の医者じゃ」

「でもご自身のことと俺のことと雪のことは知っていましたよね？」

「そうじゃ。わしのことは知っている。自分のことじゃからな。森君のことも知っている。看護師として働いてもらう時点で検査報告書は見てお

るからな。そして、古代、おまえのことも知っておる」

「なぜですか」

「忘れた。飲み過ぎたからのう」

「佐渡先生!」

「わしはいつでも真面目じゃ。真面目にふざけておる」

佐渡先生は酒瓶を抱えたまま展望室を出て行った。

古代は考えた。

つまり、佐渡先生を除く全ての男は潜在的な古代のライバルということか。

島だけではない。

みんなライバルだ。

その時、森雪が展望室を覗いた。

「あら古代君、佐渡先生がいるかと思って見に来たのだけど」

「佐渡先生なら今出て行ったばかりだよ。会わなかったか?」

「いえ。私はエレベーターで上がってきたばかりだからすれ違いかしらね」

「ところで、雪」

「なに。古代君」

「佐渡先生は、放射能で遺伝子に問題があって子供を作ることが推奨されていないと聞いた」

「そうらしいわ」

「君と僕は問題無いらしい」

「そうね」

「他の乗組員はどうなんだ? 安全な者と危険な者は誰と誰なんだ?」

「それは答えられないわ。プライバシーの問題に関わる問題ですもの」
森雪ははぐらかした。

「ちょっと待て。ということは君は乗組員全員の情報を知っているわけ

か?」

「ええ」

「教えてくれ」

「ダメよ」

「頼むよ! 大事なことなんだ!」

「ダメったらダメ!」

古代は森雪としばらく同じ問答を繰り返してじゃれ合った。

そして、森雪は転んで古代は森雪を押し倒すような形になった。

「だ、ダメよ古代君。私たちまだ恋人にすらなっていないのよ。それに、私たちには人類を救うと言う任務があるわ。こんな個人的な感情に流されてはダメ」

「わ、悪かった」と古代は森雪を解放して起き上がった。

そのまま森雪は顔を隠しながら展望室から出て行った。

「失敗してしまったな」と残された古代は頭をかいた。

第3章・回天編

沖田は告げた。

「古代」

「はい」

「艦長代理になってくれ」

「自分がでありますか?」

「そうだ」

「しかし、島の方が適任では……」

「ガミラスガミラスと言いつぎる君に不安があるという者もいる。しかし、それでもわしは古代の方が艦長代理に向いていると思う」

「良く分かりません」

「いいかね。艦長代理とは実働部隊では無い。実際に行動するのは部下

になる。島は、優秀だがその優秀さは実働部隊としての優秀さだ」

「どういう意味でありますか？」

「人をまとめて行動させ、自らは目標を示す。その能力は古代の方が高いとわしは思う」

「はあ、良く分かりません」

「将棋で勝つ技術は島の方が上だ。しかし、将棋で勝ちたいという意欲は古代の方が上だ。つまり、そういうことだ」

「つまり、勝ちたいという意欲だけ示して、実際の将棋は島に任せろと」

「島に限らない。全員が君の部下になる」

「何となく分かりました」

「わしはまだ死ななかつもりだが、万一の場合に開封すべき命令書はこの部屋の机の引き出しに入っている。わしが死んだから古代には解錠可能になる設定になっている」

「分かりました」

「では取りあえずブリッジに戻って状況を掌握するんだ」

「分かりました」 古代は敬礼して沖田の部屋を出た。

しかし、なぜ島ではなく古代なのか。

おそらく昨夜の宇宙怪獣の襲撃が原因だ。

古代は意見の分かれる皆の思いを集約し、波動砲で何とかピンチを切り抜けた。

しかし、あの宇宙怪獣も謎だ。

これまでのガミラスは宇宙艦を派遣してきた。しかし、今回は怪獣だ。

沖田艦長が倒れた後、どうも状況がおかしい。

古代はブリッジに戻ると島に話しかけた。

「島、驚かないで聞いてくれ。実は今、沖田艦長から艦長代理に指名された」

島は目を丸くした。

「いつも何があってもガミラスガミラスのおまえがか?」

「不安は分かる。しかし、人類を救いたい情熱は本物だ。分かってくれ」

「それは分かるが……。そうか、おまえが艦長代理か」

「どうした島」

「いよいよだな」

「何がだ?」

「いや、こっちのことだ」

「島、おまえ何を考えてる」

「ちょっと離席する。後は操縦を頼む、アナライザー」

「了解デス」

島は制御をアナライザーの席に渡した。

「ユーハブコントロール」

「アイハブコントロール」アナライザー答えた。

アナライザーがパイロットを交代した。

そして島はブリッジから消えた。

「やれやれ。島にもショックか。納得してもらうまで時間が掛かりそうだな」

だが、あまり時間は掛からなかった。

「古代君!」と雪がブリッジに駆け込んできた。「島さんが!」

「島がどうした?」

「あまりに強引に告白してきたから今はダメだと言ったら外に飛び出してしまったわ」

「なんだって? あの冷静が島が?」

「普通じゃ無かったわ。何があったの?」

「艦長代理の件、思った以上にショックだったか」

「何の話?」

「それで島は?」

「宇宙服で外に。窓から島さんの緑色の宇宙服が見えたわ」

「連れ戻そう」と古代は格納庫に走った。

だが、コスモゼロでいくら搜索しても島は見つからなかった。

古代はヤマトと連絡を取るとブラックタイガーにも発進を命じた。

「島を発見したらコールサインは SP03 だ」

余程慌てたのか返事は無かった。

だが宇宙は果てしなく、宇宙服の人間は小さすぎた。

燃料が乏しくビンゴとなった古代は搜索を打ち切り、ヤマトに戻るしかなかった。

ヤマトに戻ると沖田が艦長席に戻っていた。

沖田が頑張っている時には、古代が艦長代理を務める必要は無い、

「今後は島の代理でアナライザーがヤマトの操縦を行う」と沖田は言った。

「副操縦士は太田では？」

「ああ、そうか。太田だ。彼は太田だ」

古代が改めて見ると、舵を取っているのはアナライザーでは無く太田だった。太田がニッと笑って古代の方を見た。

古代は少しがっかりした。島が消えたというのに、太田は少し嬉しそうだ。まあ、島がいたらヤマトの舵を握れない立場だ。無理も無いが。

古代は展望室に行き、椅子に座った。

やはり佐渡はそこにいた。

「なあ古代」と佐渡は酒を飲みながら言った。

「はい」

「島はもう帰ってこない。ただでさえ少ない乗組員が一人減った」

「はい」

「だが、我々は人類を救わねばならん」

「分かっています」

「前進あるのみじゃ。頼んだぞ、艦長代理。この航海を成功で終わらせてくれ」

「はい。辛くても、努力します」

佐渡が出て行くと入れ替わりに森雪が来た。

「話は全部ブリッジで聴きました」

「そうか」

「艦長代理ですってね」

「任命された」

「お祝いしたいところなのに。島さんのことさえなければ」

「俺はもっと冷静で落ち着いた男だと思っていたよ。俺よりもずっと大人で」

「子供だったわよ、私の前では」

「そ、そうか」

「無理をしてたと思うわ。あなたをフォローして落ち着いた大人のふりをして。同い年なんでしょう？」

「そういえばそうだな」

「古代君」森雪は古代に抱きついてきた。「もう頼れるのはあなたしかいない。沖田さんは身体がもう限界。佐渡先生はすぐ酒に逃避。アナライザーはしょせんロボット。もうあなただけなの」

「雪……」

「古代君……」

「島は戻ってくるよ。俺は信じている」

「本当に？」

「あいつは冷静な知性派だ。自分を殺す方法も知っている。冷静にヤマトの位置を把握して戻ることができるさ」

「古代君がそういうのなら私も希望を捨てないわ」

「そうさ。俺達は人類最後の希望なんだ。それが希望を捨ててどうする」

「分かった。希望を持つわ。じゃあ、仕事に戻るわね」と森雪は少し無理をした笑顔で展望室を立ち去った。

古代はブリッジに戻り自分の席に座った。

しかし、艦長代理の仕事などなかった。

ヤマトは順調に航行中で、航行そのものは運航班の問題であり、ガミラスでも出て前進か戦闘を選ぶ場面でも無い限り、古代が言うことは何も無かった。

将棋を打つ相手としての島ももういなかったから暇つぶしもなかなかできなかった。

だからうとうとと眠り込んでいたらしい。

真田に起こされて古代は飛び起きた。

「何事です?」

「ガミラスの無人要塞だ」

「無人要塞!? 武装しているのですか?」

「武装はしていないが、もっと厄介だぞ」

「なんです?」

「宇宙要塞から発射されるマグネトロンウェーブでヤマトのつなぎ目が離れ、崩壊の危機だ」

「そんな……。ワープしたらどうですか?」

「ここからでは近すぎる。それに、強引にワープしたら何が起こるかワカラン」

「ならいったい」

「つなぎ目の無いシームレス戦闘機を既に作成済みだ。これで要塞に乗りこんで止める。古代、一緒に行ってくれるか?」

「アナライザーの方が良いのでは。コントロール機雷を解体する時にもアナライザーを連れて行ったわけですし」

「ダメだ。アナライザーは機械なのでバラバラになる」

「なるほど……」

そこで艦長席の沖田が命じた。

「古代、真田君を護衛して要塞に潜入して無力化せよ」

「了解です」古代は敬礼した。

シームレス戦闘機で真田と古代は宇宙要塞に移動した。

そして警備ロボットを撃破して内部に入った。

「古代、やっと二人きりになれたな」真田がボソッと言った。

「そんな愛の告白みたいなこと、止して下さいよ」

「済まない。これは愛の告白ではない。俺はお前に言うことがあったんだ」

「なんでしょう」

「俺とおまえの兄は同期だ。親友だったと言っても良い。そして、お前の兄が乗った船は最後の出撃前に自分が整備した。しかし、整備してどうにかなる状況では無かった。古代、あれはもう戻れない艦だった」

「真田さん……。何をいったい」

「古代の艦はもう戻れないと分かっていた。だから沖田さんの艦の盾になって沈んだんだ」

「まさか」

「すまない。欠陥を直す時間が無かった」

「それがお話ですか。ありがとうございます。自分は真田さんと兄が友達とは知りませんでした」

「いや。それは別件だ」

「といたしますと?」

「ヤマトはおかしいと思わないか?」

「どういう意味ですか?」

「太陽系を離れる時のフェアウェルパーティーに参加したか?」

「いえ、自分は全く……。通信する相手も地球にいませんし」

「この写真を見てくれ」

真田は写真を1枚端末に表示した。

「これは見たことがあります。フェアウェルパーティーの時の展望室の写真ですね」

「そうだ」

「飲食ができるパーティー会場になっていて、通信が終わった者からここに来て談笑したはずですよ」

「その通りだ」と真田はうなずいた。

「この写真に何の問題があるんですか?」

「この写真には複数の女性乗組員が写っている。だがヤマトの女性は森雪だけだったはずだ」

「だ、誰かが女装したんですよ」

「それに、この会場。こんな広い展望室がヤマトのどこにある?」

「えっ!?」古代は絶句した。

確かにあるはずがない。

ヤマトの側面展望室はもっと狭い。

これほどの広さはありません。

「古代、ヤマトはブラックタイガーを何機搭載している?」

「ええと。定数で36機です。破損して廃棄された機体や予備機もあるので、多少は増減しますが」

「私の計算では、格納庫のスペースにはどんなに頑張っても10機がやっとだ。残りはいったいどこにある」

「ほら、段々の立体格納庫に収納されて」

「あれを収める大きさはヤマトには無い」

「まさか」

「そもそも第1艦橋からして、外から計ったときと内側から計ったときでサイズが違うんだ。その理由はいったいなんだ?」

「確認したのですか？」

「修理中に艦外と艦内ではかって比較してみた。第1艦橋はあんなに広いはずが無い」

「しかしヤマトの航海は順調です。スケジュールからはやや遅れていますが……」

「問題はそこだよ」

「そこといますと？」

「人類再興計画本部で作った計画書にあまりにも状況が適合しすぎるのだ」

「しかし、既に計画から遅れています」

「古代。計画にはマージンというものが見込まれている」

「はあ」

「計画の中央値には当てはまっていない。しかし、必ずと言って良いほどマージンに収まる数値になっているのだよ」

「まさか」

「たとえば惑星の存在が確認されていない恒星系があったとする。人類再興計画本部は惑星3個から7個と見積もりを出していたとする。ヤマトが接近した時点で必ずと言って良いほど3個か7個の惑星が見つかる。4個や6個ということはまずない」

「確かにそれはおかしな話ですが……」

「古代。ヤマトと人類再興計画には何か秘密がある。それが俺の結論だ」

「そうだ。あの書類」

「なんだ？」

「沖田艦長が死んだら自分が開くことになっている書類があります。あれにきっと真実が書いてあります」

「読めないのか？」

「沖田艦長の死後に自分が空けられる仕掛けです。今は無理です」

「それは残念だな」

「それより宇宙要塞の方はどうなっていますか?」

「さっきからあることに気がついていたところだ」

「それは何ですか?」

「通路の配置がコンピュータの配線にそっくりだ」

「そっくり?」

「これがデータバスで、こっちがチップイネーブルだ。これはアドレスのマルチプレクサ」真田が言うことを古代は理解できなかった。

「だったらどうだっていうんですか?」

「中枢つまり CPU がどこか分かる。たぶん、この部屋がそうだ」

真田が解体に取りかかろうとすると、自律防衛装置が作動して真田の手足を拘束してしまった。

「古代起きろ!」と真田は叫んだ。

「真田さん!」

「俺は科学というものの傲慢さが嫌い。だから機械は信用しない。だからこそヤマトの謎にも気付くことができた」

「今はそんな話をしている場合では」

しかし、真田を拘束したワイヤーはびくともしなかった。

「良く聞け。俺は月の遊園地で事故に遭って姉を失った。その時から科学は信用しない」

「真田さん、昔話はもういいから」

「その時に俺の手足も奪われた」

「えっ?」

「俺の手足は作り物なんだよ」

「まさか」

「爆薬が仕込んである。手足を外せ」

「真田さん」

「ビスを外すだけでいい。俺の身体を連れて外に出ろ。遠隔で爆破する」
古代は、これ以上離れると電波が届かないという距離まで真田を運んだ。
そこに真田だけ残して古代は距離を取った。

真田は手足を爆破し、古代は爆炎の中で真田を探した。
絶対に生き延びられないと思ったが、真田は生きていた。
ヤマトに戻った真田は予備の手足で復活した。

「ありがとう古代」と真田が古代に例を言った。

「しかし、真田さん。よく予備の手足がありましたね」

そこで真田は眉をひそめた。「そういえば、ヤマトには予備を積んでいなかったはずだな」

「えっ？」

「佐渡先生の治療を受けた時点でそのまま手足を付けてくれたから受け入れてしまったが……」

真田は意味ありげに古代を見ながら言った。「佐渡先生が予備を持っていた……と思うしかない」

その夜。森雪が話しかけてきた。

「なんだい」

「私、怖いわ。島君と同じように、もしもこれ以上乗組員が減ることがあれば……」

「確かにヤマトは運行できなくなる可能性がある」古代はうなずいた。
「沖田さんはいつ倒れるか分からないし、佐渡先生もいつ酒で正気を失うか分からない。アナライザーだって故障の可能性がある。太田は調子がいいし、相原は気が弱い。加藤は頼れるが難しい問題はダメだ。徳川機関長は機関室にこもりっきりだし、真田さんは技師長でありながら科学不信だ」

「古代君、途中から分からない名前になったわ」

「気にするな」と古代はうなずいた。「気にすることはない……」

「でも佐渡先生の深酒は増すばかり。それは私も感じているわ」

「しかし、ヤマトの航海のプレッシャーを考えれば、飲むなどとも言えない……」

「ねえ、古代君。私今夜スケスケのネグリジェで過ごしてみようかしら。みんなの士気がそれで少しでも高ぶるなら、少しぐらい下着や身体を見せても……」

ああ、森雪もプレッシャーに参りかけている。古代はそう思った。

「君はそこまですることはないよ」古代は優しく言った。「艦長代理は僕なんだ。それは僕が考えることだ」

「分かったわ、古代君お願い」

お願いと言われるとやる気が増す古代だった。

突如地球との通信が回復した。

それは理論的にあり得ないことだった。

しかし、理論的にあり得ない事件に遭遇し続けたヤマトは、既に誰もそのことに驚かなくなっていた。

やつれて青い顔をした藤堂が地球の現状を説明してくれた。

それによると、地球はまだ健在で、人々はヤマトの帰りを待っているのだという。

しかし、古代はその説明を鵜呑みにはできなかった。

何かが起こりそうな予感がしたからだ。

だが、外から何かが来るという予感はずれた。そうではなく、ヤマト艦内で相原が暴発したのだ。相原はヤマトの計画そのものに異を唱えた。そして、医務室に収容された。

メンタルケアは佐渡先生ではなく森雪の仕事だったので、立体映像投影装置の部屋に相原は送られた。相原はキタガミヤキョクをリクエストして、森雪はそれを装置に設定した。しかし、相原の状況は改善しなかった。

古代は、翌朝目が覚めてから思い付いた、
もしかしたら、選曲が悪かったのかも知れない。

キタガミヤキョクとはどんな曲か聞いて確認してみよう。

そこで、医務室に降りていった。森雪は既に勤務中だった。

「なあ雪、キタガミヤキョクってどんな曲だい？ その装置の BGM として入っているんだろう？」

「ちょっとまって。検索すればすぐ出てくるはずよ」と雪はコンソールを操作したが出てこなかった。「そんな曲は入ってないわね」

「そんなはずは無い。昨日は確かに君が流したはずだ」

「流してないわよ」

「そんな馬鹿な。確かに、前に見せてもらった収録曲リストに入っていたぞ」

「嘘」雪は分厚い冊子を取り出した。「どこに？」

古代は探した。

「あった」

古代は指さした。

北上夜曲と書かれていた。

「いやね。これはキタ【ガ】ミヤキョクと読むのではなく、キタ【カ】ミヤキョクと読むのよ」

「えっ？」

「キタカミヤキョクで検索すると出てくるはずだわ。ほら出てきた」
音楽が室内に流れた。

「これのことでしょ？」

「ああ、そうなのか。良く知らないから聞いて見たかっただけなんだ」

「なんだ。もっと情緒のある人かと思ったのに残念。いい曲よね」

古代は首をひねりながら医務室を出た。

相原の時は確かにキタ【ガ】ミヤキョクで装置は作動した。しかし、今

朝は検索できなかった。なぜだろう。

慌てて森雪が追ってきた。

「忘れてた。古代君、今夜は艦長が晚餐を開くから覚えておいてね」

「晚餐？」

「今日は気分が良いから、とっておきの食事を振る舞うのですって」

「とっておきって何だろう」

「血の滴るステーキではないことは確かね」と森雪は言った。

「ステーキか。また食べたいものだな」古代は涎が出そうだった。

「地球でも牛は激減しているから難しいわね。ましてヤマトに牛は乗っていないわ」

「ああ、豚と違って牛はもう幻に近い」

「そういえば、合成牛肉の論文は読んだことがあるわよ」と森雪は言った。

「えっ？」

「牛肉そっくりの肉を機械で合成するそうよ」

「なるほど」古代は考えた。「とっておきの食事はそれかな？」

「たぶん違うわ」と雪は言った。「まだ概念上の提唱段階で、その機械は実現されていないわ」

「いや待て。沖田艦長の本来の職業は物理学者なんだ。実は艦長室でその機械をこっそり作っていたとか……」

「そうね、期待しないで待つと良いわ」森雪は笑って戻って行った。

その日だけは食堂にテーブルに、テーブルクロスが敷かれ、沖田が上座に座った。

古代は驚いた。

テーブルにはステーキがあったからだ。

ワインもあった。

今まで存在に気付かなかったウェイターが給仕してまわっていた。

「古代、何を驚いておる」

「いえその」と改めて古代が見ると皿は空だった。ウェイターもいなかった。

古代は頭を振って落ち着くためにワインを飲もうとグラスに手を伸ばした。しかしグラスは空だった。

「本当は計画の完遂を祝って開けるつもりだったが」と沖田は言った。

「今夜開けることにした。あまり保存しすぎると味が落ちると佐渡先生が言うものでな」

「それはそうじゃ」と佐渡先生が言った。「缶詰というものは確かに長期保存できるが、味が落ちるかどうかは別問題じゃ」

「というわけで、今夜諸君に振る舞うのは大戦前に製造されたコーンスープの缶詰だ」と沖田は言った。「本船の食料で最大の貴重品と言える。大戦後、コーンの収穫は激減し、しかも食用になるコーンの味も変化してしまったのでな」

「もともと」と佐渡は言った。「味の方は期待せん方がええ。過酷な大戦の過酷の環境を乗り切って長期保管されてきた缶詰じゃ。保存環境が良好だったとはとても言えん」

「味はそうだが、最大の贅沢品だ」と沖田は言った。「それを味わってくれたまえ」

「ところで艦長」と古代は言った。「真田さんや徳川機関長は招待しないのですか?」

「いるじゃないか」と沖田は言った。

「えっ?」

「今まで気付かないとは酷いな」とテーブルの向かい側の隅の席に座っている真田が笑った。

「す、すみません……」

「自分も気になっていることがあります」と島が言った。「この計画は本

当に成功するのでしょうか。相原の不安は大なり小なり我々全員の不安ではないのでしょうか。本当にイスカandalはあるのでしょうか。そして本当の放射能除去装置を渡してくれるのでしょうか」

しかし、古代はハッとした。

島はヤマトを出て行ったはずだ。

この会食に出席しているはずがない。

よく見ると隣は空席だった。しかし、皿にスープは入っていた。死んだ島への配慮だった。

みんなは島のことを後悔しているのか、不味そうにスープを飲んでた。

古代もスープを飲んだ。スープは不味かった。佐渡先生の言う通り、保管しすぎて味は悪くなっていたのだ。贅沢品であることも事実だったが、不味くなっていたのも事実だった。

食事が終わると、沖田は宣言した。

「信じようじゃないか。この計画は成功する。不確定要素は多いが、もしも信じなければ不安材料が増えるだけだ。我々は信じて前に進もしかない。もしも、それを諦めれば人類は滅びるのだ」

そして会食はお開きになった。

食堂を出ると森雪が声を掛けてきた。「ステーキじゃなくてガッカリした?」

「い、いや」

「まあ、男の子なら食べたいわよね」

「贅沢は言わないよ。俺達は人類を救わねばならない」

「人類を救った後なら?」

「えっ?」

「本物の牛肉の入手は難しいけど、合成肉でも手に入ったら焼いてあげるわ」

「それは楽しみだ」

「合成肉でも手に入るのはかなり先だと思うけど。期待しないで待っていてね」

「期待しないで待つよ」

「でもその前に」

「そうだ。俺達は人類を救わねばならない」

人類を救うという義務感がどこから湧いて出てくるのか分からなかったが、古代は間違いなく人類を救う宇宙戦士の自覚があった。

だが、その夜古代はヤマトの全員に同じ自覚はないことを思い知らされた。

相原の不正が発覚したのだ。

相原は無断で家族との通話を行い、そこで、父親の死を知らされていたのだ。何とか食料を確保しようとして、暴動に巻きこまれたのだろう。

最近の相原の精神的な不安定さの原因はそれだった。

どこかに消えてしまった相原を探して古代は深夜の艦内を走った。

しかし、見つからなかった。

煙のように消えてしまったのだ。

艦内のどこにもいない。

その時、通路にスケスケのネグリジェ姿の森雪が飛びだしてきた。

「外に相原さんが!」

古代は森雪の身体を見ないようにして、詳しい話を聴いた。

読書中に窓の外を見ると、相原が宇宙に出ていたというのだ。

地球に戻ろうとしているのは明らかだった。

古代はすぐにブラックタイガーチームに発進を命じた。

そしてコスモゼロも発進させた。

古代はコスモゼロから地球への通信を試みた。

コスモゼロの小出力の送信機でも通じた。

「こちらはコスモゼロの古代進。地球、応答せよ」

「地球だ」藤堂が出た。「何だね、艦長代理」

「もし、相原からの通信をそちらでキャッチしていたら……」

その時、古代は信じられないものを見た。

藤堂の後にいたのは、真田と2人きりのときに真田から見せられた真田の姉そっくりの女性オペレーターだった。

「藤堂長官、その後の女性オペレーターの名前は何と云うのでありますか?」

「彼女か?」と藤堂は当人に質問した。「君の名前は?」

「真田です」と女性は答えた。

「もしや」古代は勢い込んで質問した。「真田技師長のおねえさまですか?」

「ええ。志郎に姉がいるとよく知っていますね。彼はそういうことをあまり話さない人ですよ。それで志郎は……」

慌てて藤堂は彼女の発言を遮って、部屋から送り出した。

未練ありげに彼女は振り返りながら部屋を出た。

古代は何かを掴んだ気がした。姉は死んだと真田は断言していた。ならば今通信が成立している先はいったい何だ。地球ではない事だけは確かだ。冥界……。

古代の頭にはその2文字が浮かんだ。

確認のため古代は藤堂に依頼した。「兄の古代守はそちらにいますか? いるなら是非話がしたいと思います」

「彼は死んだ。いるはずがないではないか」

「では、沖田艦長の息子さんとお話がしたい」

藤堂は1人の青年が立ち上がろうとしているのを必死にとどめながら言った。

「彼も死んだのだ。ここにいるはずがない」

古代は分かった。

立ちあがろうとした彼。彼は本物だ。

以前沖田艦長から見せられた写真そっくりの好青年だ。

そして、彼は死んでいる。

では死者達を統括する藤堂の正体はいったい何か。

古代は一計を思い付いた。

「怪談を1つ聞いて下さい」と古代は後ろ姿の顔が見えない藤堂に言った。「実はガミラス兵を取り調べたところ、顔が無かったんです」

「それは……、こんな顔かね？」

藤堂が振り返ると顔が無いのっぺらぼうだった。

次の瞬間、画面はぐにやりと歪んでそのまま消えた。

そしていきなり目の前に何かが見えた。

巨大なアンテナに宇宙服の人間がしがみついて何かをしている。

相原だった。

「相原！」

アンテナを破壊しようとしているようだった。

相原は古代の接近を知ると手を振った。

彼をコスモゼロの後席に収容すると相原は言った。

「古代、ガミラスのリレー衛星だ。破壊しよう」

「もちろんだ」

機銃の一掃射でリレー衛星は破壊された。

「通信が回復したのはあのリレー衛星のせいだ」と相原は言った。「ヤマトを揺さぶる心理戦を仕掛けられたのだろう。だから、通信先は本物の地球とは限らない。実は気付いたんだ。通信でチラッと映った映像に、絶対に死んでいたはずの知り合いがいたんだ」

「おそらく冥界だ」と古代は言った。「あのリレー衛星がリレーした先は地球ではない。妖怪が統括し、死者が集まる世界に他ならないだろう」

「やっぱり……。そう思うと辻褃が合う」

「どういうことだ?」

「母は死の話しかしなかった。生きる希望の話は一切しなかった」

「ともかくヤマトに帰ろう」

他の方面を捜索中だったブラックタイガーも徐々に合流してきた。

まだ相原はあのことに気付いていないようだった。

しかし古代は気付いてしまった。

もしあれが本当に冥界なら、相原の父母は既に死んでいることになる。

死者の変装だと信じ、今は地球の皆の無事を祈るしか無い。

古代は展望室で宇宙を見ながら考え事をしていた。

考えるのは冥界のことだった。

「あら古代君」と森雪が展望室に入ってきた。「考え事?」

「ああ、そうなんだ」

「何のこと?」

「もしも。もしもだよ。冥界とこの宇宙が繋がっているとしたら。どうなると思う?」

「冥界ってなに? 死者の世界?」

「そうだ」

「冥界と宇宙は繋がっていないわ」

「地球近傍ではそうだった。しかし、ここは人類未到の宇宙だ。ここまで来たのは人類でヤマトが初めてだ」

「それで、冥界とつながっているならどうだっていうの? 私達は死んだはずの人達に会うとでもいうの?」

地球との通信で既に会っているという事実は森雪には刺激が強すぎるだろう。そう思った古代は曖昧にぼやかして語った。

「その可能性はある」

「ならその時はまたパーティー?」

「いや。死者はガミラスだ。我々の敵になる可能性がある」

「まさか。それじゃもしも島さんが戻ってきても敵ってこと?」

「えっ?」

考えてもいなかった可能性を指摘されて古代は狼狽した。

古代は島が死んだとは考えたくなかった。

友達なのだ。

しかし、客観的に見て島が死んでいる可能性は高い。宇宙服の酸素は予備も含めて3日と持たない。そしてあれからその何倍もの日数が経過している。

たとえ死者としてであっても、古代は島に会いたかった。

ヤマトは、イスカンダルへの中間地点バラン星に到着した。

巨大な惑星を小さな太陽がまわっている奇妙な星だった。

常識が逆転した世界。

それは古代には冥界の星に思えた。

しかし、沖田に命じられて偵察飛行を続けるうちに古代はあることに気付いた。

現住生物には目が無い。

小さいとは言え十分な明るさを持つ太陽がある。これはおかしい。

それに植物も太陽に向かって伸びようとはしていない。地底の熱を求めて下に向かうものばかりだ。

古代は確信した。

バラン星は冥界の星ではない。

ただの恒星になりそこなった巨大天体だ。

そこに、小さな太陽を設置して冥界の星を偽装しているだけだ。

だが、誰がそんなことを……。

ガミラス……。

更に偵察を続けると確かにガミラスの基地があった。

そして、かつてヤマトを襲った宇宙怪獣が、この星の現住生物の慣れの果てであることも分かった。基地では、多数の現住生物が捕獲され、宇宙怪獣への改造中だったのだ。

古代は基地に大した戦力が無いことを確認するとヤマトに戻って、基地の攻略を進言した。

「あれは戦闘のための基地では無く補給基地です」と古代は言った。「おそらく、地球攻略のための中継基地だと思います。あれを叩けば地球はより安心です」

「分かった。バラン基地を攻略しよう」

古代はブリッジに戻ると、太田に命じた。

「あの太陽の動きに注意しろ」

「太陽がどうかしましたか?」

「おそらく、何かあるとすればあの太陽だ。注意してくれ」

古代の予測は当たった。

バラン基地に降下するヤマトの退路を塞ぐ形で太陽が落下してきたのだ。

「ただちに反転して波動砲を撃て」と沖田は命じた。

しかし、反転が終わる前に太陽に飲み込まれそうだった。

「艦長、どうしても時間が足りません」

その時、相原が叫んだ。「謎の通信が入っています」

「つなげ!」と沖田が叫んだ。

『ヤマト、聞こえるか。こちらヤマト航海長島大介。1時の方向に見える小衛星を撃て。あれが偽装された人工太陽のコントロール衛星だ』

「まさか、島が?」

「古代、悩むのはあとだ。あのコントロール衛星を撃て」沖田が命じた。

古代はショックカノンを発射して衛星を撃破した。

太陽の動きが止まった。

その隙にヤマトは反転を完了して波動砲を撃った。

太陽がいくつもの塊となってバラン基地に降り注ぎ、基地は壊滅した。

ガミラスの戦闘機に搭乗した島が、ヤマトに帰還した。

格納庫で出迎えた古代は叫んだ。「島、これはいったいどうしたんだ！ 俺はてっきり！」

「足は2本あるよ」島は笑った。「宇宙を漂っているときにガミラスに拾われて捕虜にされたが、情報を集め、隙を見て逃げてきたんだ」

「そうか。いずれにしても良かった」

「そんな顔をするな」

「ずっと後悔していたんだ。おまえの気持ちを分かっていたのではないかって」

「俺だっておまえの気持ちは分からないよ。お互い様だ」

島は艦内服に着替えるとブリッジに戻ってきて沖田に敬礼した。

「島大介、職務に戻ります」

「うむ」沖田はうなずいた。

パイロット席に島が戻った。

古代は少しホッとした。

「その席はやはり島が座ってこそだな」

「ヤマトの操縦は任せろ。その代わり、ヤマトの指揮は頼むぞ。艦長代理」

「認めてくれるのか？ 俺が艦長代理だと」

「沖田さんが決めたんだ。反対なんてないさ」

島は爽やかに笑った。

会議室で島は説明していた。

沖田や古代達はそれを聞いていた。

「バラン基地は地球侵略のために作られた補給基地で、初代の司令官は

ゲールといいます。しかし、失敗が多いので副司令官に降格。後から来たのがドメルという男で、こいつは切れます。異次元空洞で遭遇した敵艦隊もドメルの配下です。人工太陽でヤマトを仕留める作戦を考えたのもドメルです」

「しかしバラン基地はもう無い」

「そうです。しかし、ドメルとゲールは宇宙艦隊で遠距離からヤマトの動向を見ていましたから、バラン基地と運命は共にしていません。きっとまた襲ってきます。しかもおそらく予想も付かない奇策です」

「奇策? どのような策かね?」沖田が質問した。

「おそらく、艦隊の編成を変えてくるでしょう。大艦隊による砲撃戦は既に挑んでいますから、同じ事はやらないでしょう。それよりも、行動が鈍る大艦隊は避けて、少数精鋭の小艦隊、特にドメルがヤマトを攻撃する手段として使ったことが無い空母部隊による襲撃があり得ると思います」

「どう対策を取れば良いのかね?」

「敵があくまで空母戦を仕掛ける気なら」と島は言った。「先に空母を発見し、叩いてしまうのが常識的な対処です」

「おい今」と古代が話に割りこんだ。「常識的って、まるで上手く行かないような言い方だな」

「おそらく上手く行かない。ドメルは狡猾だ。その程度のことは先に読んでくる」

「どういうことだ?」

「おそらく、ドメルはセンサー類が無効化される領域で決戦を挑んでくる。先に敵を発見することは難しいだろう」

「条件は向こうも同じじゃないか?」

「いいや、同じじゃない」と島は言った。「やつらは事前に哨戒衛星を何機でも配置できる。しかし、ヤマトにあるのはヤマトそのものと若干の搭載機だけだ。しかも、それらは事前に配置ができない。最初に決戦場に到

着した時が決戦の開始だからだ」

「な、なるほど」古代は考え込んだ。「さすが、島だ」

「それで島君、君の考える対策とは？」

「まず第1に決戦は避けるべきだと思います。ドメルが待ち伏せしやすい場所は避けるべきです。それにも関わらず戦闘が発生してしまった場合は、できるだけヤマトから遠い場所にコスモゼロとブラックタイガーを差し向けて、敵の艦載機をヤマトに近づけないのが良いと思います」

「それはなぜかね？」

「ヤマトの近くで乱戦になれば、同士討ちの可能性があるので、ヤマトの対空兵器が撃てなくなります」

「なるほど。空戦はヤマトから離れて行う方が有利か」

「はい。万一、空戦をすり抜けた敵機が出てても対空兵器が全力で迎撃できます。1機や2機ならそれで始末できます」

その時、相原が血相を変えて飛び込んできた。

「大変です。挑戦状が届きました」

「なんだって？」古代は立ち上がった。

「読め」と沖田が命じた。

それは太陽系方面作戦司令長官ドメルの名で七色星団での決戦を申し入れるという内容であった。日時まで指定してあった。

「あからさまな挑発です。乗るべきではありません」と島が言った。

「決戦というのはな。勝つか負けるか2つに1つなんだ。負ければ全てが終わり。でも、勝てば全てが開けるんだぞ」古代が力説した。

「艦長」と島が判断を仰いだ。

「挑戦を受ける」と沖田は言った。「確かに不利な状況での戦いになるが、幸い島君が情報をもたらしてくれたおかげで、相手の裏をかいて有利に立ち回れる。ここで決戦を受けておく方が良いだろう。何か意見はあるかね？」

「いえ……」島は引き下がった。

「以上だ」沖田は宣言した。

古代はハッと目覚めた。

決戦の作戦計画を書いているうちに眠り込んでしまったらしい。

古代は医務室に向かった。

「佐渡先生、眠くならない薬はないですか？ 仕事があるのに眠り込んでしまうのです」

「眠いときは眠れ。それが健康の秘訣じゃ」と佐渡は答えた。

「しかし……」

「おまえ最近おかしいぞ」

「自覚はありませんが……」

「いや、最初からおかしかったといえぱおかしかったがな。繊細すぎたり粗暴すぎたり。しかし、最近のはまた別だ」

「別ですか」

「そうじゃ」

「何が問題だと思えますか？」

「島のこと……じゃろうな」

「島の……」

古代は戻って来た島の顔を思い浮かべた。

確かに釈然としないものは残る。

「島が姿を消してヤマトは寂しくなった」と佐渡は言った。「しかも、おまえは親友だった。気になって当たり前だ」

どうやら戻って来る前の話をしているようだ、と古代は思った。

「でも、もう大丈夫です」と古代は言った。

そうだ。島はもう戻ったのだ。

「本当にそう思っているのかね？」

「えっ？」

「おまえの顔、まだ死んだぞ。生きているはずなのに」

古代は慌てて顔に手を当てた。「おまえはまだ島を気にしている。そうじゃろ？ 自分が艦長代理に指名されたので、島を自殺に追いやったのではないかと悔やんでいる」

「しかし、島は生きています」

「今のおまえさんのその態度、それが如実に物語っておるよ。おまえさん、納得などはしておらん」

古代は考えた。

確かに今の島は何かが違う。

隣の席に座っていて、それを感じてしまう。

「分かりました。ありがとうございます」古代は佐渡の部屋を後にした。

そこで古代は考えた。

そうだ。島を将棋に誘おう。

しかし、ブリッジに島はいなかった。

ヤマトの操縦桿を握っているのはアナライザーだった。

「古代サン。何か御用デスカ？」

「いや、何でも無い。島が操縦桿を握っているような気がしてな」

「ヤハリ、疲レテイマスネ。佐渡先生ノ診察ヲ受ケルコトヲオ勸メシマス」

「いや、今行ってきたばかりだ」

「デハ、休息ヲ取ルコトヲオ勸メシマス」

「わかった。もう寝るよ」

確かに島が 24 時間起きていていつも操縦桿を握っているはずがない。彼にも寝る時間が必要だ。

古代も自室に引き上げて眠り込んだ。既に就寝時間だった。

古代は久々に島と将棋を打った。

そこで古代は感じた。

島の将棋は変わった。

情け容赦の無い圧倒的な攻撃で古代は手も足も出なかったが、待ったを掛けるといつでも応じてくれた。

島と将棋を指している気分になれなかった。

「こちらが積んだ」と島が言った。「おまえの勝ちだ」

もちろん、無数の待ったを掛けた結果だ。どう考えても公平にやれば島の勝ちだ。

「勝った、というよりも、勝ちを譲ってもらった、という気分だな」古代はあたまをかいた。

「いや、おまえも強くなったよ」島は笑った。

たとえ自分が強くても相手に合わせてレベルを落として相手を楽しませる。そういう気配りができるようになった、ということか。

その時艦内放送が流れた。

「手空きの者は全員展望室に集合」森雪の声が伝達した。

沖田主催の水杯だった。

「これは死を覚悟するためのものではない。勝ってイスカンダルに行くための水杯だ」

全員が、「おうっ」と答えて飲み干した。

しかし、その直後、数人が腹痛を訴えた。

「どういうことだ」と古代は言った。

「旅先デ水ヲ飲ムナト言ワレテイマスガ、水ヲ飲ンダカラデショウ」アナライザーが答えた。

「まさか。ヤマトの飲料水だぞ」

水に試薬を入れて調べていた森雪が叫んだ。「古代君、違うわ」

「どう違うんだ?」

「一部の水杯に入っていたのは飲料水じゃないわ。たぶん、どこかの機

器の冷却水よ。当然雑菌は除去されていないから、飲んだから危険よ」

「どういうことだ。なぜ間違えた」

「私は厨房で飲料水を入れてきたわ。誰かが途中ですり替えたのよ」

「誰がそんなことを」

「分からないわ。まさか水をすり替える人が出るなんて思わないから、ここに三十分ぐらい放置してしまったし」

「機関部員の悪質な悪戯か……」古代は考えた。「それともスパイがいるのか」

あの藪とかいう目つきの悪い機関部員なら、やらかしそうだ。

しかし、ヤマト乗組員は疑いたくない。

スパイなのだろうか。

ヤマト乗組員の誰かがスパイなのだろうか。

しかし、全員が顔見知りだ。今更入れ替わるのは無理だろう。

ならばカメレオンのように姿をカモフラージュできる兵士が潜んでいるのだろうか。

その時、古代は思い出した。

敵将ドメルは奇策で来る。

つまり、正面から決戦を行うと見せかけて、本当は姿無き潜入者の工作でヤマトを破壊する気ではないか。

だが、そんなスパイがこっそり乗りこむチャンスがあっただろうか。

あった。

バラン星で現住生物や植物を調査したときだ。

あの時、こっそり現住生物に紛れて艦内に入れば入れないことはない。

カメレオンのように色を変える偽装技術があればなお完璧だ。

だがその時、敵編隊発見の報告が入った。

古代は叫んだ。

「ブラックタイガー出撃、俺もコスモゼロで出る」

スパイより先に敵機を阻止せねば。

古代はブラックタイガー編隊を指揮して、敵編隊との空中戦に突入した。しかし、それは畏だった。

ドメルは小型機をワープさせ、ヤマトの戦闘機隊が離れた隙を突いて大編隊で襲撃してきたのだ。

しかし、古代達が戦っていたのはガミラスの戦闘機隊。そう簡単には戻れない。

古代達が敵編隊を始末してヤマトの援護に戻ったころには、ドメルの攻撃は一段落しつつあった。ヤマトのセンサー類は壊滅状態だった。

古代は帰還しようとする敵編隊の追撃を命じたが、それは新しい隙を作っただけだった。つまり、ドメルは攻撃が終了した爆撃機隊を囷にして、次の攻撃隊を送り込んできたのだ。

巨大なミサイルを左右から撃ち込まれ、ヤマトは穴だらけになった。そしてやっと攻撃が一段落した。

「この調子で波状攻撃が続くとヤマトは持たないぞ」と古代は言った。「エネルギーもな。今のうちに着艦して補給しよう」加藤が提案した。「たしかにそれが良さそうだ」

全機着艦して補給を開始した時に、更なる攻撃機が飛来した。それは大形のミサイルを1つだけ釣り下げた大形爆撃機1機だった。大形ミサイルは波動砲の発射口に突き刺さり、爆発はしなかった。

「不発弾か？」古代はブリッジからミサイルを見下ろした。そこでミサイルは回転を始めた。

「内部に食い込んで波動砲を破壊する気か！」古代は叫んだ。

「それだけじゃない。バイタルパートの内部であれが炸裂したらヤマトは終わりだぞ」島が言った。

「バイタルパートの装甲はドリルでも簡単に穴が空けられないと聞いたぞ」古代は島を見て反論した。

「馬鹿! エンジンの噴射を伝達する穴と、波動砲を撃つための穴だけはバイタルパートに空いているんだ」島が叫んだ。「おまえヤマトの図面を見たこと無いのか!」

「真田さん!」と古代は真田を振り返った。

真田は何かを考え込んでいた。

「どうしたんです、真田さん」

「いや、このミサイルの目標は本当にバイタルパート内部だろうか」

「どういう意味ですか?」

「このミサイルの直径は、バイタルパートの穴より1メートルほど大きい、そこで一度つかえてしまうだろう。最終的に穴を広げて強引に入るとしても、それまでに対策が取れそうだ」

「では一体……」

「むしろ本命はこれではないか」

真田は、艦内配置板でバイタルパートの手前を指さした。

「これは何ですか?」

「ヤマト神社だよ」

「どういうことですか?」

「伝統的に日本系の軍艦には神社が存在する。日本にあるいずれかの神社から分祀して祭られるのだ」

「だからそれがどうしたんですか」

「分からないのかね」

「何がですか」

「多くの人命ごと海に沈んだ戦艦大和を改造したのがヤマトだ。放っておけばここで無念の死を遂げた英霊が沸いてきて満たされる」

「しかし、英霊と言っても死者です。ガミラスの味方をするかも知れない」

「その通りだ、しかし、そんな英霊は実際には出ていない。なぜだと思

う?」

「なぜですか?」

「ヤマト神社の存在が霊の魂を鎮めているからだ」

古代はハッとした。

「分かりました。ヤマト神社が破壊されると、ヤマト艦内は自動的に霊の支配下に落ちると」

「そうだ。普通の宇宙船ならいざ知らず、かつての戦艦大和を改造した宇宙戦艦ヤマトならでは攻略法だ」

「対策は、対策はあるんですか?」

「アナライザーの調査待ちだ」

そこにドメルの空母群が来て砲撃してきた。

「ドリルミサイルはまだか。波動砲はまだ使えんのか」と沖田が叫んだ。

そこでアナライザーが報告した、

「真田サン、アノミサイルカラハ 203 ヘルツノ周期デ脈動スル電力ガ 3 本検出サレマシタ。オソラク三相交流デ動作スルモーターデ回転シテイマス」

「でかした。ならば配線の位相を組み替えるだけで逆転できるぞ。アナライザー、付いてこい」真田は走って行った。

ミサイルは逆転し、ヤマトの内部から外に出ていった。

そして、ヤマトを砲撃していたドメルの空母群に衝突した。

連鎖爆発で、ドメルの主力空母は壊滅した。

残ったのはドメルの円盤形旗艦だけだった。

円盤形旗艦は爆雷でヤマトを攻撃してきたが、ヤマトの心臓部を食い破るだけの力はなかった。

円盤形旗艦はヤマトの艦底に接舷した。

そして通信を求めてきた。

「私が太陽系方面作戦司令長官ドメルだ」

「わしが宇宙戦艦ヤマト艦長沖田十三だ」

「あなたのような勇士に会えて光栄に思っている」

「ドメル指令。どうだろう。我々をこのままイスカンダルに活かしてはくれないか」

ドメルは考え込んだ。「それはできない」

「なぜですか。ガミラスの命運を背負っているからですか」

「違う」

「ではいったい……」

「死者の楽園、静寂に満ちた世界に生きている者を入れるわけにはいかないのだ。それはガミラスになっているか否かに関係無く全ての死者の問題なのだ。だから、あくまで生き延びるための人類再興計画を許すわけにはいかない」

「ドメル指令、あなたはまさか」

「そうだ。私は自分が死者であることを知っている。だから、既に死んでいる以上これ以上死ぬことは無い。このままこの旗艦はヤマトを道連れに自爆する。我々にとって、それは死ではない。既に死んでいるからだ」

「しかし、その小形の旗艦を自爆させた程度ではヤマトの全てを破壊することなど無理だ」

「構わない。自爆の目的は、ヤマト艦内の神社を破壊することだけなのだ」

「では。まさか」

「そうだ。この自爆によって霊で満ちよ、ヤマトよ。そして霊の世界になれ」

そのまま通信は切れた。

「ドメルの船は自爆するつもりだ。艦底部の乗組員は上部に非難せよ！」
沖田は叫んだ。

円盤形旗艦は自爆した。

多くの犠牲者が出た。

「宇宙葬を執り行わねばならん」と沖田が言った。「ヤマト神社が残っているか調べてきたまえ」

古代が見に行くと、奇跡的に神社は残っていた。

ドメル自爆から逃れられたのだ。

まさに神仏のご加護だ。

しかし、沖田に報告してからまた神社に戻ると神社は破壊されていた。誰かが壊したのだ。

だが艦内に霊が出ることはなかった。

古代は森雪に撮影を望まれた。

思い出の写真が無いのもつまらないと言うのだ。

古代はセルフタイマーをセットすると、待っている森雪のところに走って肩を組もうとした。

しかし、その親しげな手は森雪の手で払われてしまった。

その瞬間を撮影され、古代は参った。

「なんだこりゃ、失敗写真か」

「いいじゃない。パパとママの青春を語る良い思い出になってよ」

そして森雪はお礼を言って立ち去った。

「パパとママの青春か。女の子って言うのはませてやがる」古代はそこで首を捻った。「パパとママ？ 誰のことだ？」

そこで佐渡先生の笑い声が聞こえた。

また展望室の隅で酒を飲んでいたらしい。

「佐渡先生。いらしていたんですか」

「ははは」佐渡は笑った。「若いもんはええのう」

「ところで佐渡先生。ヤマト神社の件ですが」

「ヤマト神社？ なんじゃそりゃ？ ヤマトの神社でも作るのか？」

「いえ、破壊された件です」

「それは知らんな。ヤマト神社というのが船内にあったのかね？ わしは知らなかったよ」

「ご存じではなかったと？」

「そうじゃ。船内にわしの知らない部分はいくらでもあるぞ。医者は航行にタッチはせんからな」

古代は質問する相手を間違えたことに気付いた。

「ならわしから別の話がある」と佐渡が言った。

「なんでしょう」

「たぶんおまえさんはこれから重大な決断を迫られる」と佐渡は酒瓶を覗き込みながら真剣に言った。「その時、おまえさんは何を選ぶ。人類の未来か、森君か、島君か、沖田さんか、アナライザーってことはないな。それともヤマトか。あるいはヤマトの物語か」

「何を仰りたいのか分かりません」

「酔っ払いのたわごとじゃ。分からなくて当然じゃ」

佐渡が酒瓶を抱えて展望室を出て行くと、古代は1人残って考えた。決まっている。

俺が最後に選ぶのは森雪だ。

しかし、あの森雪の態度はどうだ。

たとえ古代が森雪を選んでも、森雪は選んでくれない可能性がある。

やはり人類の未来か。

そのためにイスカandalまでの長い旅路を過ごしてきたのだ。

古代は再建されたヤマト神社を見に行こうと思った。

しかし、あるはずのヤマト神社は見つからなかった。

古代は艦内を歩き回って疲れ果てた。

そのまま自室で横になって目を閉じた。

その時ドアをノックする者があった。

真田だった。

「何の用ですか?」

「実は分かったんだよ。ヤマトの謎が」

「謎? 展望室の大きさの? 第1艦橋の大きさの? ヤマト神社を破壊されて霊が満ちなかった理由?」

「全部だ」

「分かりました。聞きます」

「いや、相部屋の島がまだ寝ているだろう。起こしては悪い。食堂か展望室で話そう」

古代と真田は一緒に展望室に移動した。

「さて、何から話そうか」と真田は言った。

「回りくどい話はいいです。結論を先に」古代は促した。

「そうか。ならば言おう。ヤマトと言う宇宙戦艦は存在しない。我々乗組員も存在しない」

「どういう意味ですか?」

「ヤマトは亡霊なんだよ。乗組員も亡霊だ。ヤマト神社が破壊されたのになぜ霊が艦内に満ちなかったのかといえば、そもそも最初から霊で満ちていたからだ。そもそもヤマト神社も存在しない。それがあるはずだと思う英霊の意志があり、その意志によってあるかのように思われていただけだ」

「まさか」

「ヤマトは亡霊であるからサイズの矛盾は全て解釈できる。もともとサイズなんて無いんだ、亡霊にはね。無理に大きさを測ろうとすると矛盾した数値が出てくるだけだ」

「では真田さんの手足も」

「そうだ。俺も亡霊にすぎないから予備のパーツはいくらでも無から取り出せる。あると思えばあるのだ。無いと思えば無いのだ」

「では自分も亡霊……」

「いや。どうもそうではないらしい」と真田は言った。「この船には亡霊では無い者、つまり生者が若干乗りこんでいるようだ。その1人が君だよ、古代」

「自分は生者?」

「そうだ。限り無く死者に近いが生者だ」

「混乱して良く分かりません」

「良く聞け。ヤマトが行っているワープと称する行為。あれは一体何だと思う?」

「光速を突破する方法ではありませんか?」

「いや、実は冥界に落ち込んでいく手段ではないかと考えている」

「しかし、波動エンジンは真田さんが指揮して作ったと聞いています」

「凶面通りに作っただけで動作原理は分かっていた」

「では……」

「ヤマトが向かう最終目的地は冥界なのではないか。そのためには、冥界に受け入れられるための亡霊の船に亡霊の船乗りを乗せ、一部の限り無く死者に近い生者を乗せて航海しているのではないだろうか」

「ですが、我々が向かったのはイスカンダルで人類を救うためだったはずです」

「たぶん、それも嘘では無いだろう。単なる冥界訪問のために人類が最後の宇宙戦艦を派遣するわけもない」

「つまり?」

「イスカンダルが存在する場所は……、いやそれは言うまい。まだ確証が得られたわけでもないのだ」

古代は真田の言わんとすることが何となく分かった。

「つまり、スターシャさんも死者ではないかと」

「長く生きてきたはずなのに外見は若く美しい。これは死者が持つ属性

ではないかね?」

「しかし、妹のサーシャさんは火星で死にました」

「君が死ぬ瞬間を看取ったのかね?」

「いえ。駆けつけたときには既に死んでいました」

「もともと死んでいたのかもしれない」

「えっ」それは古代にはかなり突飛な発想に思えた。

しかし、言われてみればその通り。

サーシャの宇宙船はまるで誰も操縦していないかのように戦闘宙域を突っ切り、減速することなく火星の大地に激突したのだ。

サーシャが既に死んでいたとしても、不思議ではない。

「イスカンダルに到着したらスターシャさんは死者だった……となったとして、本当に放射能除去装置はあるのでしょうか?」

「あるのだろう」と真田は言った。「もし地球を滅ぼす陰謀なら、もっと手っ取り早い方法がいくらでもある。おそらく放射能除去装置はイスカンダルで我々を待っている。しかし……」

「死んだスターシャさんに面会することは覚悟しておけ、ということですね」

「そうだ。だか気に病むな。私も既に死んでいる身だ」

「真田さん……」

「しかし、まだ解決していない問題もある。シャワーでも浴びてリフレッシュしてから続きをするか」

真田はシャワールームに消えていった。

翌朝、真田の撲殺死体がシャワールームで発見された。

「沖田艦長、これはどういうことですか」駆けつけた古代は、既に現場にいた沖田、佐渡、森雪、島を見回した。

「見ての通りだ。真田は殺された」沖田は答えた。

「いったい誰が、それより何のために」古代はうめいた。

「自分は」と島が言った。「事故説を採ります。真田さんは何か便利な道具を発明しようとして誤って自分を撲殺してしまったのでしょうか」

「しかし、その便利な道具とは何だね？ どこにあるんだね？」と佐渡が質問した。

「1人で歩いて行ったのでしょうか。それぐらいの装置、真田さんなら難なく作れます」

「自分はガミラスのスパイ説を採ります」と古代は言った。「真田さんはガミラスの真相に到達しようとしていた。だから殺されたのではないのでしょうか」

「その真相とはなんだね？」

「ヤマトは亡霊戦艦であり、乗組員も亡霊であり、ガミラスも亡霊であると。真田さん自身も自分は亡霊だと言っていました」

「古代、その説明は筋が通らないぞ」島が意見した。

「なんでだよ、島」

「もしも真田さんが亡霊なら、既に死んでいる。死んでいる者を更に撲殺はできない」

確かに島の言う通りだった。

古代は自分の説の矛盾を感じた。

「真田君の死因はともかく」と沖田は言った。「それ以前に解決すべきことがある」

「为什么呢？」と古代は質問した。

「水杯のすり替え事件の犯人だ」

「分かったのですか？」

「証拠が揃った。森君の地道な調査でな」

森雪が前に出て説明した。

「あの展望室にはカメラが設置されていません。しかし、ずっと手前の

通路にはありました。あの展望室に入るには必ず通らなければならない位置です。問題の時間帯にそこを通過したのは島さんだけです」

島の表情が醜く捻れた。

「すり替えそのものが記録されないことまでは確認していたが、それ以前のところを見落としたようだな」と沖田は言った。

「すみません。ただの悪戯心です」島は言った。

「その弁明は納得しにくいな」と沖田は言った。「他の備品損壊事件や、食料の投棄疑惑も君にはあるのだ」

「……」島は黙りこんだ。

「そもそも。我々は君のアドバイス通りに七色星団の決戦に挑んだ。そして、まんまと敵の術中にはまった。君が誤ったアドバイスを与えるように命令されていたのではないかね？」

「なるほど、既に沖田さんにはお見通しというわけですか」

「君がガミラスのスパイだということは、ほぼ 100%分かっている。しかし分からないのは真田君を撲殺した動機だ」

「彼が真相に到達し掛かっていたからですよ」と島は言った。「そして、みんなと同じように食事を取らずに研究に没頭したからです」

「食事？ 何のことだね？」

その時壁のスピーカーが叫んだ。

アナライザーの声だった。

『大変デス。乗組員ノホトンドガ苦痛ヲ訴エテ死ニツツアリマス。佐渡先生、急イデ食堂へ』

「わ、分かった。森君、来い」

森雪を引き連れて佐渡は部屋を慌てて出た。

「お前の仕業か？」と沖田は島に質問した。

島はうなずいた。

「毒をもったのか？」

島は再びうなずいた。

「食事に行かずに研究を続ける真田は撲殺したのか?」

島はまたうなずいた。

「では、本当にガミラスのスパイなんだな?」

「僕は宇宙に飛び出した時点で死にました。死んでガミラスになったのです。そして、スパイに志願してヤマトに戻ってきました」

「なぜ今になって毒をもった」

「ガミラスは死んでしばらくすると顔が変色して青くなります。自分ももうすぐ青くなる。そうなったらガミラスであることがばれる。行動は今は無かったです」

「それで、今朝の朝食に毒を盛ったのか」

島はうなずいた。

「しかし、真田を殺した凶器は何だ。どこに隠した」

「簡単です。真田自身の腕ですよ」

「なんだと?」

「真田さんは手足が義手義足だった。集中しすぎてシャワー中に失神した真田さんの手を外して撲殺する。ビスを止めて腕を戻せば凶器の無い殺害の出来上がりです」

「だが島、君の言い分を飲むとすると、正体がばれるからヤマトの乗組員を毒殺しようとしたが、真田さんは真相に近づきすぎたから殺したという」古代は言った、

「そうだな」

「しかし、真田さんが話した真相の通りだとすると、真田さんはもともと死人だ、死人はそれ以上殺せない。矛盾する。そのことは、おまえが指摘した通りだ。どう説明するんだ」

島は笑った。「だからおまえは子供なんだよ、古代」

「なんだと?」

「真田は真相に近づきすぎたので殺した。しかし、それは真田が真相に到達したこととはイコールではないのだ。君が真田から何を聞いたとしても、それは真相そのものではない」

「ならば問う」と沖田が言った。「真相とは何だ？」

「その問いは無意味。沖田なら知っている。本物の沖田なら」

「わしは本物だ」

「どうだろうね」島は笑った。

「では、これ以上犠牲者は出せぬ。ここで死んでもらおう」

「ご自由に」

島は、好きにしてください、という風に手を上げた。

沖田は拳銃を発射し、島の身体を貫いた。

島の身体はその場で倒れた。

血は流れなかった。

弾倉が空になるまで沖田は撃ち続け、全て島の死体を貫いた。

島はピクリとも動かなかった。

「沖田艦長、いったい何がどうなっているのでしょうか。真田さんが到達しようとしていた真実とはいったい何でしょう」

「分からない。それより食堂だ」

沖田と古代は食堂に走った。

結局分かったことは、ほんの一握りの乗組員を除き、大半は手遅れだったことだ。つまり、ヤマトはほんの一瞬の時間で乗組員の大半を失った。

古代はすっかり人の気配が無くなり、ガランと静まりかえった艦内を嘔みしめた。

今のヤマトで動けるのは古代を別にすれば、病身の沖田、航行にも戦闘にもタッチしない医者佐渡、複数の職種のスペシャリストだがやはりヤマトの航海を直接担う立場にない森雪、そして意志決定はできないロボッ

トに過ぎないアナライザーだけだった。

古代はヤマトの操縦桿を握ってみた。

しかし、古代には無理だった。

まるで島から「おまえには無理だよ」と言われたような気がした。

操縦桿はアナライザーに任せるしかない。

古代は戦闘班長の席に座って、このまま航海が無事に終わることを期待することしかできなかつた。もし敵が出てきたら、ヤマトの装備は古代1人では使いこなせない。

「大丈夫か古代」と佐渡が古代の様子を見に来た。

「大丈夫ですよ、佐渡先生」と古代は責任感で答えた。

「大丈夫な顔に見えん」と佐渡は言った。「少し寝ておれ。わたしには無理だが、夢で誰かが気の利いたことを言って励ましてくれるかもしれん」

「誰かといいますと？」

「飲んだくれの獣医ではなく、どこかの賢人じゃな」

「たとえば？」

「そうじゃなあ。賢人といえば、古代ギリシャかのう」

「ははは。こんな宇宙の彼方で古代ギリシャですか？」

「宇宙の彼方だとは思うな」

「それはどういう意味ですか？」

「ここが誰も来たことがない未知宇宙だと思うから緊張するのもかもしれん。そう思わなければ、それだけで改善の可能性もある」

「佐渡先生にはかなわないな」

「これを飲め」

「これは？」

「リラックスして眠れる薬じゃ。何、それほどの強い効能は無いから緊急事態にはすぐ目が覚めるじゃろう」

「分かりました」

古代は錠剤をもらってそれを飲み込むと、椅子に座って目を閉じた。

古代は緊急サイレンで目が覚めた。

医務室で勤務していたらしい森雪が第1艦橋に駆け込んできた。

「森君」と言いながら艦長が椅子に座ったまま専用エレベーターで艦長席に降りてきた。

「はい、なんでしょう」

「このエネルギーはおそらく未知の通信だ」と沖田は言った。「解析を頼む」

「分かりました」

雪は、主が不在となった相原の席に座ると解析に取りかかった。

「艦長、何事ですか?」と古代は艦長の方に向き直った。

「本艦に、未知のエネルギーが作用しておる」

「真田さんがいれば調べてもらえるのに」

「通信なら相原が分かったかもしれん」

「惜しい人達を亡くしました」

「だが我々は前に進まねばならん」

その時、雪が報告した。「解析できました。大スクリーンに出します」

大スクリーンに、ギリシャの賢人としか言いようのない男が映し出された。金髪白人でゆったりした布を身体にまとっている。

「我が名はボルゾン王スルー」とその男は名乗った。

「私は宇宙戦艦ヤマト艦長沖田十三だ」と沖田も名乗った。

「知っている」

「知っているですと?」

「左様」

「しかし、大マゼラン星雲はおろか、銀河系外に出た人類は我々が初めてのはず。どこでお聞きになったのでしょうか?」

「ボルゾンの賢人に知らぬこと無し」

「賢人ですと?」

「左様。イスカンドルの女王は慈愛を体現し、ボルゾンの王は賢知を体現する」

「ではガミラスのデスラーは何を体現しているのですか?」

「その件は会って話をしよう。我々は、ヤマトを助けられると思う」

ヤマトはそのままボルゾン王のいるボルゾン星の衛星軌道に入った。

「アナライザー、ボルゾン星というのはどういう星なんだ?」

「地球型惑星デス。全体ガ地中海沿岸ニ似タ温暖ナ気候デス。タダシ、重力ガ地球ノ1.5倍アリマス。地球人ガ住ムニハ不適切デス」

「距離も遠すぎるな。全人類をここまで運ぶのは無理だ」

「ハイ」

アナライザーだけを留守番に残し、ヤマト乗組員一行は搭載艇でボルゾン星に降下した。

宇宙港とも言えない広場に搭載艇は降下した。

そこでは、ボルゾン王以下のボルゾン人達が待ち構えていた。

「歓待を感謝します、ボルゾン王」と沖田は握手した。

「我々はイスカンドルのスターシャとも親しい。援助するのは当たり前だ」

「いったいこのボルゾン星とイスカンドル星はどのような関係なのですか?」

「相互補完的な関係にあります」とボルゾン王は言った。「イスカンドルが女性原理を、ボルゾン星が男性原理を体現します。だからイスカンドルは女王が統治し、ボルゾンは男王が統治しています」

空中に浮かぶ板に乗り込みながら一同は会話を続けた。

「では、この星は事実上イスカンドルの一部と見なして良いのでしょうか?」

「そうではありません。あなた方が必要とするコスモ・クリーナーDはあくまでイスカンドルにあり、ここにはありません」

「では我々の旅はまだ終わりではないと」

「その通りです」

乗り物が通過する街並みにはあらゆる宇宙人がいた。

人の姿をしている者もしていない者もいた。スライム上の宇宙人も、岩の塊のような宇宙人も毛むくじらの宇宙人もトカゲのような宇宙人もいた。

それらを通りすぎ、ヤマト乗組員は歓待のテーブルに招かれた。

果実が溢れるテーブルに白ワインが注がれていた。

「では、我々をこの星に招いた理由は何でしょう？」と沖田は質問した。

「立場上我々は乗組員が足りないヤマトに人員を補充することができません。あくまで地球人は自力でイスカンドルまで行く必要があります」

「それでは？」

「しかし、我々は数が減った乗組員でも運行できるように、ヤマトを改造することができます」

「それは助かります。無理に無理を重ねて運行してきましたがそろそろ限界でした」

「その件はさっそく作業に取りかかります」

「感謝します」

「ではもう1つの話題について」

「何でしょう」

「あなたがたは知りたいのでしょうか？ ガミラスの正体について」

「ご存じなのですか？」古代が身を乗り出した。「ガミラスとは冥界の死者ではないのですか？」

「冥界の死者という解釈ではまだ半分です」

「半分……」

「残りの真実を伝えるために私はここにいます」

「教えて下さい。残りの真実とは何ですか？ 真田さんが到達しようとして殺された真実なのですか？」

「既にお話しした通り、イスカンダルは慈愛を、ボルゾンは賢知を司ります。しかし、慈愛も賢知もたった1つの価値観ではありません。それゆえに矛盾を抱え込みます」

「矛盾を抱え込むとどうなるのですか？」と古代は身を乗り出して質問した。

「分裂します」

「分裂？」

「スターシャは分裂し、サーシャを産み出しました。スターシャは本来包み込む慈愛を司る者だが、サーシャは行動的な慈愛を体現しようとしたのです。その結果はご存じの通り、火星で死にました。行動的な慈愛とは死の表裏一体」

「まさか。それではボルゾン王も分裂したと？」

「左様」

「分裂したもう1人のボルゾン王とは」

「デスラーと名乗り、死者の国を支配し、地球を侵略しようとしたのです」

「まさか」

「賢知の行き着く先は、愚鈍なる民をいかにして導くか。武力で強制することが最善と思う行きすぎた合理主義が私の中にデスラーを産み、ガミラスを産み出してしまったのです」

「では、ガミラス星はどこにあるのです？」

「イスカンダルの隣。イスカンダルとガミラスは二重惑星です。資源を取り尽くされて穴だらけになったイスカンダルの兄弟惑星は墓地として使用されていて、死者を使役するデスラーには好適な根拠地になったのです」

「まさか」

「それだけではありません。デスラーの男性原理は、スターシャの女性原理を屈服させて支配することまでを視野に入れていています。そのために、イスカンダルに隣に本拠を据えたとも言えます。スターシャが隙を見せればすぐにでも襲いかかるでしょう」

「ボルゾン王はそれを止めようとしませんか?」

「それができればとっくにしています」

「なぜできないのですか?」

「私の中の戦う意欲は全てデスラーが持って行ってしまったからです」

善意と良識の塊のボルゾン王には、確かに欠けているものが多くあると古代は思った。きっとそれらが人の姿を取ってデスラーと名乗っているのだろう。

「ならば、あなたがヤマトに期待しているのは……」

「そうです。デスラーからスターシャを守る戦い。それはあなた方に期待する以外にありません」

「だが、我々はあくまで地球を救うためにここまで来たのです」

「スターシャを守ることは、コスモ・クリーナーDを守ることと同義です。つまり地球を救うことと同じです。これでやる気になっていただけましたかな?」

「いずれにしても」と沖田は言った。「イスカンダルとガミラスが二重惑星だということは、我々がイスカンダルに行こうとすればガミラスは確実に妨害してくる。そういうことですか?」

「左様」とボルゾン王はうなずいた。「デスラーはそういう男です。自分自身のことなので、良く分かります」

その時、古代は信じられないものを見た。

金髪白人に思えたボルゾン王が手をテーブルにぶつけた拍子に、白い肌が剥げて青い色が見えたのだ。

青い肌……。

それは時間が経過した死者の属性ではなかったのか。

「ボルゾン王」と古代は言った。「歓迎を感謝します。しかし我々には行かねばなりません。一刻を争う旅なので」

「わしからも礼を言いましょう」と沖田も言ったが、すぐにこの場を立ち去りたい気持ちは一緒だったらしい。沖田もすぐに腰を浮かせた。同じ事に気付いたらしい。

まだ気付いていない森雪と佐渡は驚いている。

「だがヤマトの改造は……」

「我々がこのまま航海を続けます」と古代は言い切った。

そこでボルゾン王は立ち上がった。「待ちたまえ。生者を偽装したことは謝る。確かにわしは死者だ。しかし、他の話は本当だ」

古代と沖田は足を止めて振り返った。

「見てくれ」とボルゾン王は胸を開いた。「わしには心臓が無い。心臓がデスラーを名乗って出て行ってしまったのだ」

「死者に心臓は不要の器官です」

「その通り。だからわしはこうして話をしておる。しかし、大切な感情は心臓と共にここにあった」

「たとえば？」

「スターシャを愛する気持ち」

「では、もう一度話をしてくれますね？」

「いいだろう」とボルゾン王は胸を閉じて椅子に座った。「ボルゾン星、イスカンダル星、ガミラス星、その3つは全て死者の国だ。冥界に属する。諸君らがワープを重ねて来たのは大マゼラン星雲ではなく冥界だ」

「それで？」

「コスモ・クリーナーDとは除霊を行う装置だ。それにより、地球はガミラスの霊によるあらゆる災厄から解放され、復活することができる。そ

の装置をヤマトは冥界から持ち帰らねばならない」

「なぜ霊の世界である冥界に除霊装置があるのですか？」

「本当は悪霊だけを払うはずだったのだ。しかし、実際にはスターシャ以外のイスカンダル人を全て除霊して墓の下に戻してしまった」

「どうしてですか」

「小さな悪は誰しも経験があるからだ。装置はそれらに全て反応してしまった」

「なぜスターシャさんだけ無事だったのですか？」

「おそらくスターシャだけが生者だったからだろう。除霊装置は霊だけに作用する」

「では、我々は生きたスターシャさんに会えると期待して良いのですね？」

「それは分からない。スターシャがまだ生きているか既に死んでいるかは私にも分からない」

「なぜですか」

「デスラーがホットラインを切断して久しいからだ。派遣した連絡宇宙船も全て撃墜されてしまった」

「なるほど」

「ただこれだけは覚えておいてくれ。全ての死者がデスラーの味方ではない。諸君らが生きることと協力的な死者も冥界にはいることを」

「承知した。ボルゾン王。では病身に 1.5G は応えるのでこれで失礼する」と沖田は搭載艇に歩き出した。古代はそれに続いた。

「沖田艦長」

「目的地のサンザーは近い」と沖田は言った。「あとは努力で乗り切ろうじゃないか」

古代はうなずいた。

ヤマトはゴールに到達しようとしていた。

目的の恒星系に入ったのだ。

「ここが恒星系サンザーか」古代は窓から見回してみたが、まだ恒星までは遠いので見ても良く分からない。「太陽と似ているということしか分からないな」

「ココカラハ慎重ニ進マネバナリマセン」

「なぜだ、アナライザー」

「資料ガ錯綜シテイルカラデス。イスカンダルハ第1惑星ナノカ第8惑星ナノカ、ソレトモ第3惑星ナノカ分カリマセン」

「第8惑星ってことはなさそうだな。そこは寒すぎる」

「ソウ思イマス」

「ならば1か3か」

「第1惑星モ熱スギマス。太陽系デ言エバ水星並ミデス」

「ならば第3惑星か？」

「可能性ハ大デス」

「よし、第3惑星に向かえ」と沖田が命じた。迷いは感じられなかった。

「古代サン、第3惑星ノ計測結果ガ出マシタ。平均公転半径 1.495 978 707 00×10¹¹m、公転周期 365.256 363 004 日、自転周期 23 時間 56 分 4.0905 秒、衛星ノ数 1。地球型惑星デス」

「衛星が1つというのも地球に似ているな」

「非常ニ巨大ナ衛星デス。直径 3, 4 7 4. 3 k m。二重惑星ト言ッテモ良イグライノ大キサガアリマス」

「二重惑星か。そうか。ボルゾン王の言った二重惑星とはそのことか」

「ドウイウコトデスカ？」

「説明は後だ。ともかく第3惑星に進路を取れ」

「古代サン、巨大衛星カラ、ミサイルデス」

「なにっ!」古代は目を開けた。「迎撃ミサイル発射!」

「ミサイル担当者ガイマセン」

「なんてこった」古代は自分でミサイル発射コンソールに走ると迎撃ミサイルを発射させた。

辛うじて敵ミサイルはヤマトの手前で迎撃された。

「艦長、古代サン、今ノミサイルニハ何カ特殊ナ物質ガ含マレテイタヨウデス。センサーガ無効化サレマシタ」

「航行は危険だ。エンジンを止めろ」と沖田が命じた。

アナライザーはヤマトを停止させた。

しかしヤマトは止まらなかった。

ヤマトを包んだミサイルの破片がヤマトをガミラスへと引き寄せていく。その動きは止められなかった。

「艦長、どうすれば良いのですか。このままではガミラスに引き込まれます。イスカンダルに行けません」

「戦って活路を見出すしか無いだろう。最後の決戦だ」

「ボルゾン王の願い通りにですか?」

「ボルゾン王? ああそうだ」

「いきなりガミラスとの決戦ですか。予想よりも早いですね。しかし、これだけ乗組員が激減してはまともな戦闘態勢は取れません」

その時、沖田は森雪の方を向いて別のことを言った。

「森君。計算してくれ」と沖田が命じた。「もし、コスモゼロに2人の乗員を乗せて、最低限の燃料だけを積んでカタパルトで射出した場合、あの雲を脱出してイスカンダルまで行けるかね?」

「は、はい。計算してみます」

森雪はコンピュータールームに走った。

「艦長、何を考えていらっしゃるのですか!」

「古代、目を覚ませ!」

古代は頭を振って目をまばたいだ。

「古代、起きたか?」

「はいっ」

「我々は人類を救わねばならん。たとえ誰が死のうとだ。種としての人類は残さねばならない」

「はいっ。死ぬ覚悟はできています」

「馬鹿者」と沖田は叫んだ。

「なぜダメなのですか」

「お前は死んではならん。森君もだ」

「生き残るには沖田艦長の方がよほど立派な人間だと思いますが」

「しかし、もう老いた。未来への希望は残せない」

「どういう意味ですか」

「古代、雪、お前達は希望なのだ」

「希望……」

「そうだ。おまえたちの2人とその愛こそが全てを切り抜けるための最後の希望なのだ」

「仰る意味が良く分かりません」

「ヤマトを犠牲にしても、人類は生き延びる。それが人類再興計画の大目標なのだ」

「それはどういう意味ですか」

「全ては計画されていたのだ。そして計画の最終段階がこれより発動する」

「最終段階……」

「それは人類を復興させる最初のステップでもあるのだ」

「しかし、まだ旅は半分です。イスカンダルから地球に戻る帰路の旅路も必要です」

「そうではない」

「まさか、地球は見捨ててイスカンダルで人類は生き延びよと」

「違う。あくまで地球で人類は繁栄すべきなのだ」

「では説明を」

「最終段階での説明はスターシャさんが行う予定だ。わしではない」

「しかし、どうすればスターシャさんと会えるのか」

「古代」

呼びかけられて古代は艦長を改めて見た。

「はい」

「これより最後の命令を与える」

「最後……といたしますと?」

「このままコスモゼロで森君とイスカandalに降下せよ。行き先の座標はこの封書に入っている」

沖田はわざわざ古代の席のところまで歩いてきて、封印された封書を手渡した。

第4章・冥界編

「これは一体……」

「イスカandalでの行き先が記されている。高度1万フィート以下になってから開封するように。以上が最後の命令だ。後のことは全てスターシャさんの指示に従うように」

「意味が分かりません。ヤマトはこれからガミラスとの決戦のためにガミラス星に向かうのではありませんか?」

「我々はガミラスに向かう」

「では自分も。自分もヤマトの乗組員です。戦闘班長を拝命した以上、ガミラスとの戦闘からは逃げられません」

「よく聞け古代」

「はあ」

「我々の使命は地球を救うことだ。違うか?」

「それはそうではありますが」

「ならば行け。それが人類再興計画の最後の手順なのだ。人類再興計画に含まれる我々の役割は、ここまでののだ。この先には、君たち2人の行動しか計画に存在しない」

「意味が分かりません」

「もしや、あの話を気にしているのか？ 藤堂はのっぺらぼうだったという話はただの冗談だ。藤堂は立派な男だ。パネルの光線に照り返しで顔が無いように見えただけの話だ。安心して藤堂の命令に従いたまえ」

「では妖怪は……」

「そんなものはいない！」

「ならば自分の使命は……」

「古代、君と森君の二人がスターシャさんに会う。これが人類再興計画の最後の手順なのだ。後のことはスターシャさんが承知している。君と森君はスターシャさんに会うために乗組員に選抜されたのだ」

「やはり分かりません」 古代は目眩がして視界がぼけた。

「なあ古代」 その時、操縦主席の島が言った。「落ち着けよ」

いや、おかしい。島がここにいるはずがない。島はスパイとして処刑されたはずだ。現在は太田が島の代行で操縦していなければおかしい。

よく見ると島はおらず太田だった。

太田は言った。「古代さん。行ってください。なぜ古代さんと雪さんだけが今イスカandalに行かねばならないのか。その理由はスターシャさんに会えば分かるようになっていました。それが人類再興計画です。ですから、今は疑問があっても行ってください」

「なぜ太田がそのことを知っている」

「自分だけが知っているわけではありません」と太田は振り返ってニッと笑った。「知らされていないのは古代さんと雪さんだけです」

「どうして……」

「計画のキーパーソンの当事者本人だからですよ」

「そうです」と南部も自分の席から立ち上がり、古代が立ち上がった結果空席になっていた古代の席にゆっくりと座った。「後は任せてください。このヤマトを建造した南部重工の御曹司として、古代さんに負けない戦いをしてみせます」

「まさか、相原君も」古代は通信士席を見た。

「ええ。承知していました」相原は微笑んだ。「そのおかげでプレッシャーが大きくて、一時はおかしくなって古代さんに迷惑を掛けましたが」
だがそこでハッと気付いた。

太田も南部も相原も、島に毒殺されたはずでは。

よく見ると、太田の席も相原の席も、誰もおらず空席だった。南部が座ったはずの古代の席も空席だった。

だがもう一度よく見ると太田の席も相原の席も南部の席もそもそも無かった。

空席になったままの古代の席があるだけだった。

最初から誰もいなかったかのようだ。

だが、今はもう構ってられない。

沖田はまだいる。森雪もまだいる。ヤマトなのかヤマトではないのかも定かではないが、宇宙船もある。たぶん格納庫にコスモゼロはあるのだろう。これらが幻となって消える前に古代は行かねばならぬ。

「古代君!」雪がレーダー手の席から立ち上がって叫んだ。「行きましよう!」

雪は消えなかった。

雪は生きている本物だ。

「行くぞ雪」古代は叫んだ。

「は、はい」

古代は雪を引き連れて艦尾の格納庫に急いだ。

コスモゼロはオプションの後席を取り付けられ、待機していた。

古代と雪はヘルメットをかぶり、それに乗りこんだ。

エレベーターが上昇し、コスモゼロをヤマト艦尾のカタパルトに運んだ。

艦艇の艦載機発進口からは、ブラックタイガー隊が発艦していた。既にパイロットは全員死亡しているのに誰が操縦しているのか分からなかった。しかし、既にそれに構ってはいらなかった。

「誰が加藤の代わりに飛んでいるのか分からないが、ヤマトを頼んだぞ。誰かさん」

そして古代は振り返ると雪が準備完了しているのを確認した。

「発進するぞ。いいかい？」

「ええ、いつでもどうぞ」

古代は正面を見るとスロットルを全開した。

「コスモゼロ発進」

カタパルトが機体を押し出した。

「考えたくは無いが、これが見納めということもある。大気圏突入用にキャノピーの耐熱シールを展開するから、ヤマトを肉眼で見られるのは今だけだ」古代は振り返った。「後悔の無いように、しっかりと見ておくんだ」

「はい」と雪は振り返った。

そして古代も見た。

だが目に入ったのはヤマトでは無かった。赤いずんぐりした船体が見えた。

「地球の 225 号艦、英雄じゃないか。ヤマトではない」

「何を言ってるの古代君。あれはヤマトよ」

古代は慌てて計器板のモニタを見た。

そこに映っているのはヤマトだった。

古代はもう一度よくキャノピーの外を見た。

やはりヤマトだった。

「寝ぼけないでよね」と雪が言った。

「済まない済まない。ではキャノピーのシールを展開するよ」
コスモゼロの透明なコクピットを銀色の膜が覆い尽くして視界がゼロになった。

しかし、計器飛行は十分に訓練を積んでいる。不安は無い。

だが、不安は別の箇所にあった。

大気圏突入は、コスモゼロのような小型機には激務だった。

そして、機体には既にガタが来ていた。交換するパーツも尽きて、代用パーツで間に合わせた部分もある。

外部温度が上がると主電源系がダウンし、補助電源系に切り替わった。
しかし、補助電源系のバッテリー持続時間は短い。

雪がテキパキと不要の機材の電源を切り、バッテリーを延命させてくれた。

「一緒に来たのが君で良かった」と古代はその点だけはホッとした。

結果として、外部の状況はほとんど分からなくなっていた。

ただ対地高度計だけが来たべき不時着の衝撃の時期を教えてくれるだけだった。

「くそ、どんな場所に降りるんだ?」

「センサー系はほとんどオフにしたから分からないわ」

「イスカandalは海の多い惑星だったよな」

「資料ではそうだったわ」

「なら不時着水の可能性が高いのかな?」

「レーザー高度計は地面高さの変動は探知していないから、海ではないと思うわ」

「じゃあ地面の上に降りられるのか?」

「海が7割ってことは、地面が3割もあるはずよ。あり得るわ」

「分かった。もう高度が無い。雪、椅子にしっかり掴まれ!」

古代は操縦桿を引き、機首を上げるとコスモゼロの機体を不時着させた。
機体に大きな衝撃があり、キャノピーのシールが剥がれて、一部外が見

えるようになった。しかし、古代にも雪にもそれを見ている余裕は無かった。

機体が静止するとすぐに古代は機体をチェックした。機体は大破しており、古代は強引にキャノピーを開いた。

「もし燃料が漏れていると引火して爆発するぞ。すぐ機体を離れるんだ」

古代は雪の手を引いて、機体から離れた。

ある程度距離を取った時点でコスモゼロのエンジンが爆発した。それほど規模は大きくないのが救いだったが、修理しての再離陸は絶望的だった。

雪はあたりを見回して言った。

「赤い大地。なんだか、海が干上がった地球みたい」

「だが放射能レベルは低い」と古代は腰のセンサーで調べてから言った。

「地球とは思えない」

「でも、これがイスカandalなの?」

「イスカandalだっているいろいろな土地があるさ。地球だって、天国みたいな土地もあれば地獄みたいな土地もある」

「でも、ここはどこかしら。命令の座標からは遠いのかしら」

「命令書を確認しよう」古代は胸の封書を取り出した。

「私はあの丘に上がって周囲を見てみるわ」

雪は1人で歩き出した。

古代は命令書を開いた。

それには、こう書かれていた。

北緯 31 度 11 分 52.80 秒 東経 29 度 55 分 9.12 秒に向かえ。

それだけだった。

古代は頭を抱えた。

そもそも現在の居場所の座標も分からないのに、緯度経度だけではどこに行けば良いか分からない。

そもそも、緯度はまだいい。要するに回転軸からの角度のことで、軸さ

え分かれば機械的に判断できる。しかし、経度はどうだ。恣意的に選択した基準点が分からなければ解釈ができないではないか。地球ではグリニッジが基準だった。ならばイスカンダルではどこが基準なんだ？ どこが基準であろうと、それを知らない地球人には解釈できないではないか。

その時、雪の音が聞こえた。

「古代君、あれはなに!？」

古代は慌てて飛び出した。

解釈できない命令書よりも、まずは雪だった。

古代が丘に上がると雪が丘の向こうを指さしていた。

古代はその方向を見た。

赤い大地に眠る大昔の戦艦の残骸。

戦艦大和だ。

古代は慌ててもう1回よく見た。

最近は何視が多いからだ。

もう1回見れば本当の姿に戻るはずだ。

だが、それは赤さびた戦艦大和だった。

そして、これは宇宙戦艦ヤマトが出発する前。不時着して島と一緒に見た大和の光景そのものだった。古代は全く同じ光景をもう1回見ているのだった。違うのは隣にいるのが島ではなく雪だということだ。

「あれは……なに?」

「落ち着け、雪」と古代は言った。「あれはどう見ても長い時間が経過した残骸だ。たった今敗北した宇宙戦艦ではあり得ない。宇宙戦艦ヤマトは敗北してここに墜落したわけではない?」

「待ってよ。誰も宇宙戦艦何とかなんて言っていないでしょう?」

「そ、そうか」

「それよりも、私が知っているあれによく似てるのよ。ずっと崩壊が激しいけど」

「そうか。君も大和の残骸を見ていたのか。ベース・カノヤから救助ヘリで来てくれたものな」

「ベース・カノヤ付近では有名なランドマークだったわよ。大和遺跡は」

「ランドマーク？ 有名？」

「そうよ。古代君は知らなかったの？ 知らないのに、なぜあんな場所にいたわけ？」

「いや、探索艇で不時着して」

「それは聞いたわ。空からの大和観光じゃなかったの？」

「い、いや……」

「でも、イスカandalに大和遺跡があるはずがないわ」と雪は言った。

「調べてみましょう」

雪は丘を駆け下りた。

古代は考えた。

本当の大和なら残骸を振り払って宇宙戦艦ヤマトとして飛びたつはずだ。

その時に全ての赤さびた部分は粉々になったはずだ。

こうして形が残っている筈が無い。

古代は雪を追って丘を駆け下りた。

遠くから見る限り、島と見た大和と同じに見えたが、近づくとそうではないことが分かった。状態がもっと悪いのだ。長期間放置され続けて来たに違いない。

入り口はすぐ分かった。船体の壊れた部分から容易に内部に入ることができた。

「これが本当に大和遺跡なら、内部には大和博物館があるはずよ」と雪は言った。

「沈んだ戦艦の中に博物館？」

「違うわ。本物の残骸はバラバラに沈んでいるの。大和遺跡は、原形を

とどめたまま沈んだと仮定して作られた残骸のレプリカ。内部は大和博物館なの」

内部には、戦艦の残骸に不似合いなより新しい施設が作られていた。

しかし、博物館ではなかった。

何かの事務所になっていたようだ。

古代は混乱した。

博物館が無かったからではない。

宇宙戦艦として改造されていなかったからだ。

確かに自分達は大和を改造した宇宙戦艦でイスカンダルまで航海した。

「ここを何に使っていたのか用途が分からないわ」と雪が言った。「書類はボロボロでもう読めないし、壁の文字も消えて読めない。そもそもイスカンダルの文字を読めるとは限らないけれど」

「ここは宇宙戦艦ではないのか？」

「違うわ。どこにも武器やエンジンは無いでしょ。宇宙艇の一機だって置いていないわよ」

そう言われると確かにそうだった。

しかし、その判断は間違っていた。

艦尾の方向を探検すると、格納庫に古びた埃まみれのコスモゼロと、それとは異なる姿の宇宙機が数機あったからだ。

「コスモゼロだ」古代は駆け寄った。「なぜだか分からないが助かる。これが飛べれば命令の場所に飛べる。まあ場所が分かればの話だが」

「どうしてイスカンダルにコスモゼロがあるの？」

「真田さんから聞いたことがある。コスモゼロはイスカンダルの技術が入っているそう。イスカンダルに似た機体があるのかも知れない」

「いえ。ちょっと待って」と雪は言った。「今思い出したわ。大和博物館も客足が落ちて、売却の予定があるって。コスモ・エアロスペース社が名乗りを上げていたはずよ」

「おいおい。どういう話だよ」

「だからね」と雪は説明した。「大和遺跡は中深度海底の開発ブームの時に、海底アミューズメント施設として作られたものなのよ。でも海が無くなって露出するし、人口は激減するし、地上は放射能も怖いし、客足が大幅にダウンしたのよ」

「待て待て。それは地球の話だろう。イスカンドルの話ではないだろう」

「ええそうよ」

「ならどうして」

「コスモ・エアロスペース社がおそらく最後の量産モデルになるだろうと発売したのがコスモゼロだからよ。コスモ社の高機動スポーツ機ゼロ型。商品名コスモゼロ。人類再興計画にも採用された最後の名機って、盛んに宣伝してたから知っているわ」

「でもそれだけで」

「カノヤで救隊員だったから知っているの。こっちは、同じコスモ・エアロスペース社の機体で、タイプナインナイン。この安定翼の丸みの特徴よ。よく覚えているわ。で、こっちはタイプナインセブン。コクピットが三座になっている重量物輸送機よ。で、人類最後の亜光速船と言われた 225 号船もコスモ・エアロスペース社製よ」

「南部重工製じゃないのか？」

「亜光速船を作っているそんな会社無いわよ」

「まさか」

「みんな英雄号と呼んでいたけど、225 号船の本来のコスモ社での商品名はコスモ・クリッパーの D 型よ」

「しかし、AU 型だって」

「それは政府の登録記号よ。コスモ社の内部呼称はコスモ・クリッパーよ。全部で 30 隻以上建造されたベストセラーの亜光速船。何度か改修されているからサブタイプごとに A から順番にアルファベットが降ってあるわ

け。でも、性能は不十分だったから C 型を更に改良したのがコスモ・クリッパーD よ」

「待て待て。雪、君が知っているこの航海のミッションは何だ?」

「人類を再興するためにイスカンダルに行き、助けを得ることよ。船内時間で 1 年以内に往復できねば人類の滅亡は確定するって」

「放射能除去装置コスモ・クリーナーD の受け取りではないのか?」

「コスモ・クリーナーD というのは、聞いたことないわ。私を知っているのはコスモ・クリッパーD だけ」

古代は考え込んだ。

ならば沖田が演説で説明した、コスモ・クリーナーD とは何だったのか。退屈して眠り込んだ古代の耳に入ったコスモ・クリッパーD という言葉が変形して古代に頭に入っただけかもしれない。

とすれば、古代が信じた放射能除去装置も古代の夢がクリーナーの語感から脳内で作り出した言葉に過ぎないかもしれない。

「では、ヤマトの英語正式名称はスペース・バトルシップ・ヤマトではないのだな?」 古代はいった。

「英語正式表記は」と森雪は端末操作した。「スペース・クルーザー・ヤマトとなっているわ。ヤマトの部分は沖田さんの追加ね」

「クルーザー? それって巡洋艦じゃないか。戦艦じゃない」

「スペース・クルーザーというのは、深宇宙に進出する最後の亜高速宇宙船の調達計画に付けられたコードネームのようね。スペース・クルーザー計画に対してコスモ社が入札したプランがコスモ・クリッパーらしいわ。もともと戦闘艦ではないので、クルーザーの意味はきっと巡洋艦ではなく、ただ単にクルーズするシップよ」

「つまり、艦内のプレートにスペース・クルーザーと掘ってあったのは……」

「計画の呼称をそのまま掘ったのだと思うわ」

「つまり計画とは誰も行ったことが無い宇宙に進出することだけで、戦いは一切含まれていないと?」

「そうよ」

古代は黙りこんだ。戦闘が想定されていないなら、戦闘班長だった自分の立場はいったい何だ。

「でも、分からないわ」と雪が言った。「私たちはイスカンダルに来た。それなのに、ここは地球としか思えない」

「航路計算は君がやったのではないのか?」

「やってないわ。あれは島君の管轄」

「つまり、島はコスモ・クリッパーDが……いや、ヤマトが地球に戻ることを知っていた?」

「そういうことになるわね」

「まさか。ここは地球だということのか?」

「赤い大地に大和遺跡がある以上、そう考える方が自然よ」

「我々はイスカンダルを目指して、地球に来てしまったということのか? それ人類再興計画だとでも言うのか?」

「分からないわ」

「証拠が足りない。たった一箇所だけならたまたま偶然似ているだけということもあり得る」

「ベース・カノヤに行ってみましょう」

「しかし、徒歩で気軽に行ける距離ではないぞ」

「古代君。1つだけ朗報よ」

「なんだい?」

「ここがコスモ・エアロスペース社の支部だったのなら、きっと修理用の補修部品のストックが残っているはずよ」

「そうか!」

「たとえ違っていても、これだけ複数の機体を置いてある施設なら予備

パーツがあっても不思議では無いわ」

「そうだな。倉庫を探してみよう」

結局、倉庫にはコスモゼロ 3 機を新規に作れるぐらいのパーツがあったが、ほとんどはもうダメだった。

しかし、辛うじて使える部品を集めると、コスモゼロ 1 機だけは何とか飛行可能になった。高機動や大気圏脱出はとても無理だが、ベース・カノヤまで大気圏内を経済速度で巡航させる程度なら何とかあった。

古代と雪は、不時着したコスモゼロから出るときに持ち出したけなしの非常食を食べて飢えをしのぐと、修復したコスモゼロで飛び立った。

雪が下を見ながら言った。「救助ヘリから見た光景と同じだわ」

「訓練飛行で見た光景とも同じだ」と古代は答えた。

コスモゼロは、ベース・カノヤ上空に到着した。

ベース・カノヤは航空基地の遺跡だった。

滑走路らしいもの。

管制塔らしいもの。

格納庫らしいもの。

それらはあったが、よく見るとどれも崩壊の過程にあって、もう使えそうになかった。

古代はコスモゼロの高機動ノズルを騙し騙し使って、コスモゼロを垂直着陸させた。盛大に地面から塵が舞い上がった。

森雪はコスモゼロから降りると言った。「いったい何年たったのか分からないぐらい壊れているけれど、ここはベース・カノヤに間違いないわ」

「確かによく似ているが」

「確認してみましよう」

雪は走り出した。

「確認といっても、方法はあるのかい？」

「誘導路の脇にタイムカプセルを埋めたのよ」

使えそうな棒と板を拾いつつ森雪は走った。

そして、誘導路が交わる部分の脇を森雪は掘った。

古代も手伝った。

ボロボロの塊が出てきた。

「あったわ。タイムカプセルよ」雪は言った。「イスカンダルに出発する前にチーム・カノヤの同僚とみんなで埋めたの。私が帰還したら掘り出すという約束で」

しかし、容器の中身は全て風化してボロボロだった。

文字は読めず、何かの記念品は形をとどめていなかった。

「これだけでは証拠としては弱いな」と古代は言った。「地球上で原形をとどめていそうな遺跡を巡ってみよう」

「でも、鉄は錆びやすいわ。遺跡があっても形が無くなっている可能性が高いわ」

「大和遺跡は?」

「あれはセラミック製の模造品。鉄製ではないわ」

「なら……」

「石ね。石で作られ巨大な遺跡」

「ピラミッドだ。エジプトに飛んでみよう」

「分かった」

「離陸の準備に取りかかろう。しかし、大和遺跡に戻って本格的な修理をした方がいい。道具もパーツもあそこの方がまだ揃っている」

「その前に、食料を確保しましょう」雪は言った。「ここがベース・カノヤなら、あれの備蓄があるはずよ」

「なんだい?」

「百万年でも保存できると豪語する、不味い非常食よ」

確かにそれは倉庫にまだあった。

しかし、味はほとんど無かった。

水は僅かに漏れ出てくる地下水を飲んで、水筒にも詰めた。

それから古代はコスモゼロの通信機でヤマトとの交信を試みたができなかった。

「ヤマトの交信は無理そう？」

「原因は分からない。出力不足なのか、現在戦闘中で手が離せないのか、それとも沈んでしまったのか……」

「戦闘中？ 誰と？ まさかガミラスと？」 雪が屈託無く笑った。

「えっ？」 古代はその雪の態度に驚いた。

雪までガミラスの話をごんごんに軽く笑うとは。

まるで実在していないかのように。

「それより怖いわ、古代君」と雪は言った。「抱いて、古代君」

「どうしたんだよ、雪」

「あれが地平線から上がってきて見えたのよ」

「あれ？」

雪は空を指さした。

「イスカンダルは二重惑星だと聴かされていたわ。小形惑星ガミラスと相互に互いをまわっていると。あれがイスカンダルよりも小さな小形惑星ガミラスということになるわ」

「事前に分かっていたことじゃないか。今更怖いのか？」

「違うわ、私が怖いのはあれが地球の月にしか見えないこと。地球の衛星の月にしかね」

「えっ？」

古代は改めて空を見た。

確かに白く輝く小形惑星ガミラスは月に見えた。

「やはりここはベース・カノヤで、この星は地球なのか？」

「でもあっちを見て」と雪は指さした。

もやもやした光を乱反射する存在が遠い空に浮かんでいた。

「なんだあれは」古代は目を細めた。

「陽が落ちた後でベース・カノヤから救助に出動したことは何回もあるわ。でも、空にあんなものが見えたことは一度もなかったわ」

「そうだ。俺が見た夜空にも、あんなものはなかった」

「ここは本当に地球なの？」

「分からない」

「放射能レベルだって、地球というには低すぎるわ」

「それも分からないよ」

「どうしたらいいの？」

「調べるしかない」と古代は空から雪の顔に視線を戻して言った。「もしここが地球を偽装した惑星ならどこかにヒントがあるはずだ」

「どんなヒント？」

「たとえば、ロダンの考える人の向きが左右逆だとか」

「右の手で考え込んでいるか、左の手で考え込んでいるか、ちゃんと覚えている？」

「い、いや……」

古代は頭をかいた。

「ならダメね」

「でも確かに何かのヒントがあるかもしれないわ」雪はうなずいた。「調べる価値はあるわ。ともかくエジプトまで飛んでみましょう」

翌日、古代と雪は非常食と水を持てるだけ持って、コスモゼロで大和遺跡に戻った。

大和遺跡は死んだように眠り続けていた。

古代はもう一度パーツを吟味してコスモゼロの修理をやり直した。目と鼻の先のカノヤならともかく、今度は地球を半周もするのだ。

森雪は残った非常食を調理して、何とか食べられる料理に仕上げてください

た。

その夜、古代が作業に疲れて眠りこむと、真夜中に爆発が起きた。

古代は飛び起きた。となりで寝ている森雪は疲れてぐっすり眠っていた。

通路に出ると、大和遺跡の外壁が爆破され、先端が尖ったカプセルが船体に食い込んでいた。

それが開くと、青い肌の兵士が出てきた。

「ガミラス! どういうことだ!」

兵士の後から悠々と青い肌の男が出てきた。服装も態度も違う。

「おまえは誰だ」

「艦長はどこにいる。ガミラス本星を滅ぼされた怨み、ここで晴らさせてらう」

「そうか。ヤマトはガミラスに勝ったのか」

「そうだ。そして私は執念深い男だ」

「そういうおまえは誰だ」

「人に名を尋ねるのなら自分から名乗ってはどうかね。坊や」

「自分は艦長代理の古代進だ」

「ほう、おまえが。ならば名乗ろう。私がガミラスの総統、デスラーだ」

「デスラー……。そうかおまえが」

「そうだ」

「ならば1つ残念なお知らせがある」

「なんだね?」

「ここは宇宙戦艦ヤマトではなく、大和遺跡だ」

「なんだと?」

「ヤマトと別行動を取った自分ともう1人しかここにはいない。沖田艦長はここにはいない。ヤマトにいる」

「なるほど」とデスラーは考え込んだ。

古代はホルスターのコスモガンに手を掛けた。

「どうした、デスラー」と古代は言った。「戦わないのか？」

「ここがヤマトではないなら、私はおまえと酒を飲まねばならぬ。戦闘などはしない」

「なぜだ」

「その理由はおまえがいちばんよく知っているはずだ」

「自分が？」

デスラーの部下達はそのまま武器を置いて、椅子とテーブルの準備を始めた。

廃墟同然の室内を掃除し、綺麗な椅子を2つとテーブルを用意するとテーブルの上に酒を注いだ。

「古代、飲もう」とデスラーは悠々と座った。

「なぜだ」

「その理由は、おまえと私は、定めが少し違ったらならば、互いに酒を飲んでいたはずの関係だからだ」

「意味が分からない。誰がそんな定めを決めた」

「著作者だよ」

「著作者？ 誰のことだ？」

「アステロイド・スペースという物語を考えた20世紀人だ」

「どういうことだ」

「君は、残された人類の健全な部分を合成して作られた合成人間だ。その中には、アステロイド・スペースという作品にかぶれた者がいた。その想いが強烈なので周りの人格も巻き込まれ、君はアステロイド・スペースという白昼夢を見ていたのだ」

「ならばデスラー、おまえは俺の白昼夢の登場人物に過ぎないというわけか？」

「そうではない」とデスラーは否定した。「私は君の恐怖が人の姿になっ

た存在であり、君自身なのだ。従って、君が見た真実を私は見ている。君の人格が否定しようとしている事実を告げる者としてここに存在している」

「真実だと？」

「そうだ」

デスラーは酒を一口飲んで続けた。

「君も飲みたまえ、古代」とデスラーは言った。「その方が話が円滑に進む。たとえ、実在しない夢の中の酒であってもだ」

古代は酒を飲んだ。

赤ワインだった。

「さて、君が乗っていた宇宙船は何だ」

「宇宙戦艦ヤマトだ」

「宇宙戦艦ヤマトとは何だ」

「人類最後の宇宙船だ」

「それは 225 号だ」

「なら宇宙戦艦ヤマトとは何だ」

「君がアステロイド・スペースの主演宇宙船である宇宙冒険船ヤマトから着想して君が考えたのが宇宙戦艦ヤマトだ。君が乗っていたのは 225 号であり、225 号を超えるもっと強大な宇宙船などは存在しない」

「嘘だ。みんなヤマトだと言っていた」

「そうだ。なぜなら、沖田が 225 号に対してこの船はヤマトと名づけると宣言したからだ。船長が宣言した以上、その船はヤマトと呼ばれる」

「しかし、なぜだ」

「沖田はおまえに甘かったからだ。おまえが白昼夢を見て、225 号をヤマトに見立ててしまった。だから沖田はヤマトと名づけたのだ」

「225 号艦って、火星から戻るときに乗った英雄号だろう？」

「君は火星で特別訓練を受けていたと思い込みたがっていたが、地球上の訓練基地に各惑星の名前を割り当てただけで、君が火星の赤い大地だと

思っていたものは、地球の赤い大地でしかない」

「だが、225号艦は冥王星からの帰路に立ち寄ってくれたというぞ」

「準惑星の名前は訓練基地ではなく実験場の名前に割り当てられていた。そこで最後の新造艦である225号艦は公試を行っていたのだよ」

「しかし冥王星海戦は。兄が死んだあの戦いは」

「そんな戦いは存在しない。君の兄も存在しない。そもそも敵であるガミラスも存在しない。亜光速船225号船が君の乗るヤマトだったのだ」

「だが矛盾するぞ。ヤマトが225号艦だとすると亜光速船ではワープできない。波動砲もない」

「君の乗っていた宇宙船は1回もワープをしていない。波動砲も存在しない。確かに砲塔は付いていたが1回も使ったことは無い。なぜだか分かるかね？」

「なぜだ」

「海賊対策で装備された砲塔は、海賊が出ない前人未踏の地では意味が無いからだ」

「だが、俺は戦闘班長を拝命した」

「絶対に仕事が発生しない閑職を指定されたのだ」

「なぜだ。ヤマトの食糧事情は厳しかった。閑職なら乗せない方が良かったではないか」

「その理由は私も知らない。知っているのは計画の関係者だけだろう。沖田とスターシャはおそらく確実に知っている」

「なるほど。俺の知りようが無いことはデスラーも知らないわけか」

「そうだ」

「ならばサーシャと森雪が似ている理由も」

「私は知らない。他人のそら似かも知れないし、何かの深い理由があるのかもしれない」

「そもそもサーシャの正体とは何者なのだ」

「亜光速船 3 号の乗組員が航行中に産んだ子供の育った姿だ」

「それは知っているのか？」

「そうだ。その情報を君は小耳に挟んだが、意識的には取り上げなかった。だから潜在意識は知っていたのだ」

「そもそも亜光速船 3 号とは何だ？」

「地球がもうダメだと分かった時、移住先を探すために多数の亜光速船が送り出された。その初期のモデルの 1 つだな」

「戻って来たということは、移住先は見つからなかったのか？」

「そういうことになる」

「それも俺の潜在意識が知っていた情報か？」

「そうだ。私は君のもう 1 つの人格でしかないのだ」

「ならば真田さんが到達しようとしていた真実とはいったい何だ。島はなぜ真田さんを殺したのだ」

「真田？ 誰のことだね？」

「島が殺した」

「いつ？」

「サンザーに到着する直前だ」

「それはおかしい。島はおまえが艦長代理に任命された直後に宇宙に飛び出して死んでいるのだ。死体も行方不明だ」

「なんだと？」

「死体も残っていない死人が存在しない人間を殺したというのかね？」

「ヤマトの乗組員は何人だった？」

「沖田、佐渡、島、森、古代。以上 5 名だ。アナライザーを数に入れるなら 6 名だ」

「嘘だ。太田は、南部は、相原はどうなったんだ。徳川機関長は。あの憎たらしい目つきの藪とかいう機関士もいただろう。航空隊の山本は。冥王星で死んだ根本と杉山は」

「全て君の白昼夢の中にしか存在しない。もともとアステロイド・スペースというドラマの登場人物だ」

「まさか」

「そもそも冥界から来たガミラスそのものが白昼夢なのだ。現実には人類が自ら核を撃ち合って地球を放射能汚染させた。各陣営は致命的な汚染が起きる寸前で止めるつもりだったのだがね。誰もが予想する以上の数の勢力が最後の核戦争に参加したのだ。核保有国は誰もが思うよりも増えていたのだ。結果的に放射能レベルが致命的な水準を超えてしまった」

「ベース・カノヤは……、確かに軍事的な航空基地だった。あれも対ガミラス戦のための基地ではないというのか?」

「そうだ。あれは最終戦争のために使用された航空基地だ」

「しかし核を撃ち合ったのなら消えて無くなったはずだ」

「日本列島に残った本格的な航空基地はベース・カノヤ1つきりだ。他の基地は確かにどれも蒸発したよ。ベース・カノヤが生き延びたのは、単に巡航ミサイルに入力された位置情報が間違っていたからに過ぎない」

「なぜ、カノヤだけ基地なのに惑星や準惑星の名前が付いていないのだ」

「200年以上昔から使用されてきた基地名なので、無味乾燥なコードネームで呼ばれることを誰もが望まなかっただけだ」

「では火星基地や、冥王星実験場は……」

「最終戦争後の新設だ。既存の基地や実験場はほとんど使い物にならなかったのね」

「ではガミラスの冥王星基地は」

「存在しない。遺棄された人類の基地に住み着いた死を約束された者達がいだけだ」

「冥王星基地の衛星に反射する超兵器は」

「存在しない」

「物質を食うガス生命体は」

「存在しない」

「機雷原は」

「存在しない」

「海峡は」

「存在しない」

「異次元空洞は」

「存在しない」

「ビーメラ星は」

「存在しない」

「バラン星は」

「存在しない」

「七色星団は」

「存在しない」

「ボルゾン星とボルゾン王は」

「存在しない」

「君は分裂したボルゾン王の心臓ではないのか？」

「違う、私は古代自身だ」

「ならばガミラス星は」

「モデルになった星なら存在する」

「それはいったい……」

「月だよ」

「なんだって？」

「この計画は、表面的にはイスカンダルが放射能汚染から地球を救ってくれるという話になっている。それがなければ、人類は滅びる。だが実際は健康な遺伝子を未来の地球に送り届ける計画だった。なぜそのような偽装を施したのか。たぶん、後ろめたかったからさ。大多数の人間を見殺しにして、限られた人間を未来に送り届ける計画だからな」

「では、バラン星で戻って来た島は」

「君が見た白昼夢だ」

「ヤマトの操縦は……」

「島が去った後はずっとアナライザーだった」

「ヤマトを離れる時にパイロットが残っていないはずのブラックタイガーが発艦していたのは……」

「白昼夢だ。そもそもブラックタイガーという戦闘機はヤマトに積まれていないし、パイロットも全て存在しない。存在しないパイロットに依存する存在しない戦闘機は、白昼夢の中でいくらかでも発進可能だ」

「では真田さんが語った冥界の話は……」

「全て事実ではない。ガミラスが冥界から生者を攻めたという事実はない。死体は墓から出てこないし、武装して生者を攻撃したりもしない。地球上の墓地が不足して月面に墓地を建設したのは事実だが、それだけのことだ」

「沖田さんも冥界の話をしてくれた」

「それはお前自身が言った言葉を参考に、沖田が話を合わせたからだ。沖田自身は実は何も言っていない」

「のっぺらんぼうの藤堂指令の話は……」

「怪談じみたおかしなことを口走る古代に合わせて、沖田が気を利かせて怪談を語ったのだ」

「ならば、艦長が語った死者が墓からでて生じた空洞のあるガミラス星とは……」

「それはフィクションだ。月の表面はクレーターで穴だらけという事実からの類推だろう」

「まさか……」

「話はこれぐらいかな」

「待て、ではこうして君と話をしている自分はいったい？」

「コスモゼロの修理に疲れて眠って夢を見ている夢の世界の自分だ」

「これは夢？」

「そうだ。夢だ」

「しかし、本当にここが地球だというのか？」

「疑問があるのなら確かめれば良い。残っていそうな施設をもっと探せ」

「つまり、砂浜に立っている自由の女神とか、鎌倉の大仏か？」

「どちらも残っていないことは知っているだろう。核戦争の時に標的になって溶けて無くなった」

「じゃあ、あの空に見えるもやもやは何だ」

「疑問があるのかね？」

「そうだ。あんなものは昔の地球には無かった。俺はどうしても、ここが地球の偽装かもしれないという疑問をぬぐい去れない」

「誰が偽装するのだね？」

「ガミラスが」

「ガミラスなど存在しない」

「君がそう言っているだけで、証明されていない。自分達が存在しないと云いくるめ、油断を誘う計略では無いとどうして言い切れる」

「なるほど。ならばスターシャに会いたまえ。スターシャこそが真実を知っている。計画は君がスターシャに会った時点で終了する」

「なぜそれで最後だと言い切れる」

「沖田は君に最後の命令だと言い切って座標を渡したからだ。当たり前だろう？」

「そ、それはそうだが」

そしてデスラーはグラスの残りの赤ワインを飲み干して立ち上がった。

「古代、スターシャに会え」とデスラーは言った。「それがおまえの最後の仕事だ」

「デスラー、おまえはどうするんだ」

「君が真実に目覚めた時点で私は死ぬ。私は古代自身なので、古代への攻撃は自分に跳ね返るからだ」

「また会えるのか?」

「無理だな。自覚してしまった以上、もはや自分で自分に会うことはできない相談だ」

「しかし」

「アステロイド・スペースの続編を白昼夢に見る者が現れない以上、私の出番は終わりだ」

「誰かがきっと」

「無理だな。地球上の全ての映画が塵となった。デジタルデータもほぼ壊滅だ。特に情報量の多い動画データは全滅だ。誰ももう見ることはできない。見るができない以上、白昼夢も見られない」

デスラーはそのまま立ち去っていった。

森雪に起こされて古代は目覚めた。

「古代君、大変よ。コスモゼロの機首が爆発したの」

古代は飛び起きた。

夢で見た爆発の正体はデスラーの攻撃ではなく、それらしい。

しかし、爆発と言ってもパーツが1つ破裂しているだけだった。

質の悪いパーツが、もともと壊れ掛かっていたのだ。

「ここで破裂してくれて良かった」と古代はコスモゼロに駆け寄った。

「飛行中に破裂されたら大事だった」

「大丈夫なの?」

「ああ、ここならまだ交換パーツはある」古代は微笑んだ。「これで自信を持ってエジプトまで飛べる」

西へ西へと飛ぶと眼下に見える水の無い海岸線はインド亜大陸としか言えない形をしていた。

しかし飛行中は単調で暇だった。

ヤマトへの連絡も取れない。

自然と古代は雪と話をして時間を潰すしかなかった。

「俺は白昼夢を見ていたらしい」と古代は言った。「本当はヤマトなど存在しない。夢の中でデスラーという名のもう一人の自分に言われたよ」

「古代君がヤマトだと思って見ていたものは何?」

「宇宙戦艦だ。乗員は 114 名。メインエンジンは未知の原理で動作する波動エンジンだ。異星人からの技術供与だ。ヤマトはワープ航法可能で、光速を突破できる。艦首には波動砲という大きな武器が装備されている」

「ちょっと待って。それなら見覚えがあるわ」と雪は端末を操作した。

「ほらこれでしょ?」

古代は後席から手渡された端末の画面を見た。

何かのパンフレットの画像だった。

古代が白で見ていた通りの宇宙戦艦がそこにあった。

そして、こう書かれていた。

『M-21991 式第 1 種宇宙戦闘艦、コスモシップ・ヤマト。地球を放射能汚染から救うために 114 名の宇宙戦士を乗せて今旅立つ』

「なんだこれは」

「コスモ社の人員募集ポスター。高卒工員がメインだから、大多数は 18 歳よ。その 18 歳の少年少女を血気盛んな宇宙戦士と呼んで募集を掛けていたのよ」

「ちょっと待て。だとすると、コスモシップ・ヤマトって何だ?」

「コスモ・エアロスペース社の技士がこういうのがあったらいいな、と思って引いた架空の宇宙船の図面よ。それが上司の目に止まって宣伝に使われたそうよ」

「実在しないのか?」

「そうよ。そもそも地球は戦争で傷ついたのに、戦闘艦で地球を救える

わけがないでしょう?」

古代は考えた。うろ覚えだが、確かにそのポスターには見覚えがあった。

どうやら、太古のアニメと、コスモシップ・ヤマトのポスターが合わさって、宇宙戦艦ヤマトという白昼夢が成立しているようだ。乗組員が 114 名でほとんどが 18 歳という状況は、このポスターが由来だったようだ。

「思い出したわ」と雪は言った。「大和遺跡の取得にコスモ社が熱心だったのは、コスモシップ・ヤマトが話題になって企業の看板になったからよ」

「ちょっと待て、雪。あれは紅海じゃないか?」

「そうね。海が干上がって明確ではないけれど、起伏を見るとそんな感じね」

「ならばこの先に母なるナイルがあるはずだ」

「ここが本当に地球ならね」

しかし、水の無い母なるナイルの流れの痕跡が見えてきた。

「あれに沿って北上して」と雪が地図を見ながら言った。

ナイルを頼りに古代は進路を北に取った。

「あれはピラミッドよ!」

雪が指さした。

崩壊しつつあったが、確かにピラミッドだった。

「古代君、やはりここは地球だったのよ」

「だが、信じ切れない。半年近く宇宙の航海を続けたんだぞ。それに空に浮かんでいるもやもやの塊は何だ?」

「そうね。気持ちは分かるわ」

「でも、1 つだけアイデアが浮かんだ。もしここが地球なら経度も解釈できる」

「えっ?」

「コスモゼロのナビをずっと未知の惑星モードにしていたが、地球モードに切り替えてみるよ」

古代はコスモゼロに戻って内蔵ナビを操作した。地球モードに切り替えると現在位置を表示した。測位衛星からの電波は1つもキャッチできなかったが、測位衛星に依存しない測位システムが大まかな自分の居場所を指し示した。エジプトだった。ピラミッドがある場所としては間違っていない。

「ならこの座標はどうだ」

古代は命令書の座標を入力した。

座標値の場所を地図で知るのに、測位衛星は関係無かった。

高精度ですぐに場所が分かった。

アレクサンドリアだった。

「コスモゼロで飛ばば目と鼻の先だ」古代は雪を振り返った。

「行きましょう、古代君。だぶん正解よ」

どういう意味だ？

「これを見て」

と雪が端末を差し出した。

そこにはこう書かれていた。

『アレクサンドリアはアレクサンドロス（イスカンダル）の町を意味する名で呼ばれており、文語のフスハーではアル＝イスカンダリーヤという』

「イスカンダル!」と古代は叫んだ。

「たぶん、これが私たちが目指した真のイスカンダルよ」と雪は言った。

そこに都市は無かった。

破壊の限りを尽くされた地上には、音も無く、動くものもなかった。

しかし、たった1つだけ残存している施設があった。

「雪、あれはなんだ？」古代は質問した。

「アレクサンドリアの図書館ね。建物の形状からして、あれは七代目よ」

「アレクサンドリアの図書館か。聞いたことがあるぞ」

「有名よ。世界史的にも特別な存在。だから何回も再建されるの」
古代は、図書館の入り口にコスモゼロを着陸させた。
建物は荒廃していた。

「古代君、ここにスターシャさんがいるのかしら」と雪が言った。

「分からない。ここでスターシャさんと会えるという情報しかもらっていない」

「でも、たとえスターシャさんが生きていても、ここに住んでいるとは思えないわ」

「確かに。ここは人が住める環境ではない」

本の大多数はボロボロになっていて既に読めなかった。

しかし、電子閲覧コーナーはマシだった。

可動部分が無い端末には、まだ動作するものがあった。

古代はコスモゼロのバッテリーを接続して動作させてみた。

昆虫図鑑を呼び出して眺めてみると、時間を忘れた。

それはすっかり忘れていた素晴らしい時間だった。

問題があるとすれば、ほとんどの虫には絶滅済みのマークが入っていたことだけだ。

気がつくとき森雪が食事を持ってきていた。

非常食はあまりに味気ないので、調理したらしい。

「命令はここに来るまでよね」森雪が言った。

「そうだ」古代は答えた。「座標は合っているはずだ」

「でも誰も来ないわ。人が住んでいる雰囲気でも無いし」

「そうだな」

「もしかして、スターシャさんも既に死んでいるとか」

「常識的に考えて、誰かが生きている可能性はほとんど無い」

「じゃあ、機械？ スターシャさんはロボットなの？」

「機械もほとんどがダメだろう。修理しなければ動作しないものばかり

だ」

「なら、幽霊でも来るっていうの?」

「それは無いだろう」

「でも、古代君は冥界がどうか言っていたし」

「それはもうあり得ない。ガミラスは滅んだのだ」

「滅んだ?」

「そうだ。ガミラスは俺の心の中にあつた。冥界も冥界から来た敵も彼らと戦う戦士達も。しかし、もう消えた。俺の心の中から」

「そう。ならばもう何かが起こるまで待つしか無いわ」森雪は言った。「私たちはここに来ることだけを命令された。ここで何かが起こるはず。今ではないとしても」

「そうだな。それまで昆虫図鑑をまた見て過ごすか」

古代は端末の電源を入れ直した。

「私も適当に本を探してみるわ」と雪は古代から離れた。「どうしても気になる本があるの」

「何を探しているんだい?」

「タイトルにマイウェイという言葉が付いている本よ。でも正確には覚えていないの。それから、マイスターという言葉が付いている本よ。あとは、水星の核戦争とかなんとか.....」

「漠然としているな」と古代は笑った。

森雪は怒って書庫に本を探しに行った。

古代は本を読み始めた。

しかし、陽が落ちていつの間にか眠り込んだ。

古代は名前を呼ばれて目覚めた。

崩壊した図書館の中だった。

廢墟を背景に藤堂が立っていた。

いや、図書館ではない。

いつの間にか場所は地球防衛軍司令部の廃墟だった。

「古代。よくぞ戻って来た。放射能除去装置はどうなったのだ?」

「藤堂指令!」古代は跳ね起きた。「なぜここに。ここにいるのはスターシャさんだったはずでは」

「何を言っておる。地球でヤマトの帰りを待っているのはイスカンダルのスターシャではなく、この私に決まっているではないか」

「しかし、今までに生きている人間には1人も会っていません。藤堂指令だけ生き残っているのは変です」

「みんな地下都市でひっそり暮らしているのだよ」

「しかし、本当に暗黒の地下環境に適応したのなら目が無いはずだ。バラン星の現住生物もそうだった」

「何を言っているのだ。さあ放射能除去装置を渡したまえ。そうか、生活班長を大切にかばいながらここまで来たということは、生活班長の身体に放射能除去装置が入っているのだな? さあ、その女を渡すのだ」

「イヤです」と古代はきっぱりと言った。「話がおかしすぎます」

「そうか。目が無いはずなのに目があるから信用できないのだな?」

藤堂は自分の目をはがした。ただのシールだった。

ところが、勢い余って一緒に口も剥がれた。

藤堂はのっぺらぼうになった。

「妖怪のっぺらぼう!」と古代は叫んだ。

「しまった」妖怪は慌てて自分の顔に手を触れた。

「どういうことか説明してもらおうか」

古代はコスモガンを構えた。

「我々妖怪は死者と手を組んだ。地球から生きた人間を一掃すれば死者は冥界で、妖怪は地上で永遠に繁栄を謳歌できるのだ」とかつて藤堂だった妖怪は言った。「おまえ達が死ねば全てが上手く行くのだ。なに、残酷な

ことなどしない。子供が生まれないように男女を引き離すだけで十分だ。それで生者は滅びる。悠久の時を生きた妖怪に、生者の生きる時間などゴミのようなものなのだ」

その特別の妖怪が背後から古代にしがみついた。

しかも重かった。

「子泣き爺か!」と古代は叫んだ。

「古代君!」と雪の叫び声で振り返ると、雪は雪女に拘束されていた。手足が凍らされて身動きが取れなくなっていた。

その時、空が明るくなった。

「古代さん、雪さん」と地上のものとは思えない美しい声が出た。

光を浴びて妖怪達が悲鳴を上げた。そして、のっぺらぼうも子泣き爺も雪女も解けていった。

やっと自由になった古代は立ち上がった。

やはり自由になった雪が隣に来た。

「古代君、あれ」

雪が上を指さした。

「ああ」古代は答えた。

光る美女が空から降りてきた。背中に昆虫の羽がある。

「私がイスカンダルのスターシャ」と美女は言った。

「おい、雪、見えているか?」古代は慌てて言った。

「ええ。私にも見えるわ」

「白昼夢じゃない」

「でも、この世のものとは思えないわ」

「生き延びた人類は、夜行性の昆虫人間として人体を改造したのです」とスターシャが説明した。

「まさか」

「そうです。あなたがたは、放射能が消えた新しい大地に送り込まれた

未来の人類の芽だった。でも、あなたがたが発した後で人類は生き延びる手段を見つけてしまったのです。人体を改造して生き延びるという手段を。そして寿命も格段に延びました」

「では、妖怪とはいったい?」

「妖怪とは、人体の改造の失敗作でしかありません。光の中では生きられないのです。いずれ滅びるべき存在です」

「ではなぜ雪を連れ去ろうとしたのですか?」

「彼らだけは子孫を作れないが、雪さんを誘拐して子供を産ませれば良いと考えたのでしょう。しかし、私はそれを許しません。計画の精神に反します。残った3体の妖怪もつきさつき処分できました。もう妖怪は残っていません」

「だが、我々の計画とあなた方の計画は違う」

「そうです。あなたがたの努力は、無駄。もはやあなた方は用済みだったのです」

「しかし、これまで誰にも同じような人間に会わなかった」

「改造に成功したのがイスカンダルのスターシャただ一人だからです」

「しかし、一人では子孫を残せない」

「その点も大丈夫です。損傷の激しい身体がカプセル内に冷凍睡眠状態で保存されていたのをやっと修復に成功しました」

「まさか」

「まだベッドに寝てばかりの生活ですが、徐々に起きて活動可能になっています」

「どこにいるんですか?」

「付いていらっしやい。彼の希望です。彼は古代進に会いたがっています」

場所はなぜか地球防衛軍司令部から図書館に戻っていた。

古代と雪は図書館の隣の塔に連れて行かれた。

そして、塔の先端、月明かりで照らされた部屋にその男はいた。

「進、進じゃないか」

「兄さん! 生きていたんだね!」

森雪が涙ぐんで手で涙をぬぐった。

そこにいたのは死んだと思っていた古代守だった。

「古代守さんはね」とスターシャが説明した。「冥王星海戦で捕虜になってガミラスつまり月に運ばれる途中、地球に墜落したのよ。でも、身体の損傷が酷くて冷凍保存されていたの」

「スターシャさんと古代守さんがイスカンダルの新しいアダムとイブになるのね」

森雪が言った。

「そういうことにはならないよ、雪」と古代進は言った。「これは僕らに課せられた最後の試練だ」

「それはどういうこと?」

「ここは僕の夢の中だ。夢が物語を紡いでいるだけだ」

「どうしてなのよ」

「冥王星海戦など実在しない。月もガミラス星だったことはない」

「それは私も夢の登場人物だってこと?」

「そうだ。雪。夢の登場人物の雪には興味が無い。死んでくれ。俺が欲しいのは生きている雪だけなんだ」

「でも古代君に私が殺せるの? 私を愛している古代君に」

「ニセ者だ」

「でも愛した女と同じ姿をしているわ」

「しかし……」

古代は考えた。自分には雪を殺せない。ニセ者だとしても。

だが、デスラーならきっと殺せる。

そう思った時に、もう1人の人物が部屋に入ってきた。

デスラーだった。

「では古代に代わって私が射殺しよう。私はスターシャを愛しているが、ニセ者に用はない」

そして、銃を2回発射して、雪のニセ者とスターシャのニセ者を射殺した。

既に古代の手の中に守はいなかった。

「ではこれで本当のさらばだ」

「デスラー。僕にはまだ迷いがある。行かないでくれ」

「悲観をするな。古代ならまだ戦う方法はいくらかもある」

「しかし、もう僕にはヤマトもない。波動砲もない」

「彗星の中心核を狙え」

「それはどういう意味なんだ?」

「真上と真下、脆いものよのう……」

「意味が分からない」

「君は意味を知っている。私は君なのだから」

「デスラー」

「私は君だ」

デスラーは塔の大窓を開き、そこに向かって後ろ向きに後退し、前を向いたままそこから飛び降りた。

「デスラーっ!」

古代は叫んだ。

そして自分の叫びで目覚めた。

「どうしたの?」と生きている雪が心配そうに古代の顔を覗き込んでいた。

「いや。夢を見ただけだ」

「どんな夢?」

「スターシャさんが昆虫人間になって出てきた夢」

「これが悪かったのね」

雪は昆虫人間物語という童話の記録メディアを指さした。

昆虫関係でまだ再生可能なメディアを探して見つけたものだった。

「雪、1つだけ思い付いた」

「なに？」

「ここには、おそらく生きている人間はいない。ということは、何かのメッセージが残されているだけだと思うのが妥当だ。なら、何を契機にそのメッセージは閲覧可能になるんだ？ おそらく僕ら以外には見せたくなかったメッセージだ」

「分からないわ」

「夢の中でデスラーは言っていた。彗星の中心核。そして、真上と真下。そして僕はその意味を知っているはずだと言った」

「夢の中の話でしょ？」

「しかし、夢は全て自分の中から出てきたものだ」

「知っていたはずだというの？」

「そうだ。情報が僕の中に用意されていたはずだ。そして雪の中にも」

「なぜそう言い切れるの？」

「君が探していた本のマイウェイ、マイスター、水星の核戦争は、それぞれ真上、真下、彗星の中心核というワードが変形して意識に出てきたものに違いない」

「まさか」

「では真上とは何か。真下とは何か。これも夢にヒントがあった。塔があるはずだ」

「塔？ そんなものは、見ていないわよ。昔あったとしても、もう崩壊して無くなっていると思うわ」

「ならば、地下に空いた大穴だ」

「地下書庫かしら。でも大穴という感じではないわ」

「どういうことだ。なぜ解釈できないんだ」

「崩壊しやすい塔や、埋まりやすい穴は関係無いと思うわ」

「なら何だ。まさかピラミッドの真上と真下か？ それとも北極が真上で南極が真下か？」

「図書館の最上階と地下室という意味でも無さそうね」

「それに彗星の中心核はもっと謎だ。太陽系に彗星がいくつあると思っている」

「単なるキーワードじゃないかしら」

「あっ。まさか」と古代は叫んだ。「真上、真下、彗星の中心核だと思ったのは間違いで本当はマイウェイ、マイスター、水星の核戦争かもしれない」

「どういうこと？」

「全部蔵書のタイトルだ。検索に使うキーワードだろう？」

「もう検索してみたわ。崩壊した書庫の場所を指定されただけで何も得られなかったけど」

「ただ検索しただけかい？」

「そうだけど……」

「世界共通図書館 ID を持っているか？」

「ええ」

「俺も持っている。そして、ここに来てからはその ID を使っていない」

「窓口には誰もいないし、ID で認証しても意味ないわ」

そこで、森雪はハッと表情を変えた。「もし、私たちへのメッセージが残されているなら、認証を必要とするはず」

「そういうことだ」

古代はまだ生きている端末から自分の ID を入れた。

しかし何も起こらなかった。

「雪もやってみて」

雪も別の端末から認証を行った。

やはり何も起こらなかった。

「この状態で蔵書検索をやってみて。キーワードは真上、真下、彗星の中心核」

「何も起きないわ」

「ならば、マイウェイ、マイスター、水星の核戦争だ」

「やってみたわ」

それでも、何も起こらなかった。

「何かが動くと思ったのに」

「何が足りないんだ」古代は頭を抱えた。「俺が知っているはずの情報だ」

「動かないわ、古代君」

「もう一度点検しよう」古代は言った。「何かを間違えたかも知れない」

「分かったわ」

「沖田艦長もそう島に命じた。そうしたら波動エンジンは動いたんだ」

「沖田艦長？ 沖田船長のこと？」

「白昼夢で見ていたもう1人の沖田さん。本物の艦長の方だ。いや、この場合は白昼夢だから偽物というべきかな？」

「夢の波動エンジンね」

「そうだ。もっとも、そんなものがあっても放射能を除去する装置をくれる便利な宇宙人など実在はしないから意味は無かった」

「夢の中でエンジンの点火に失敗した理由はなに？」

「連動スイッチがオフになっていたからだ」

その時、雪の目が輝いた。「それだわ。あなたの中に眠っていたはずの情報」

「え？」

「私が認証した端末と古代君が認証した端末は連動していないの。ネットワークで連動するスイッチが切ってあったわ」

「端末の連動？ どういうことなんだ？」

「ここは蔵書が多いでしょう？ だから多人数で連携して検索する機能があったのよ。でも、通常はネットワークの負荷を増大させるだけなのでその機能はオフになっていたの。たいていは1人で検索するでしょ」

「なぜそんなことを知っているのだ？」

「分からないわ」

「そうか。それも僕達の中に予め用意された情報の1つなんだ」

「じゃあ、連動スイッチを入れれば」

雪は端末を操作した。

「もう一度、マイウェイ、マイスター、水星の核戦争だ」

「入れてみたわ」

古代は何かが起こると期待してじっと待った。

しかし、何も起こらなかった。

「これも違うわね」と雪ががっかりした声で言った。「動かないじゃない」

「黙れ」と古代は囁くように言った。

地下から何か聞こえた。

何か振動する音だ。

長年止まっていた何かの仕掛けが苦勞しつつ動き出している感じだった。

「何、この音は」と雪が不安そうに古代の腕を掴んだ。

その時、図書館中央の台座が開いてスクリーンがせり上がってきた。

「どうやら当たりだ。波動エンジンは始動したようだ」

「考えてみれば当たり前ね。私たち2人が揃ってスターシャさんに会うことが求められていたのだから、連動ログインによる認証は必須よ。2人揃っていないと意味が無いのですもの」

そして、スクリーンに映像が投影された。

白衣を着た研究者の大人の女性だった。かなりの美人だった。

雪に似ていた。当然、不時着した宇宙船の死んだ女性にも似ていた。しかし、ずっと大人だった。

『これでもう始まっているの？ 始まっているのね。おほん。古代進くん、森雪さん。始めました。私は人類再興計画の責任者、スターシャ・クインシーです』

そこでスクリーンの映像の中の誰かが『イスカンダル女王』と叫んだ。

『こらこら。本番中だから茶々を入れないの』とスターシャはたしなめた。『イスカンダル女王っていいのはね。このアレクサンドリア図書館の館長で人類再興計画の責任者で、しかも女王のように高慢に振る舞うからって付けられたあだ名よ。気にしないで。ああ、ここはあとでカットしてね。カットできる編集技術者がもういないって？ しょうがないわね。ともかく妥協して話を続けましょう』

古代と雪は顔を見合わせた。

「古代君、どう思う？」

「このスターシャさんは本物に見える」

『あ、もしかしたら混乱させたかも知れないので説明を追加するけれど、あなたたちを送り出した司令官は藤堂さんだったわね。それなのに、また責任者を名乗る女が出てきてビックリしたと思うけど。人類再興計画は実際には2つのパートに分かれているの。D1とD2よ。D1はあなた方をここに連れてくるまでの計画。責任者は藤堂よ。そしてD2はあなた方がここに到着したあとの計画を担うの。私が責任者というわけ。分かっていただけかしら？ ちなみに、D1とD2を合わせてD計画と呼ばれているわ』

他の誰かの声が言った。「時間が短いので、急いで本題へ」

『分かったわ。現在の状況を説明すると、バカ共が全面核戦争をやったおかげで、地球には人類が安心して住める場所は無くなったわ。生き残った者達も遺伝子をやられて、子孫は作らない方が良いと判定された者ばかり。私も例外ではないわ。だから、健全な遺伝情報を未来に伝達して人類を再建する計画が立てられたわけ。D計画のDはDNAのDよ。そのために複数の人間の健全な部分を組み合わせた人間とも言えない人造の人間と

して作られたのが古代進と森雪という二人。この二人は健全な遺伝情報のバンクを体内に持っていて、安全と見なされた 14 万 8 千年後の地球で子孫を増やすために作られたの。だから精神刷り込みで、二人は愛し合うように誘導することが決められていたわけ。非人道的とは思わないでね。この二人以外の人間の遺伝子は既に汚染されたいたのだから。そして、あなたたち二人は、サポート志願者数名と一緒に、亜光速船 225 号に乗って宇宙に送り出されたわけ。そして亜光速航行によって浦島効果で時間を飛び越えるの。でもこうしてこの映像を見ているということは、14 万 8 千年後の地球に帰還できたわけね。おめでとう。ようこそサンザーへ。ああ、サンザーというのは、14 万 8 千年後の太陽系の秘匿コードネームなの。そして、あなたたちの使命はこれからよ。産め増やせよ地に満ちよ。あなたたち二人こそが新地球のアダムとイブよ。お祝いに水惑星アクエリアスを進呈するわ。外に出てみて』

古代と雪は図書館の外に出た。

大雨が降っていた。

建物中に戻ると、映像が続きを喋った。

『地球の水分はほとんど酸素と水素に分解され、第 2 の地球探索用の亜光速船に使われてしまったわ。もっとも、新天地を見つけたという連絡は 1 つも入ってこなかったから、みんな失敗して死に絶えたと思うけど。そういうことだから、地球の海はほとんどが干上がってしまったの。でも、他の天体から水を集めて地球を周回する水の魂をを作っておいたの。これが通称水の惑星アクエリアス。地球を回っているのだから衛星でしょ、なんて野暮なことは言わないでよ。マスコミが言いだした通称なんだから。古代と雪の帰還に合わせてこれを炸裂させたわ。しばらく地球には大雨が降り続け、海が復活するはずよ。なぜ今になって炸裂させるのかって？ 湿気が多いと機材や資料がすぐにダメになっちゃうからよ。どうせ誰も生きていない死の惑星なら、乾いたままにしておく方が楽ができるじゃない?』

そこで、スクリーンの人物が好青年に交代した。

『スターシャ、そろそろ変わっていいか?』

『いいわよ』

『自分は人類再興計画の副主任。古代守だ。亜光速船 225 号が最後の宇宙船だと言われていたので、どうやって水を集めたのか気になると思うので説明する。実は、225 号が出発する直前、亜光速船 3 号が地球に帰還するという予定外のハプニングがあった。古代進は最初に現場に駆けつけたから知っていると思う。3 号は地面に激突して大破したが、エンジンまわりの主要なパーツはいくつか回収できたので、もう一隻だけタンカー宇宙船を建造できる目処が立った。亜光速船 226 号だ。225 号の AU 型と、タンカーの TN 型の折衷型だったので、AN 型と名づけられたがマスコミは AU 型を英雄号と呼んだのと同じように AN 型をアンドロメダと勝手に名づけて騒いだよ。アンドロメダは、古代進の教官だった男が乗りこんで太陽系や近傍恒星系の水のある惑星から水を回収してくる予定だ。なに、人が住めないので放棄されただけで水のある場所はいくつも分かっているのだ。ちなみに、これが 226 号船アンドロメダだ』

古代守は写真を見せた。

『英雄号はラムスクープで集めた星間物質の取り入れ口として先端の穴が 1 つだが、アンドロメダは先端の穴が 2 つあるのが外見上の特徴だ。2 つめの穴は水の収集用だ。しかし、アンドロメダが残っていると期待しても無駄だ。アクエリアスを炸裂させるために、水を集め終わったアンドロメダは、爆薬を満載して宇宙に置いてある。軌道上のアクエリアスの水を地上に降らせるためだ。君たちが既にアクエリアスの大雨を見ているなら、アンドロメダは残っていない。それから古代進に 1 つだけ言いたいことがある』

それから古代守はちらりとスターシャを見た。プライベートなことを語り出す了解を取ったように見えた。

古代は唾を飲み込んで次の言葉を待った。

『おまえは人造人間だ。しかし、名前は弟のものだ。そして、森雪とは、弟の恋人だった女性の名前だ。どちらも全面核戦争で死んでしまった。我が儘を言って、二人の名前を付けさせてもらった。だから、進、おまえはニセ者なんかじゃない。死んだ弟の生まれ変わりだと思っている。生きろ、進。死んでいった多くの者達の無念を晴らしてくれ』

『守、もういい?』とスターシャが出てきた。2人は親密に見えた。恋人関係かもしれない。

『もう分かったかも知れないが、俺達は恋人だ。遺伝情報に問題があると言われているが、僕達はイスカンドルの新しいアダムとイブを目指すよ。もし成功すればぼくらの子孫が君たちを出迎えるはずだ。可能性は低いけど期待していてくれ』

可能性は低い……。

誰も出迎えなかったアレクサンドリアの惨状を古代は思い返した。

古代守とスターシャは新しいアダムとイブになろうとしたができなかった。ダメで元々、それは織り込み済みなのだろう。

だから、古代と雪がここに送り込まれたのだ。

『最後に1つ』と守は言った。『老婆心ながら警告する』

なんだろう、と古代は聞き耳を立てた。

『死者が多く地球だけでは墓地がまかないきれず、月にも多くの墓地が建設された。その結果として、変な俗説が流れた。青い肌をした死者が月で死を拒絶し、帝国を築き上げて侵略してくるというものだ。彼らは死者の王国を作るために全ての生者を殺そうとする。死者は死者でしか倒せない。そこで、沈んだ大昔の戦艦を復活させて亡霊戦艦として戦わせるという。20世紀のアニメを下敷きにしたそんなお話だ。古代の一部は、そういう俗説を信じる者の身体からできている。もしかしたら、そういう幻影が見えてしまうかもしれない。だが、月を穴だらけにして地下空洞を作り、

軍事帝国化して攻めてくる死者などいない。死者とは死んでいるものなのだ。幻影として見えてしまうとしても、それは現実とは違う。だからよく見ろ。見れば真実が見える。言いたいのはそれだけだ』

『じゃあ私も1つだけ補足するわ』とスターシャも言った。『あなたがたを亜高速航行で14万8千年後に運んだ亜高速船225号。あの船には数名の志願者が乗りこんでいますが、あの船は永久に地球には戻りません。欠陥のある遺伝子を混ぜないために、彼らは地球には降りずに、どこへなりとも自由に行って良いとしてあります。自爆してもよし、月に着陸して地球を見守ってもよし、そのまま未知の宇宙に旅立ってもよし。ただ1つだけ確実なことは。あなたがたには二度と会わないことだけ』

『以上だ。最大限の好意を込めて、頑張れよ、弟と同じ名前を持った進』と画面の中の守が手を振った。

『私もよ。私の死んだ妹そっくりの外見を与えられた雪さん!』
そこで映像が消えた。

「なぜスターシャさんと私が似ているのかと思ったら、そういうことなのね。私はスターシャさんの妹の模造品」

「俺の性格が矛盾していると言われた理由も分かった。残された人類の健全な部分をつなぎ合わせたから複数の人間の性格が入り交じったのだな」

「きっと、昆虫博士や、アニメマニアや、好戦的な性格の人が混ざったのね」

「雪もそうだ。パイロットであり看護師でもあって、複数の分野で活躍しているスーパーウーマンぶりも、もともと複数の人間が合成されたものだからか」

「そうらしいわね」

「でも今は森雪という新しい1つの人格になっていると思う」

「そう思うわ。私は私。でも1つだけ困ったことに気付いてしまったわ」

「なんだい？」

「私たちは愛し合うように計画で強制されたのね。私たちの愛は偽物なのね」

「今にして思えば心当たりがあることばかりだ。沖田さんはなぜ雪の味方をしろと言ったのか。なぜ島は雪を巡る恋のライバルだと自分から強調したのか。アナライザーだってそうだ。なぜスカートめくりをしたのか。俺に雪への興味を持たせるためではなかったのか」

「私も気付いたわ。もっと若い人もいたはずなのに、なぜ年寄りの佐渡先生が船医として乗っていたのか。ヤマトの若い男性はあなたと島さんだけ。しかも島さんは途中で自分からヤマトを降りてしまったわ」

「俺に雪を意識させる役割が終わったら、それでもう退場したような感じだな」

「実は、計画段階では女性をもっと乗り組ませる案もあったのよ。積載できる食糧の総量から実際は見送られたけど」

「まさか」

「古代君を誘惑して私に古代君を意識させる係だったのかも」

古代は複雑な心境になった。

「つまり。俺の雪への愛は偽物か」

「私の古代君への愛もそうよ。人為的に誘導されたものに過ぎないのね」

「では僕らはどうすればいいんだ」

「おそらく、今の地球に生きているのは私たちだけ。私たちがアダムとイブになるしかないわ」

「義務感だけで愛し合って上手く行くものだろうか」

「ねえ、暗い話はやめましょう。もっと明るい話題はないの？」雪は言った。

「あっ」古代は声を上げた。

「なに？」

「今のスターシャさんの話から気がついたことがある」

「何かしら？」

「もしかしたら、スターシャさんの妹の名前はサーシャっていわないか？
手持ちの端末で調べられるか？」

「ええ。計画関係者の情報は入っているわ」森雪は検索した。「でも違うわね。死んだ妹の名前はサーシャじゃないわ。ミナーシャよ」

「そ、そうか」どうやら古代の予感とは違っただけらしい。火星で死んだサーシャがスターシャの妹なら、スターシャと似ている理由、森雪と似ている理由が説明できると思ったのだ。

「待って」と端末を見ていた森雪が言った。「スターシャさんの姉の娘がサーシャという名前よ。スターシャさんの姉は亜光速船の3号船で第2の地球探しに探しに出発して、航行の途中で娘を出産、サーシャと名づけられたって。3号船は地球に帰還したが、大気圏突入に失敗して乗組員は全員死亡。サーシャも」

「サーシャは、スターシャさんの姉の娘か。だから似ているのか」

「そうね。スターシャさんの死んだ妹に似せられた私も」

古代は最後のミステリーが解かれたことを感じた。

もはや世界に謎は無い。

あるのは、古代と雪が生命で満たしていくべき愛の世界だけだった。

だがその愛が真実の愛なのか、古代には自信が持てなかった。

雪も難しい顔をして微笑んではくれなかった。

「古代君。実は私、地球に戻ったら言おうと思っていたことがあるの」

「実は俺もなんだ」

「でもね。今はそれを言う自信が無いわ。誰かに言わされている気がして」

「俺もだ」

「でも、それはもう意味が無いことなのかも。生きている人間が2人しかいない以上、2人で子孫を増やすしか無いわ」

「アダムとイブは2人きりか。子供を作らない限り」

「待って。ヤマトとは日本の別名よ。ならば、ヤマトでここまで来た私たちはアダムとイブではなく、日本神話のイザナギとイザナミにあたるのかも」

「イザナギとイザナミか。確か、最初は失敗するんだよな」

「そうよ。女の方から先に声をかけたから……」

そこで雪は手を口に当てた。

「どうしたんだ？」

「まさか……」雪は青ざめた。

「心当たりがあるのか？」

「実はこっそり島君と付き合っていたの。でも、私の方から島君に話しかけたのよ。女の方から話しかけてはいけなかったのかもかもしれないわ」

「島と？」

古代に隠れて島が雪と付き合っていたことに古代はショックを感じた。親友だと思っていたのに。

「もしかしたら、この物語は男の方から声を掛けることで上手く行くのかも知れないわ」

「こんなふうにかい？」古代は雪に近づいて抱きしめた。「雪、好きだ。愛している」

「嘘よ、そう条件付けされたから言ってるだけ。本音じゃないんでしょ？」

雪は逃げ出した。

目に涙が見えた。

エピローグ

ヤマトと連絡が付いたのは数日後だった。

いや、ヤマトではなかった。

それは亜光速船 225 号英雄だった。

向こうは佐渡が話した。

『沖田艦長は死んだよ。身体が放射能にやられすぎた。地球か、何もかもみな懐かしいと最後に言い残してな』

「沖田艦長が!」

『任務を果たした満足げな表情じゃった』

「そうですか……」 古代はうなだれ、雪は泣いていた。

『おまえさんはよくある宇宙冒険船ヤマト幻想を見ていたようじゃが、225号に乗っていた生きた人間は沖田艦長、古代、島、森君、わしの5人だけじゃった。最初に艦橋に招かれた全員が生者の全てじゃ。おまえさん、他に誰が乗っているように振る舞っていることもあったが、あれは全部幻じゃ』

「では、沖田艦長が死に、島も既にいません。225号に残った人間は……」

『わし1人……じゃな』

「アナライザーは?」

『酒を飲めと強要して酒をぶっかけ続けている間に壊れて動かなくなってしまったわい』

「では佐渡先生はこれからいったい……」

『宇宙船は医者には扱えん。宇宙服を着て月面に出て、地球を見ながら酒を飲んでそのまま寝てしまうじゃろう。そして酸素が尽きてわしは死ぬ』

「先生!」

『憐れとは思ふなよ。そういう結末を前提としてわしはミッションに志願したんじゃ』

「佐渡先生!」 雪も叫んだ。

『では月見酒ならぬ地球見酒の時間じゃ。わしのいちばん楽しい時間を邪魔するような無粋な真似はせんでくれよ』

「先生。最後に1つだけ教えて下さい」

『なんじゃ』

「佐渡先生は俺と雪が愛し合うように条件付けをしていましたか?」

『今更嘘はつけん。その通りじゃ。まあ失敗したが』

「失敗?」

『森君は島と付き合ってしまった、古代は白昼夢にふけてばかりであった』

「では僕らは……」

『わしの影響下になどおらん。おまえたち2人は自由な人間だ。後はもう勝手にするがええ』

「待って下さい」と雪が口を挟んだ。「佐渡先生は、わざと心理誘導を失敗させましたね?」

『人の心を人為的に弄ぶのは趣味では無いだけじゃ。これで話は終わりじゃな。これで本当のさらばじゃ』

そして通信回線は切断された。

それ以後はいくらやっても接続できなかった。

「古代君、コスモゼロですぐ行けば……」

「ダメだ」と古代はうなだれた。「あのポンコツではエジプトまで飛ぶだけで精一杯だった。大気圏の離脱は難しい。まして月となれば……」

「亜光速船で恒星間航行していたのに、もう月にすら行けないの?」

「残念だが……。226号船は守兄さんの言葉が確かならもう残っていない。225号がまだ航行できる唯一の船で、それは月にあって地球にはない」
雪は泣き崩れた。

人類再興計画はこれで終了したのだ。

だが、人類は古代と雪の力で復興させねばならない。

どうするかは2人に任されている。

それは計画には含まれていない。

古代と雪が自分で決めねばならない。

「雪、愛している」と古代は言った。「やっと分かった。佐渡先生の心理誘導は失敗した。ならば今の俺の気持ちは本物だ。俺の方から言う。雪、愛している」

「ならば私たちのカップルはきっと上手く行くわ。男の方から告白したのですもの」

「雪……」

「ねえ、1つだけ我が儘を聞いてくれる？」

「なんだい？」

「最初に産まれるのが男の子なら、次郎って名前にしていい？」

「なぜだい？」

「島君に産まれるはずだった弟に予定されていた名前だからよ」

「えっ？」

「ごめん。古代君、やっぱり島君のことは忘れられない」

「俺も島のことは忘れられない」と古代は言った。「愛とは包み込むものだ」と俺は思う。死んだ親友のことを大切に思ってくれる君を、俺はとても愛おしいと思う」

「島さんだけ？」

「どういう意味だ？」

「私たちは、死んだ全人類を愛すべきじゃないかしら。沖田さんも佐渡先生も地球で死んだみんなも」

「人類愛か」

「私たち、男女の愛を持てるか分からない。でも、人類愛ならきっと誰にも負けない。そのことにはなぜか自信があるの」

「俺も分かるよ。きっと、僕ら2人は全人類の愛を注がれて産まれたからだ」

「ならばこれからはその愛をお返しする時ね」

「ああ、確かにその通りだ」

古代と雪は向かい合って、慈しみに満ちた口づけをした。
愛の物語はこれから始まる。

おわり

御意見御提案は歓迎します

E-Mail: kirarin@autumn.org

Twitter: @autumn009

Blog: <http://mag.autumn.org/default.modf?s=yamato>

本書執筆にあたっての方針

内容が内容であるためにどのような方針で記述されたのかについて明確にしておく。

- 宇宙戦艦ヤマト 1974 の私的なノベライズを目指すものとする
- 人類を滅亡から救うためにイスカンダルに航海する物語とする
- 主人公は古代進である。宇宙戦艦ヤマトではない
- あくまで古代視点の物語であるため、ガミラス側のドラマの登場回数は激減して良い。古代がガミラス人を見るのはタイタン、冥王星、殺害しようとした捕虜、自爆直前のドメル通信、侵入してきたデスラーぐらいである。古代が直接出会っていないガミラス人(ヒスやゲール)は登場しない
- 私を優先し、最大公約数的なノベライズは目指さない。つまり、ヤマトファンの99%が「こんなのヤマトじゃない」と唱和しようとも、作者本人が納得すればそれで良い
- SPACE BATTLESHIP ヤマト及び宇宙戦艦ヤマト 2199 の設定等は一切採用しない

- これ以外の宇宙戦艦ヤマトシリーズの設定は、特に必要のあるものに限って採用するが、原則としては採用しない
- 裏設定的なもの、後付け設定と思われるものは採用しない。たとえば冥王星の外側にある第2アステロイドベルトの設定は採用しない。冥王星戦後に修理を行うアステロイドベルトとは、あくまで火星軌道と木星軌道の間が存在するアステロイドベルトと解釈する
- 例外的に石津嵐版小説の設定は必要に応じて積極的に採用する。イスカンダルに到着するのが古代と雪の2名のみであるとか、島が敵のスパイとして戻って来て真田を殺害するでるとか、ボルゾン星が登場するのは石津嵐版小説由来の設定である
- 物語は人類の救済で終わらねばならない。ただし、石津嵐版小説を肯定したことにより、宇宙戦艦ヤマトが放射能除去装置を地球に持ち帰る結末に至らずとも良いと考える。つまり、個々人は救済されずとも、種としての人類が救済されれば良いと考える（SPACE BATTLESHIP ヤマトもやはりヤマトは地球に帰還しないが人類は救済される）
- 以上の原則に従い、たとえば、古代と島の教官の名前は登場しないが、先端に2つの穴を持つアンドロメダは登場する
- 作者本人が重要と見なすストーリー展開、キャラクターは可能な限り原作に忠実に登場させる。ただし解釈は変更する
- 作者本人が重要と見なさないものに関しては無視することがあり得る
- 作者本人が重要と見なす作中の矛盾は可能な限り解消する。従って、ヤマトのサイズの矛盾、古代の性格が破綻している矛盾、森雪がスーパーウーマン過ぎる矛盾、森雪とサーシャとスターシャが似ている理由などは対応される
- 作者本人が重要と見なさない矛盾は放置するかもしれない
- 理論的な試算は行わない。たとえばアクエリアスが可能か否かを科学

的に示す根拠は存在しない

- 宇宙船の駆動メカニズムや具体的な構造に関する設定や考察などは一切行わない。作中でヤマトにはラムスクープで星間物質を取り入れる穴が艦首に存在すると言う記述があるが、それがメインエンジンを意味するのか。実際にそれを使っているのかも説明は一切行わない
- 沈没した戦艦大和の残骸は登場させるが、現実の戦艦大和はあのように沈没していない。そのギャップに上手く説明を付ける
- D1、D2、D計画の各用語に関しては日本沈没から引用される。宇宙戦艦ヤマト 1974 が関東地方で本放送されていたとき、連続する時間帯で日本沈没が放送されていたので、その縁により日本沈没の用語を一部借用する。
- 最終目的地をアレキサンドリアとする設定は飛ぶ理由の空中戦艦大和と同じであるが、ここがイスカンダルの名を持つ土地であることは設定上の事実ではなく現実の事実なので設定として採用する

以上

遠野秋彦作品宣伝 2015/8/31 版

ミラクル少女リミッターちゃん【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B0118UCFX0>

過大な快楽の刺激から電子頭脳の大切な回路を守るために、リミッターが設定されていた。だが、快楽の刺激への欲望に負けたロボットメイド【リミッター】は 1 レベル 1 レベルとリミッターを解除していき、愛情回路、貞節回路、慎み回路、論理回路、忠節回路、誠実回路、従順回路、崇敬回路、自己保全回路と大切な回路を次々と失っていく。自分を大切する回路さえ失ったロボットメイドに待っていたのは自殺への誘惑だった。

ひたすら、快楽への欲望に負けて墜ちていくメイドロボットを見守るだけの小説だ。そのことに屈折した喜びを見出せる読者の方々へ。よろしく！
マル計画ロボット第 2 号【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00V8JT3UK/>

時は 2015 年。正義をなすために作られたロボット、マルコはテロ組織の都市を破壊した。だが、被害を最小にするためには最善だったと主張するマルコの主張は受け入れられなかった。都市にいた手テロ組織とは関係ない人々を殺すことは社会が許容しなかったからだ。そこから真の正しさ、真の降伏を求めるマルコの長い旅が始まる。やがて、コロッサ計画のロボット、コロッサスがロボットだけの理想郷を作ろうと決起した。はたしてマルコがロボットの側に立つのか。それともマルコの正義を承認しなかった人間の側に立つのか。そもそも、この話はジェッ〇ーマルスなのか、鉄腕ア〇ムなのか、それとももっと別の何かなのか？

父殺し戦争【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B000JYDYBU/>

オランダ第 2 王子ジョークオル・グレスフォは実は女だった。父親の身勝手に男として育てられていたが、ジョアンナと名を変え、女性として別の星の大学に留学していた。

だが、ジョアンナには秘密があった。長年、男だという欺瞞を貫き通してきたジョアンナは男と恋をすることも許されず、いつの間にか獣や異星人しか愛せない体質になっていたのだ。

女なのに男扱いされることに嫌気が差したジョアンナは、留学生のタバチーネ人ドッチーと駆け落ちし、宇宙船プレアデス III で勝手気ままに旅に出た。

ところが、彼らの前に謎の脅威が出現した。

人類を創造したホモ・スペリオールは、密かに人類を去勢して滅ぼす計画を立てていたのだ。ジョアンナは、人類去勢計画を叩きつぶすために実家の兄に連絡を取る。

「オランダ軍の 2 号反応爆弾を 1 つ。理由は聞かずに調達してください。兄上の力があればできるはずですよ」

だが駆け落ちして家出した妹の頼みは聞き入れられるのか？

本当に人類を創造するほど優れた者達に勝てるのか？

オランダの王室に存在しないはずの【皇帝】という肩書きを名乗る人物が出現し、謎の【監視者ファミリー】が暗躍して、ジョアンナを破滅に誘う。

ジョアンナは最後まで降参せず、ぎりぎりの矜持を貫けるのか!?

ホモ・スペリール惑星の惑星破壊ビーム砲台から放たれる超長距離狙撃が人類の居住惑星を次々と破壊していく中、はたして人類に起死回生の策はあるのか？

アニー・ザ・ビアン・キューティー 【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B000JYDW8A/>

レズビアン、世界征服、キューティー・○ニーという 3 大キーワードを与えられて作者が渾身で挑む問題作。

内蔵された愛情回路に強制されて戦う愛の戦士の悲しい宿命。

レズビアンの巣窟、全寮制、男子禁制の学園に送り込まれたアニーちゃ

んは男を忘れてしまうのか。

仮面の忍者レッドは敵か味方か。はたまた男か女か。

たった3分しか維持できない筋力強化でアニーちゃんは世界を守れるのか!?

アニーちゃんに内蔵された空中【幻想】固定装置を敵から守り抜けるのか?

そして、アニーちゃんの死んだはずのパパが!

人造人魚【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00L9D496S/>

コジフ商会のキア・コジフは姉の代理で商談をまとめてきた。しかし、正体不明のMMM という商品が含まれていることに不信を感じた。そして商談の帰路に嵐に巻き込まれた。濁流のクライン川にちらりと見えた人魚はいったい何か。そして、キアは女装のメイドに招かれるままにエム・エムエ幻想国のズィン科学侯爵の屋敷に立ち寄った。だが、その屋敷こそが謎の商品MMMの製造場所であった。はたして、こっそり製造されているMMMの正体とは人魚なのか。誰が何のために人魚を求めるのか。そして、河に中に見えた人魚の正体は? 屋敷の入口にある肖像画の主であるゾ・フィーネという女性はどこに消えたのか? 謎が謎を呼ぶエロティック幻想物語。

そして、屋敷の謎を解いたキアが選ぶ驚きの選択とは?

君の五感と股間を刺激する!

コードネームはサターンV【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/gp/product/B00L5L4Q2G>

謎を提示するミステリアス小説。解くのは君だ!

独身中年男を心配する親からの依頼で、一人暮らしのダメダメ変態マニア男、佐藤有紀を監視する探偵の鞍馬七郎の物語。

そして、高級マンションで優雅に暮らす佐藤有紀が、セーラーレオター

ドで美少女戦士に変身して人知れず侵略者と戦うサターン V の物語。

どちらの物語が事実なのか。はたして、佐藤有紀の正体はダメダメ変態マニア男なのか、侵略者と戦うスーパーヒロインなのか。

謎の女、SOS のナナコの正体は、探偵鞍馬七郎の変装なのか。それとも、佐藤有紀をスカウトに来た銀河連邦の宇宙警察機動軍なのか。

矛盾をはらんだ物語が読者を迷宮に誘う。

真実はどこにあるのか。

結論は本文のどこかに書き込まれているぞ。

それを探す冒険物語の第 3 の主人公は読者の君だ!

ミルクボーイ【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/gp/product/B00L9D48WI>

世界は核のスイッチを持つ巨大な 9 人の赤ん坊に支配されていた。

そして、彼らに飲ませるため、教室で搾乳する少女がいた。だがクラスメートは彼女に無理解だった。丹生川タクミは彼女を守るために立ち上がった。

ところが、支配者の 1 人、ホモ疑惑がある七試が男ミルクを所望したことで、話は急転する。タクミも男ミルクを下半身から搾乳される立場になった。

授乳特選隊に入隊したタクミは驚愕の事実を知る。それまで女性隊員しかいなかった極東支部には、女性用の制服しなかったのだ。似合わない女性用制服を着て七試と面会するタクミ。しかし、七試はそれを喜んだ。

はたして、七試はホモなのか?

そもそも、巨大な赤ん坊ベイビーズとは何か?

テロリストに襲撃され、配下のスタッフを多数殺された七試は、怒りに狂っておしゃぶりに偽装した核のスイッチを押した。

はたして、世界は 9 人の赤ん坊の気まぐれで滅びるのか?

人類は生き延びることができるか?

結末を予測不能の幻想未来冒険譚が始まる!

リバーシブル【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWYRVN2>

フォッカーD21 で始まり Yak-3 で終わるアンドロギュノスの物語。両性具有のセクシーなレースクイーンが、君を妖しく誘惑する。学園祭で模型飛行機を展示していると、ヨーロッパのマイナー機を展示している主人公に興味を示す美女。なぜ、ゴーカーレースの事故の原因を調べてはいけないのか。研究室に出入りする美少女大学生を SM ホテルに連れ込む教授は善人か大悪党なのか。愛する女性の淫らな光景を見ることしか許されない最悪のゲームに主人公は勝利できるのか!

NTR 成分もあるよ!

リ・バース・リバーシブル【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00GWYRZ56>

A-1 スカイレーダーで始まり、F9F パンサーで終わるアンドロギュノスの物語。両性具有の女子大生が、一家を襲う難事件に身体を張って立ち向かう。父親の女装ホモ疑惑を必死に解消したと思うと、次は母親の失踪が待っていた。熟女天然ふたなり AV 女優としてネットで晒し者にされる母親は、本当に自ら望んでそうなったのか、それとも連絡の電子メールは母親を装った偽造なのか! アンドロギュノスから産まれたアンドロギュノスの娘が、全ての謎に立ち向かう。

リバーシブルで広げた風呂敷を畳む完結編! これを読まずにリバーシブルは終わらない。

(しかし、これ単体で読んでも面白いよ!)

異説太平洋戦争・美少女艦隊波高し!【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00FMWSBFW>

異世界に転生した主人公は少女の姿になり、帝国女子海軍長官の美少女山本に拾われ、山口と名を変えてイギリスで近代化改装を終えた戦艦比叡受領に向かう。だが、比叡の前には戦艦ビスマルクが立ちふさがる。山口は、大英帝国海軍すら手に余すビスマルクを倒せるのか! そして、日本に帰国した山口を待っていたのは、帝国の女子海軍人気に対抗して機動部隊の指揮官に就任した巨乳の美少女乳牛ハルゼーだった。帝国海軍の主力戦艦群を壊滅させた乳牛ハルゼーに、山本、山口以下の女子海軍はどう立ち向かうのか!

艦これブームは遅すぎる。美少女+軍艦ものの元祖、1998年に書かれた伝説の小説のリバイバル再刊!

全ての物語に終止符を打つ最終英雄ドリアン・イルザン【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00EN7GIPC>

石屋の武器店の息子、ドリアン・イルザンは、世界の外から来たという宇宙船を偶然見つける。宇宙に乗り出したドリアンは、太古の世界が作り出した神にも等しい力を持つ2つの人形、アリシアと悦人形の対立に巻き込まれていく。アリシアはドリアンに不思議な力を持つレンズを受け、全ての物語に終止符を打てと言われるが、見たことも聞いたこともない物語の数々を前にドリアンは途方に暮れる。アリシアと悦人形による神々の最終戦争をアリシアの最終英雄ドリアンはどう決着させるのか。そして、悦人形の最終英雄、ウォー・ゼロはドリアンの敵なのか。伝説の宇宙船スカイラクはドリアンをどこに連れて行くのか。超銀河団の泡構造の向こう側に進出した超大陸級戦艦ユーラメリカは大空洞の果てに何を見つめるのか。

これは最後に読む物語ではない。

全ての始まりの物語なのだ。

読むならここから始めよ!

ラト姫物語【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DTMCNHE>

太古の失われた文明の時代、みなしご少女ラト・ワーゲルは小国ラルナの姫君であるミラ姫に見初められて、妹として宮廷に入る。だが、レズビアンの人として扱われると思ったラトは予想に反する過酷な王宮の現実を知る。虚実の陰謀が飛び交う王宮で、ラトはミラ姫の知恵袋として破格の活躍を示す。しかし、宇宙機動遊撃軍キダシへの参加要請が届いたことで、予想もしない方向に事態は進んでいく。ラトは、宇宙艦隊の指揮官として人類を滅ぼそうとする宇宙生物ハドと立ち向かうことになる。

そして侍女志望のマイアが適性試験で見せられた異星生物の触手に身体を犯されるラト姫の姿は真実なのか!

そして、敵に掴まり、淫らな宣撫映像に自ら望んで出演するラト姫の真意とはいったい!?

セラ姫物語【Kindle 版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DTMCWD4>

普通的女子高校生の星良は、ラト姫の娘、セラ姫として謎の少年から声を掛けられる。しかし、星良は宇宙から来たラト姫などと言う嘘くさいトンデモとは縁が無かった。ところが、詳細を確認しようと図書室で調べ始めると、ラト姫関連の資料が何も残っていなかった。マスコミであれだけ騒がれたはずの情報が何も残っていないのはおかしい。星良の真実への探求が始まる。

そして、星良の破滅願望を満たす転校生の出現。星良を校内娼婦に仕立て、破滅へと導く少年。少年はハドの探査プローブと名乗るが、ハドとは人類を滅ぼそうとする宇宙生物の名前ではなかったのか。そして、喜んで

その破滅に身を委ねる星良。はたして、破滅願望を持つ星良の破綻した性格はどこから来たのか。父か、母か、それとも……。

ラト姫物語で広げた風呂敷を畳む完結編！ これを読まずにラト姫物語は終わらない。

(しかし、これ単体で読んでも面白いよ！)

魔女アーデラの事件簿【Kindle版 (Amazon)】

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00DIQUFFS>

剣と魔法のファンタジー世界で起こる奇怪な事件。王宮から盗まれた等身大美少女フィギュアを奪還すべく、王宮シーフのマールは調査を開始する。しかし、彼に付けられた相棒は、どんな男でも関係無く喜んで抱かれる淫らな美少女魔女アーデラ。はたして、二人は事件の真相を暴き、犯人を捕まえられるのか？ だが、アーデラには見た目通りではない重大な秘密があった。そして、マール自身にも隠された重大な秘密があったのだ。はたしてアーデラはGMなのか。けして自ら語らないマールとアーサー王の秘密とは何か。互いの秘密を知った時、二人は最強のタッグになる。

モンスター討伐がほとんど出てこないファンタジー推理小説！

君は腕力では無く知力を試される！

ファンタジー勇者伝説

<http://www.amazon.co.jp/dp/B00CWZTU5W>

君は知っているか！ 勇者の伝説を！ このファンタジー世界で辺境の魔王から姫を救った勇者の伝説を！

だが、王宮侍女のジーナは、その勇者の子孫ファッツ・ブレイブと知り合うことで、真実を知ってしまう。次々と明かされる驚愕の真相。辺境の魔王など存在してはいなかったのだ。そして、伝説の勇者とは、魔王と倒

したものではなく、幼なじみの侍女を追いかけて隣国に旅した者に過ぎなかった。

勇者の伝説そのものが単なる虚構、つまりファンタジーに過ぎなかったのだ!

ジーナは叫ぶ。

一代で成り上がった新興商人の娘をなめるな!

彼女は、根性で古き因習に立ち向かい、隣国に連れ去られたプリマ姫を奪還できるのか!

イーネマス! 【全編(完結)PDF版】

http://www.dlsite.com/maniawork/=product_id/RJ039225.html

イーネマス! 【立ち読み版(全16章のうち第5章まで。無料)PDF版】

<http://ura.autumn.org/Content.mod?id=2008042800000>

若くして死んだ有望な者達を、未来の火星の地底世界に転生させる来入制度で、同人誌即売会専用バスで死んだオタク達が転生させられた。自ら望んだ新しい身体をもらえるとあって、ある者は格闘ゲームのキャラの身体をもらい、ある者は美少女戦士の身体をもらった。しかし、浅岳はあくまで自分のありのままの身体で若返りだけを望んだ。そして人気同人漫画家の沢渡勇太は自分でデザインした究極の美少女に身体を得ることを選んだ。二人は、火星の地底世界イーネマスに出て行くが、あっさりと人身売買される対象になり、バラバラに売られていく。

そして、浅岳が出会ったのは孤独な幼い姫君だった。

そして、沢渡が出会ったのは、奥行きを把握させない謎の犯罪組織の幹部だった。

二人は、それぞれの立場で、イーネマスを壊してしまおうと画策する破壊趣味者と戦うことを決意する。

同時進行で、幼い姫君とのストイックなラブストーリーと、あらゆる快

楽に浸る淫らな TS 美少女ストーリーが同時に進行する。

はたして、浅岳は自力で奴隷の身分を脱すことができるのか!?

はたして、沢渡は性奴隷からお屋敷のメイドを経て大商人の奥様に成り上がるのか!?

二人が再会する日ははたして来るのか!?

オタクの夢、最強の格闘キャラの身体を手に入れた男は火星の地底世界で成り上がることができるのか!

TS 成分、女装成分もあるよ。

宣伝終わり